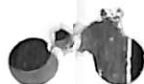
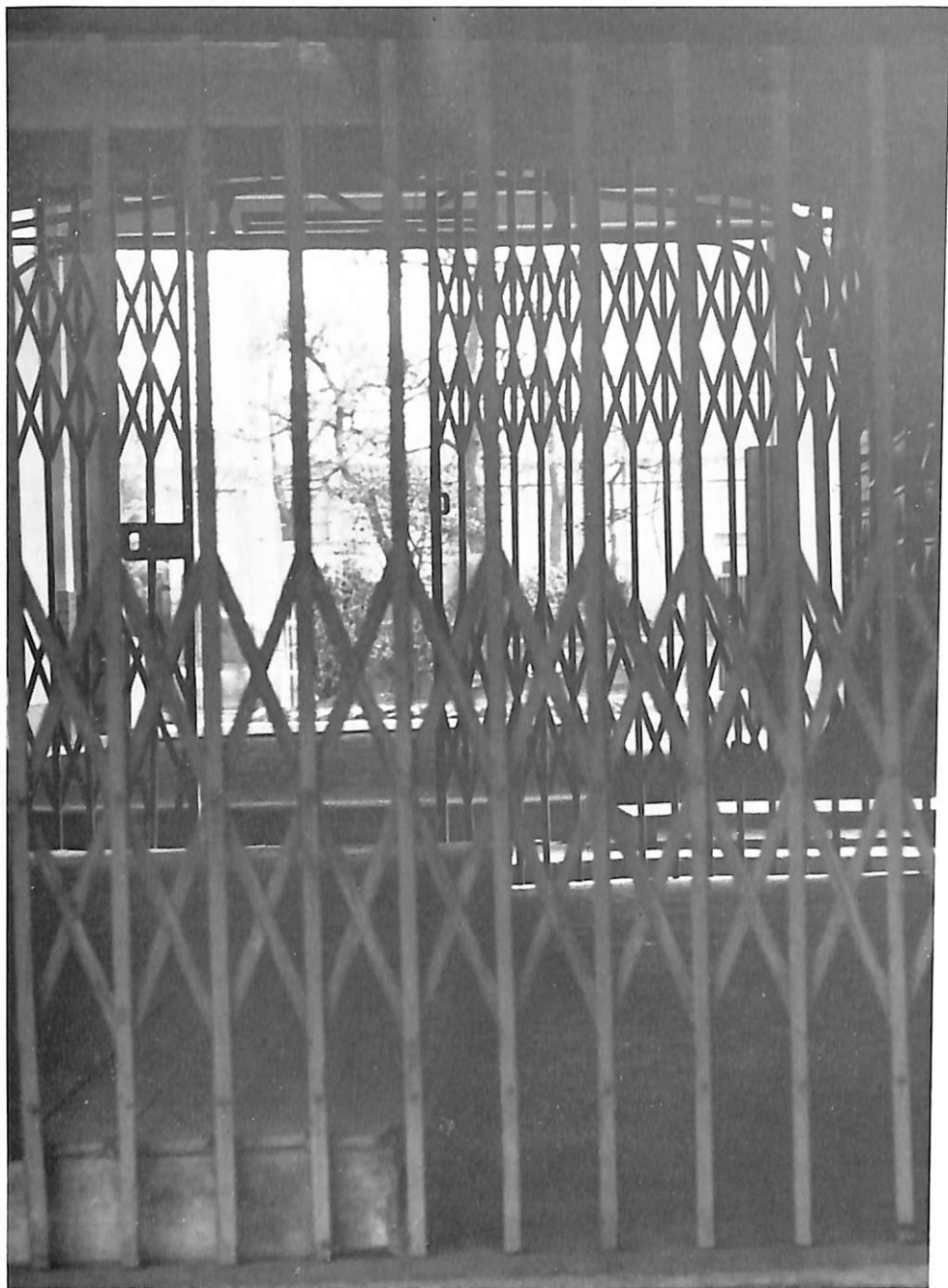


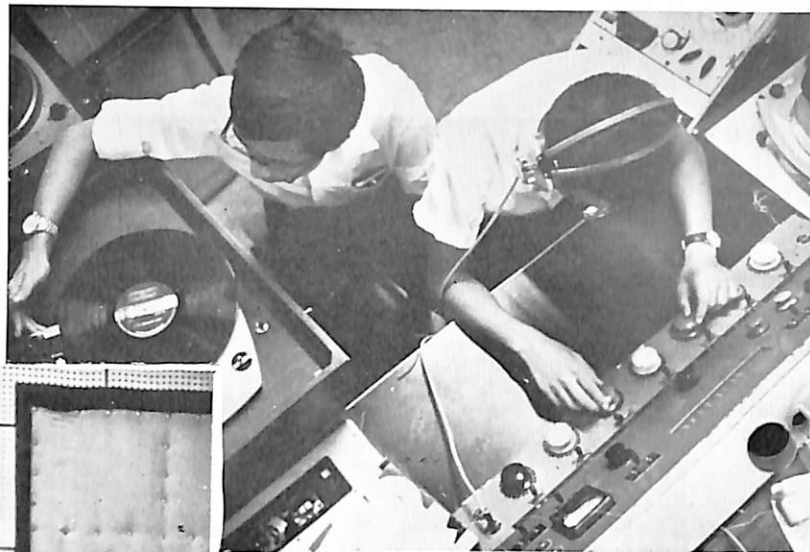
	No. S - 67

東京都立松原高等学校図書

保存用
永久保存

Le Coeur
14



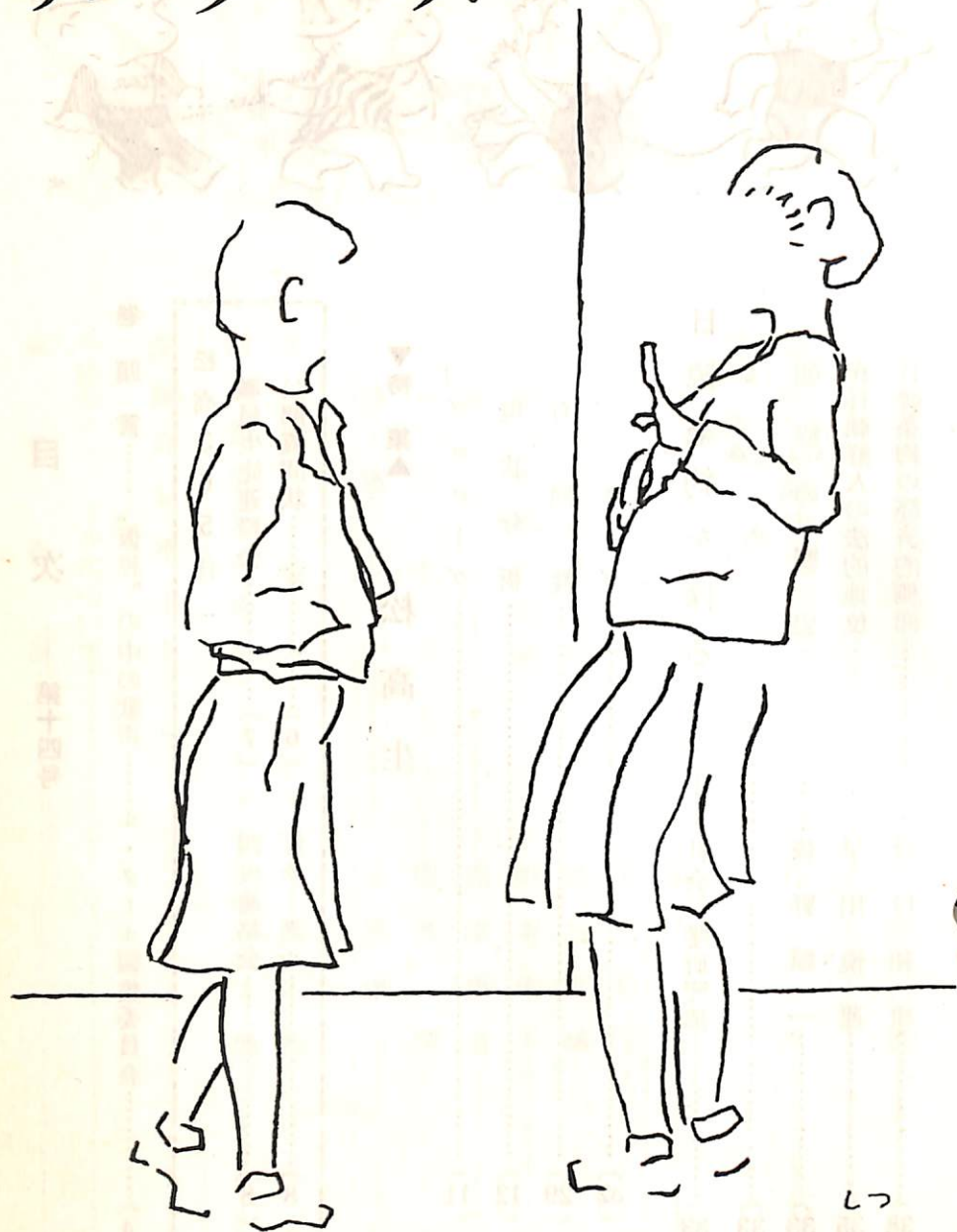


放送室に於て スタート5秒前

体育祭 若きますらおたち



ル・クール



松原高校生徒会



ブラスバンド部 ソレ!ならせ

目次 — 第十四号 —

巻頭言……「仮説」の中の歌声……ル・クール編集委員会……………(4)

松高365日

職員生徒連絡会……………(7) 四校連絡会……………(8)

公開質問状……………(6) 灯サークル……………(8)

▼特集▲ 松高生

プロローグ……………(11)

現状分析……………(12)

方向性……………(29)

エピローグ……………(32)

日韓条約を探る……………社会科学研究所……………(33)

はじめに……………(33)

朝鮮の歴史……………佐野順一……………(33)

在日朝鮮人の法的地位……………早川悦運……………(35)

日韓条約の経済的側面……………野口和康……………(38)

日韓条約の軍事的側面……………青柳進……………(40)

終り……………(43)

重症心身障害児問題……………灯サークル……………(44)

▼創作▲

穴……………金子進……………(53)

切符……………十三和子……………(55)

川と花のある町……………野呂宜輔……………(58)

ある青春の記録……………須永玲子……………(61)

愛……………志津雅美……………(65)

エッセイ……………滝井清……………(72)

詩・窓の中……………目黒康一……………(74)

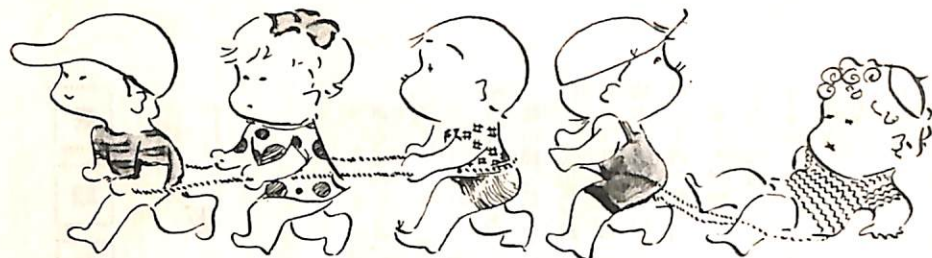
責任と協力……………中溝正枝……………(75)

教育政策と自治会……………羽根田文男……………(77)

生徒会レポート……………(81)

今後のル・クールについて……………(101)

編集後記……………(103)



仮説の中の歌声

ル・クール編集委員会

考えてみると私たちは随分便利な時代に生きている。買いたい物があればすぐ手に入る。水を飲むにも別に苦労はいらない。ハンドルを30度も回わせば済む。急病だからといって別に心配する事は無い。電話一本で白い自動車がお迎えに来てくれる。食事をするにもたいした手間はいらない。袋に入った固型のソバを三分間もお湯に漬ければそれで万事OKなのである。

此の様に私たちは非常に便利な時代に生きている。だから私たちは毎日毎日を生きていくのにそんなに苦労はいらない。『全定交流』を盛りあげよう。等といっても、実際ビーンとくる人は少ない。『私たちは学生だから』ということで生活費のことなど考えたこともない人たちが事実私たちの大部分である。私たちは学生を全日制とイコールで結ぶ。定時制のことは頭がない。考えようとしな。故に私たちは定時制の現実を本当に知らない。だから私たちは毎日の生活を暢気にそして大変SMOOTHに送っている。

私たちは時々、バカに生活とは楽なものなのだなあ。などとぼやく。もう少しスリルとサスペンスに満ちていたらなあ。と欠伸をしながら考えたりする。しかし、それを実際行動に表わすかというところでもない。生活するのにたいした手間が掛からないのだから、それだけ時間に余裕があると思うのだが、どうした訳か実際行動となると中々しない。

私たちは週に一回L・H・Rの時間をもつ。私たちはH・Rの時間には皆んなで話し合って、学校、クラスのより向上の為に、そして、その中から集団生活の尊さ、意義を学ばなければいけないと云う事をよく知っている。しかし、実際にいざ意見交換という事になると、中々口を開かない。議長は口を開かすのに汗をかくのが現状である。

私たちはどうしてこうも自分を押し殺す事に長けているのだろうか。私たちはこれを押し殺して受験一本になっているのかというところでもないらしい。では一体何の為にこうも自分を押し殺しているのだろうか。そのくせ、陰では不満を平気で打附ける私たちのなのである。

私たちは何時の間に、こんなにひねこびた性格になってしまったのだろうか。私たちは、小さな頃から現在の私たちだったのだろうか。そうではない筈だ。私たちには何でも言い、何でもまっさき駆けて遊んだ積極さと、悪かったらすく謝れる素直さがあつたではないか。あれはどこにいつてしまったのだろうか。そしてその原因はどこからきているのだろう。

私たちは与えられることに慣れてる。生活自体がそうなのだ。全てがク棚から牡丹餅ク式に享受されるのである。私たちは矢継ぎばやに多くのことを覚えなくてはならない。小さな疑問等にかまつている暇は無いのである。そして、後で私たちは何も知っていない自分を発見するのだ。

例えば私たちは化学で質量不変の仮説を学ぶ。私たちは必死になってこれを知る。授業ではこれに関する計算問題を私たちはやらされる。そのうち、私たちはこれを覚えてしまふ。そして、いつの間にかこれこそ客観的真理なのだと思ひこんでしまふのである。なぜなら、授業では結果のみを力説してしまつて、仮説であることを力説しないからだ。私たちの中には、質量不変の仮説は知っていても、仮説であることを知らない人がたくさんいる。要するに私たちの生活とはこんな工合なのである。

私たちはよく受験勉強一辺倒ではないといけないといわれる。勉強の中から、考える喜び、創造する喜びを学ばなくてはならないといわれる。私たちは本当にその通りだと納得する。しかし、実際どうしたらよいのかわからないのである。なぜなら、全て大部分の物は既成品であり、授業その他すべての日常生活があくまでクうけ取るク側であり、現在あるものは絶対だという妙な神話が私たちの奥深くに潜在するからなのだ。

私たちは、まだ生を受けてから二十年に充たない。私たちはたつた二十年に充たない経験で全てを判断してはいけないと思う。私たちにはしなびているかも知れないが夢がまだ残っている筈だ。私たちは今萎んでしまふべきではない。人生は長い、何時でも萎むことは可能なのだ。そんなことより私たちは自分たちのしなびた希望に、夢に、肥しをやり水を与えることに精力を費やそうではないか。

私たち、若ものには、スピード、暴行、スリル、セックス、喫煙、などでは到底表現出来得ない何かがある筈だ。私たちは質量不変の仮説の中の仮説の中にかすかな希望を見出して、大きく躍動しようではないか。



編集部

公開質問状

公開質問状が公布された時を思い起こしてみると、松高の生徒会の実態が把握されると思う。

質問状は四項目にわけて、H・Rのことや生徒会長の祝辞事件等が生徒側から学校へ質問するという形で公布された。公布された時、学校も生徒も色めきたった。第一回の公聴会などは生徒ホールをうずめてしまい、活発な討論が展開された。翌日、公聴会は、生徒会総務及び学校に対するアピールを揚げ、生徒総会開催の署名運動をはじめようというほどの盛り上がりであった。

しかし、この雰囲気もいつのまにか立消えになり、第一回職員生徒連絡会を開くという段階で実質的に終ってしまった。

理由の第一は、生徒会総務が穏便にことを済ませようという態度に出たこと。第二は、学校側から、これ以上騒がないように強い要望があったこと。そして第三に、生徒自身が非常にこの問題に対してあいまいであったことがあげられる。

これはあるクラスの一風景である。
H・R委員 「これから公開質問状について話し合いたいと思います。」

生徒A 「急にいわれたってわかりやしない。生徒会と学校の意見

を聞かしてもらおうじゃないか。」

生徒B 「そうだ、そうだ、両方つれてこいよ。よく聞いてやるから。」

何よりも決定的なのは、生徒の一人一人が生徒会を構成している一人であることを自覚していないことにあると思う。生徒会とは生徒会総務のことだと考えている人がたくさんいるのではない。

生徒会総務の行動も考えてみると非常に先走っていたと思う。問題点が公示する程重要であったかという疑問が残らざるを得ない。大いに反省すべきだろう。それから、くやまれるのはなぜ自治委員会を通さなかったということだ。こんなところにも、生徒会の機構が非常に日常生活的でないことがうかがわれる。自治委員会の軽視も故意ではあるまい。今までの活動の仕方が、そのまま、ここにも表われたという感をぬぐいきれない。

公開質問状は(その是非は一応別として)今期の生徒会の大きな曲り角であったような気がする。これによって松高の生徒会が活発化されたとは思えない。しかし、新しい傾向

(例えば職員生徒連絡会等)が出てきたことは明らかである。生徒会総務は空中分解したことを今後のヤスリにして、発展することが望ましいことである。

公開質問状を通して表わされた数々の問題点、それらは小さな事であったかも知れないが、けっして私達に関係ないとはいえない。生徒一人一人が生徒会を構成しているということ——これだけでも大きな教訓となるのではないだろうか?

職員生徒連絡会

職員生徒連絡会は、公開質問状を機にして始まった。一月二十八日に第二回の連絡会が開かれた。その時の問題は、校舎改築についてであった。これが開かれる一週間ほど前定時制から、校舎建築の要望書と署名用紙が回ってきた。全日制においては、これが回覧され、公然の秘密となつて、署名が続けられた。

問題点は、定時制の先生が何も知らないというところからはじまった。しばらく話し合いが続けられたが結局、署名は一時ストップということになった。今後、学校と生徒が一

四十年四月

八日 始業式。大掃除。

九日 入学式。

十日 対面式。

十七日 生徒会役員選挙(副会長、会計、書記)

二十三日 第一回常任委員会。

五月

一日 メーデー。第一回実力テスト(一・二年のみ)就職懇談会。

八日 映画教室「東京オリンピック」

十二日 三年のみ実力テスト。

十三日 校外授業一年筑波山、二年大

島、三年、箱根

五月

十五日 進学懇談会。

十九日 一年身体検査。

二十日 二年身体検査。

二十一日 三年身体検査。

三十一日 中間テスト始まる。

六月

五日 PTA総会。

六日 クラス・マッチ始まる。

七日 十九日まで教育実習。

十九日 三者懇談会。

二十一日 実力テスト。

七月

九日 期末考查始まる。

二十日 終業式。演劇部独立公演「赤い雪」

二十一日 館山臨海始まる。

八月

合宿。

一日 始業式。十四日まで一名教育実習。

十日 実力テスト。

十六日 進学講演会。

二十日 午後ツタンカーメン展見学。

体となって、この運動をしたいという生徒側の要望で話し合いは打ち切られた。

連絡会は、元来、職員と生徒の連絡を密接にということが始まったものであるから、生徒の生活の問題を話し合いたいものだ。校舎の問題も、署名がどうこうという問題に終始してしまつて、生徒が生活するのにどうかという問題にまで深く入らなかつたように思える。今後、日常生活を話し合うことを強く要望したい。と共に、生徒自身も、常に、"生徒会活動"等でこれらのことに目を向ける必要があろう。

四校連絡会

四校とは、千歳、明正、千歳ヶ丘、そして松原のことである。生徒会総務は去年頃から高校の生徒会の横の連絡が欲しいと考えていた。それが今年になって急速に話が進展して今回のこびになったのである。この会が生まれるまでには、随分多くの困難があつたが、第一回連絡会は、なごやかな雰囲気活発に意見の交換が行なわれた。

この会を通して、まず言えることは、どこかの学校でも生徒会が沈滞しているということ

である。生徒と総務の間の溝は意外に深いように思われる。

話し合いの論点は、生徒会の自治についてという問題が最もクローズアップされていった。高校の自治は、大学の自治とは明らかに違う。では、この高校内における自治はどこまで話されるのであろうか。

問題点はさらに広がり、高校における政治活動の是非の問題にまで発展した。千歳では今、学校内で政治活動の是非について活発な生徒議論が開かれていくという。

それぞれの問題についていちいち具体的な結論は出さなかつたが、今後この回が、高校の沈滞化を打開する一つのきっかけに成り得れば、この会の持つ重要性は、増々大きなものとなるであらう。

全体として、話題がまだまだ、抽象化されてしまふ傾向があつたが、お互いに、活発に話し合えたという点では大きな成果だつたのではない。今後、生徒会を担う人達は、これを増々発展させる任務があるように思われる。ただ千歳ヶ丘の欠席は残念な気持ちである。

灯サークル

いつまでたつても問題解決にはならないのではない。彼らを私達と同等に見なし、一緒に問題解決に望むことが望ましいと思われるのである。

灯サークルは、我松高において、もともと社会性を帯びたサークルである。この問題が深刻であればある程、社風の風は冷たいものだと思われる。しかし、それらに真向うから立向うことなくして、精薄児問題は解決されないであらう。

今年の秋、サークルの中で、「精薄児をみると恐いから、もういやだ。」という人が出たという。これは単なる個人の問題ではないように思われる。私達のうちで、僕はそんなことはないと言ひ切れるものが、どれほどいようか。

私達は何よりもかけているのは、問題意識ということだろう。さっきの人も、この問題を自分自身の問題として受けとめていればあのようにならなかつたのではない。

何よりも私達がしなくてはいけないのは、灯サークルを理解してやることである。たとえ、一緒に活動できなくても、この問題を自分の問題として受け止め、学校内で彼らが、活動しやすい素地を作つてやることが重要な

十月九日まで教育実習。
生徒会立ち合い演説会。

十月

三日 体育祭。
十一日 二年関西・東北方面へ修学旅行に出発。

十二日 実力テスト。

二十二日 中間テスト始まる。

十一月

三日 芸能祭。展示祭。

四日 芸能祭。展示祭。

五日 弁論大会。講演会。後夜祭。

十一日 松高創立十五周年記念式典。

十二日 第四回実力テスト。

十五日 公開質問状公示される。

十九日 公開質問状に関する公聴会。第一回職員生徒連絡会。

二十五日 終業式。

四月十一日

一月 始業式。落語研究部発表会。

八日 マラソン大会。

十八日 舞踊部、アーデント・ファイブの発表会。

十九日 第二回職員生徒連絡会。

二十八日 第二回職員生徒連絡会。

二十九日 第一回四校連絡会開かれる。
三十日 三沢大火の募金九千二百円集まる。

二月

一日 年末考査始まる(三年のみ)

十二日 スケート教室始まる。

十四日 地理巡検(一年CDF組)

十七日 地理巡検(一年ABE組)

二十二・二十三日 都立高校入学試験。

三月

八日 年末考査(一・二年)

十三日 卒業式。

十六日 映画会「われら人間家族」

二十二日 終業式。

のではない。私達にとって、結婚や、子供の問題は、もう遠い問題ではない。夢物語ではないのだ。又、自分が三十人の一人でなかつたことが、どれほど大切なことであるのか知る必要がある。

灯サークルが、現状を打開して、より一層伸びることを期待したい。

特集

プロローグ

「もうようそうじゃないか、灰色の高校生活を、もうようそうじゃないか、友達を疑うのは、もっと伸々と高校生活を送ろうでないか」このようなことは、高校生ならだれでも一度や二度は考えることです。しかし、現実はどうでしょうか、生徒会の選挙をやるにしても立候補は少ないし、サークルを開いても集まる人はきまっています。このような風潮は、松高に限らず現代の高校におおいかぶさっています。なにも高校だけに限りません。人を殺すのはよくないことだ、戦争をやつてはいけない、とわかっていても現実には、東南アジアでは、多くの人々が血を流しています。

このように、考えていることと、現実とは、くい違った場合がもうおうにしています。これはたしかに矛盾しています。そして、この矛盾が人間にとって悩みや怒りの種であります。しかし、これらの矛盾が生まれるにはそれ相応の原因があるのではないのでしょうか。それを考えずに悩んだり怒ったりしたところで所詮どうにもなりません。

さいわい私達は、それを見つめるのに一番よい席にすわっています。真実は真実に写る心を持っています。本を読む時間があります。それに学友という素晴らしい道具があり、学友という素晴らしい組織があります。これらは私たちの生活に直接結びついたものです。ですから、これらのものを無視して進もうとすれば、必ず厚い壁にぶつかるどころか、そこから前に進めなくなり、とんでもない間違いを起すことにもなりかねません。私たちの進歩はこれらをどう

特集 松高生



利用するかによって、たいへんな差を生じてくるのです。

現在、私たちの多くは毎日を割に平穩無事に生きています。しかし、これが本当の平和ということかということになると、私たちは少なからず不安を感じるのではないのでしょうか。もしそう感じたならば、そこにその人なりの進歩の可能性が生まれてくるのです。もっと問題をしぼるなら、今の松高を考えてみましょう。今たしかに、やりたいほうだいの自由を与えられ、結好クラスでは笑い声が聞こえてきます。又、本を読もうと思えば、図書館に行くこともできます。このように私たちは、ある面において非常にめぐまれています。でも、それらにかくれた裏の一面があることもみのがせません。受験、就職、テスト、生徒会、ホーム・ルーム等もっと多くの問題が私たちを包んでいます。これらのものは非常にあいまいなくせに、又非常に重要なものです。このように、ちよつと気をつけるとわけのわからなくなる私たちの生活の一面を、資料をもとに、その方向性を割り出し、解決していこうというのがこの特集のテーマなのです。

私たちは現実に高校生活を送っています。これだけは、だれが否定してもできない事実なのです。そして、この高校時代は一生で最も貴重な時代といわれています。時間とは過ぎ去るものです。ならば、私たちはこの一秒一分をクつまらないもの々とあきらめてしまわないで最高のものにしなければならぬのではないのでしょうか。そして、その要素としてこの特集が役に立つなら、この特集は価値があり、素晴らしいものとなります。この特集は、読者の使い方によって価値が変るものなのです。

編集部

現状の分析

(a) 松高生と日常生活

(1) 「現在の生活をどう思うか。」まず、アンケートの結果をみてみましょう。

グラフⅠ(別表)

具体的な内容は次のとおりです。

(社会的に不満な人の意見)

「世の中はあまりに、DRYすぎる。」「矛盾だらけで理解に苦しむ。」「人間の醜さを痛切に感じる。」「現在の社会のままでいいのだろうか、どうして理想の社会ができないのだろうか。」「社会はくだらない。」「資本主義に不満を感じる。」等。

(世界状況、政治に不満な人の意見)

「日本政府の政治的態度わるい。」「同様の意見として「無計画な政治に不満を感じる。」があり例として日韓問題があげられている。その他主として、「ベトナム戦争」等への批判の声が強い。

(個人的なことに不満な人の意見)

「生活が充実していない。」となげいている人が多数を占める。具体例、「暇(自由時間)のなさ」「マンネリ化(生活の)」等。「人間の成長をしたいが、なかなかできない。」も多い。その他に、「赤点の心配」「自己嫌悪」等。

(その他で不満な人の意見)

「心と心のつながりがない。」「友人がない。」「自分を個人的

に、認めてほしい。」「テストにおいまわされる。」「親の考えについていけない。」「不満であるが現状満足に努めている。」等。

(満足している人の意見)

「満足・不満は、自分の気持ち次第から満足して、他の方に力をまわした方がよい。」「私は神と私とのつながりを感じている。だから不満はすべて神の私への挑戦であると考えている。だから私は幸福でないが満足している。」「欲を言ったらきりがない。」等。

(その他の意見)

「時によってどちらにも感じる。」「現実には、満足と不満があつてそれらがうまく調和しているのではないか。」「ただ私は毎日の生活をよくしようとしている。」等。

(2) 「実社会に反感をもっているか。」

まずアンケートの結果をみてみよう。

グラフⅡ(別表)

前項の補足としてこの項を設けました。由に前項と同内容のものは消去します。

(持っている人の意見)

「日本の民主主義に疑問を感じる。」「政治的なものに反感を覚える。」「貧しい人が多い。」「老人ばかりである。」「利己主義者が多い。」「定時制、全日制をなぜ差別するのか。」「学歴の偏重がひどすぎる。」「受験制度がまちがっている。」等。

(その他の意見)

「中学時代には世の中のものをすべて悪いと思っていた。」「弱い反感を感じてはいるが、実社会が良くわかっていないのだから強く

はもてない。」等。

(3) 「学校生活は楽しいか」

アンケートの結果から。

グラフⅢ(別表)

(楽しい理由)

1年生 「友人がいる。」が多い。「のんびりしているから。」
「クラスが良い。」「男女共学が良い。」「クラブがある。」等が次に多い。又「生徒会をやっている時だけ楽しい。」「充実していないが楽しい。」「なんとなく楽しい。」が少数あった。

2年生 「のんびりしている。」が最も多い。その他「やりたいことがある(勉強・クラス・生徒会等)。」「学校へくること自体楽しい。」「他にくらべるものがない。」がある。

3年生 友人に関した事柄を理由にあげているのが最も多い。その他「だれていくから。」「希望して入った学校だから。」等がある。又「三年になって(この学校のよさが)やっとわかった。」と答えている人がいた。

(楽しくない理由)

1年生 学校の雰囲気が悪いというのが最も多い。その他「もっと、はでにやりたい。」「利己主義者ばかりである。」「学習低度が低すぎる。」「生徒に勉強意欲なし。」「先だつものはテストだから。」

2年生 「しんとなるものが無い。」「平凡すぎる。」等。

3年生 「友人がいない。」「学生としての意欲にかける。」

(その他の意見)

「生徒にはりがない。」「ガール・フレンドが欲しい。」「仏教の話には閉口。」「新宿、戸山よりは、楽しいだろう。」「勉強以外は楽しい。」

参考1 授業をどううけているか

グラフⅣ(別表)

参考2 松高に誇りをもつか

グラフⅤ(別表)

参考3 松高生は男女共学をどう考えているか。アンケートによる結果。

グラフⅥ(別表)

(賛成する人の意見)

「互いにたかめあえる。」「異性に対する認識が生れる。」「交際に偏見を持たずにすむ。」「考えがよくなる。」「女子の学力向上。」「くらすのがなごやかになる。」「男女共学は自然である。」「学校はいつでも小社会であるべきだ。」「男女わけへだてなく和していくことは人生において大切であるから高校における共学は重んぜられるべき。」「日本は民主社会である。」

(反対の人の意見)

「女子は馬鹿である。」「男子の女性化―女子の男性化が促進される。」「学問に女子は不要である。」

(その他の意見)

「十分な効果が発揮されていない。」「岐阜県の教育委員会の考え、行動には疑問を感じる、根本的にまちがっているのではない

一年	持っている 42%	持っていない 42%	無記入 16%
二年	57%	27%	16%
三年	60%	36%	4%

V

一年	賛成 45.5%	反対 7.5%	その他 7.5%	無記入 43%
二年	49.5%	3.5%	7.5%	39.5%
三年	57%	3.5%	19%	21%

VI

一年	つまらない 32%	楽しい 25.5%	何とも感じない 42.5%
二年	31%	29.5%	39.5%
三年	30.5%	34.5%	35%

VII

一年	思わない 93%	思う 7%
二年	98%	2%
三年	78%	12%

VIII

一年	感じる 62%	感じない 22%	その他 11.5%	無記入 4%
二年	59.7%	21%	4.5%	14%
三年	82%	10%	6%	2%

I

一年	ある 63%	ない 23%	無記入 14%
二年	60.5%	36%	3.5%
三年	70.5%	18%	11.5%

II

一年	楽しい 53%	楽しくない 27%	その他 8%	無記入 12%
二年	62%	13%	12.5%	12.5%
三年	53%	29.5%	10.5%	2%

III

一年	何となく 44%	しかたなく 16%	神聖な ものとして 14%	その他 21%	不答 5%
二年	29.5%	11%	19%	23.5%	17%
三年	50%	19%	11%	14%	6%

IV

か。」他に「男子だけでも悪くない。」「女子だけになりたいと思うこともある。」等。

(b) 松高生と生徒会

(1) 生徒会への関心

まず全校生徒を対象にして「生徒会活動に参加するのは楽しいか否か。」というアンケートをとってみたところ別表のグラフのような結果になった。

グラフⅦ(別表)

グラフを見てもわかるように一般に「楽しい」と感じている人はすくなく、「何とも感じない」という人が多い。また学年別にみると一・二年では「楽しい」という人と「何とも感じない」という人の割合に大きく差がみられるが、三年になるとその割合はまったくおなじになっており「楽しい」と感じている人は一・二・三学年中で三年が最も多い。

(2) 生徒総会

現在、生徒総会でおこなわれている事項について簡単に列記して

グラフⅧ(別表)

このように学年を通して「思わない」という人が圧倒的に多い。次に総務について二・三人の人に聞いてみた。

一年の女子は、「全体からみると上部だけで動いており、難然としている」といつていた。

二年生のある女子も「公開質問状をみてわかるように、ちょっと走りすぎのように思う。もっと一般生徒の声をきいて結びつきを深めて欲しい。それから総務が何をやっているのかわかるように、こまかい活動内容について知らせしてほしい」といつていた。

「松高世論調査」でも「生徒との結びつきがうすく独走きみである。」という声が多かった。なお総務が出した「公開質問状」に関しては、アンケートの結果「質問状という形式には賛成であるが、内容があまりにも一方的である。」「いたずらに学校側と対立するだけで何もならない。」などの意見がきかれた。

(4) 自治委員会

現在、自治委員会において委員の出席率が大変低く、従って流云も多く活動内容も非常に低下している。自治委員のクラスにおける立場も今のところ中途半端であり、現に「委員の中で一番楽なのは自治委員である。」という人もいる。また自治委員会と各HRとの結びつきがないというのも一つの問題点である。

みると次の通りである。

- ・ 生徒会予算案を審議し、議決する。
- ・ 生徒会決算を審議し承認する。
- ・ 生徒会総務からの一般報告を求めそれに関して質疑意見の開陳
- ・ 生徒会規約の改正につき審議々決する。

そこでこの生徒会の最高議決機関である生徒総会について生徒に意見を聞いてみたところ、二年のある女子はこう言っていた。

「全体にまとまっていけないと思う。時々何について話し合っているのか、理解できない時があるし、発言方法が今のようであれば発言しにくい。進行をもっときびきびしてほしい。一般生徒の出席を徹底的に強化し、各自がもっと「生徒総会」を理解してもらいたい。」

一年生のある男子は「何んとも思わない」とただ一言。また一年生のある男子は「生徒自治の一番大切な機関であって教育活動の大切な一つの支柱になっていると思う。現在ではあまりにも型にはまりすぎており、ほとんどが予算だけに終ってしまっている。回数が少なすぎないだけでもっと充実したものにしてほしい。生徒は自分が生徒会の会員であるということを忘れていて。理想としては、もっと生徒の話し合いの場所になればよいと思う。」といつていた。

(3) 生徒会総務

生徒会総務は、生徒会役員、正副クラブ委員長、各常任委員会委員長によって構成されている。生徒会を円滑に運営するためにはこの総務と生徒とのがつちりした結びつきが必要である。そこで「現在、生徒会総務と生徒が密接に結びついていると思いますか。」というアンケートをとってみた結果、別表のようなグラフになった。

(5) 各常任委員会

委員の出席率の低さが問題になっている。三十年に発行された学校新聞「まつばら」にもトップに「流云多い委員会」という記事がでている。

三十四年に発行された「まつばら」の論説には「利己的な委員会のメンバー」というみだしで委員の無責任さを嘆いている。

現在、新聞の質及び発行部数の低下の目立つ新聞委員会、音楽番組の多すぎる放送委員会、規約上の仕事を完全におこなっていない文化委員会、その他、なにもやっていないものもろの委員会などというように、いろいろ非難されているのも委員の手不足が根本的な原因になっているようだ。

(6) 役員選挙

不活発なのは各委員会だけではない。役員選挙も、そのよい例である。まず学校新聞「まつばら」を見てみると、第二号(二十七年)の論説で役員選挙の低調さを訴えており、第五十一号(三十五年)「まつばら」には、「後期役員決まる」という見だしのもとに、二年のふがいなさを指摘している。

また「今の役員選挙をどう思うか」と一部の生徒に聞いてみた結果次のようになった。「二年の立候補者があまりにもすくなくすぎる、二年はもっと積極的になってほしい。」(一年男子)

「半強制的に立候補を各クラス一名ずつ位だすようにした方がよいと思う。それから選挙活動も活発に。」(一年女子)

「選挙に無関心な人が多すぎる。また生徒の望み、書記の承認制はよくないと思う。第一、顔をみただけではわからない。(二年女子)」

(7) 生徒会全般

以上、生徒会に関して部分的にとりあげてきたが、最後に生徒会そのものについて「今の生徒会は必要か否か」と、質問した結果、別表のようなグラフになった。

グラフIX (別表)

そして「生徒会を活発に」ということは同年も前から同じように叫ばれてきていることもある。

(8) 親睦会・一年生歓迎会

松高の親睦会というと「一年生歓迎会」がまず第一線に浮かぶであらう。

この「一年生歓迎会」は、ほとんど毎年毎年行なわれている。しかし、どうも「一年生歓迎会」は、成功に終わっていないようである。



六二号 三十七年全定親睦交流会

六七号 三十八年全定親睦会開かる

七二号 三十九年全定交流会開かる

七四号 三十九年全定交流会は進歩

七八号 四〇年一本松の会発足す「一本松の会」に成果

以上のことを見ても分かるように毎年毎年進歩しているようである。「参加者も段々多くなっているがもっともっと皆に参加してほしい。」とは本部のつぶやきである。一本松の会の中のあるサークルで活動している、ある男子は「皆、いろいろな人の意見を聞けて楽しい。」又ある女子も「もっともっと回教をふやすべきである。興味のある人は、もっと参加してほしい。」が、これに反してある一年と二年の女子は「時間が過ぎるし魅力がないので出席したいとも思わない。」と言っており又ある一年の男子は「出たことではないが、おもしろかったら出ても良い。」と大変無責任なことを言っていた。

(c) 松高生と受験

私たちの直面している問題に「大学入試」がある。毎年毎年三学期に入ると「試験地獄」という言葉がよく聞かれるようになる。私達はこの「試験地獄」をどう受けとめているのであろうか。松高生の一面を知るものとして「松高と受験」の関連を分析してみました。

三十八年に発行された「まつばら」六十七号によると『不成功に終る』となっており、四十年に発行された七十七号では、『目立つ本部の不手際』と書かれている。このような「親睦会」を、生徒達はどのように思っているのかと二三の人に聞いてみると、「二年の女子は、「歓迎会という感じではないしおもしろくない。」又、「ただ単にだらだらやっているだけである。」と、訴えており「二年の男子は「歓迎されているという感じがしないからもっと歓迎会らしくしてほしい。」と希望していた。それに「松高生全員が、参加すべきである。」という声も聞いた。この「松高生全員が参加しない。」というのを言い変えれば、「三年生の参加者が、ごく一部である。」ということである。このことについても聞いてみた所答えてくれた人のほとんどが「もちろん、参加を望むが、歓迎会そのものに興味がないのではないか。それに現在の状態では出席できないかもしれない。」と言っていた。

(9) 全定交流会

全定交流会の歴史を、わが校の新聞でたどってみると次のようになる。

十七号 三〇年松和会成る(夜間部との懇談会)

五十号 三五年全日制と定時制の懇談会開かる

五六号 三六年定時制との交流会開かる(バレーボール・フットボール)

ークダンス)



④受験と授業 ⑤受験と定期試験の二点を、アンケートをもとにして、松高生が「受験」「定期試験」に対してどう考えているかを、まとめてみました。

アンケートの結果

グラフX (別表)

この資料から、「授業に対する不満を持っている。」という事が圧倒的に多いが、「定期試験はあった方がよい。」という事が多かった。この事に対して詳しい意見なり感想なりをみると、

——三年生は「いいと思わないが仕方がない。」「現在の時点において受験勉強も本人の心がけ次第でよくも悪くもなる。」「将来の事を考えてみると、「受験」という物を通過しなければならぬ。」「学歴偏重が改まらない限りこじれた受験が続く。」

——二年生は「仕方がない。」「入試を簡単にすれば学生は勉強しなくなる。」「現在の社会制度では「大学入学・卒業」は出世主義の一段階となっている。」「学生という身分では受験制度に従わざるをえない。」

——一年生は「受験受験と騒がないで、現在おかれている中で、どうそれに対処するかを考えるかが問題。」

この結果、一年・二年・三年、とも大体の輪郭の考えは根本的に同じようであった。

先生および生徒の意見

二年生のN君は次のように言っていた。

「現状は良いとも、悪いとも思わない。試験制度に欠陥があると

思う。なぜなら中学校・高等学校がそれぞれ三年間では、丁度心身が発達し、充実する時なのにじっくり勉強できない。昔の事はよく知らないが五年制の方が良いのではないか。私達が色々批判しても私達の力ではどうにもならない。教育界は我々の意見の聞き入れられる位置にはない。学生は試験制度の改善などすべきではないと思う。なぜなら学生は勉強以外の事は受身の形だからである。学生という自分で生活のできない身分で意見を持っても、それを無理に通すという事はいけないと思う。

結局、理想に近づけるには、おとなになって教育界を動かせるようになるまで待つて、現在は学問を一生懸命やるべきだと思う。」

またある先生は、次のように言われた。
「大学入学には何らかの形で選択は必要であると思うが、たった一回のペーパーテスト(それも現在ではひねくれてしまっている)で、合格・不合格を決めてしまうという方法には賛成できない。むしろ「ペーパーテスト」「高校生といわゆる学習」「特別教育活動」などを総合して、合格・不合格を決める事が出来るようになるのが良いと思う。

例えば『アメリカの試験制度が日本のそれであったなら、ケネディは出ていなかったろう』と言われていた。この事は、何もアメリカの試験制度の真似をしる、という訳ではない。日本には日本に合った受験制度があるに違いない、と思っただけである。

現在の生徒は、高校を大学進学過程と考えている意識が大変に強く、ただがむしやに数多くの知識を覚えればいいと思っている人も多い。そして、高校という所も、現在では「考え方」「見方」が問題にされなくなりつつあるが、これらは、高校生の良いあり方と

は言えないと思う。

今、問題になるのは入試その物よりも根本は、社会の仕組みであり、これを改善するには、大変な努力が必要であって「教師」「生徒」が、理想としているのに対して、現実は大分かけ離れている。何も『かけ離れている、かけ離れている。』と言っているだけでは、何の意味もないので、この状態の中において少しでも、良くするためには、まず「入学試験を受けるのは自分達なのだ!!」と生徒一人一人が、自覚していく事ではないかと思う。」

三年生就職組のZさんは、こんな事を言っていた。

「私の場合、就職するので実感として、「受験」という物は、湧いて来ませんが学歴を偏重している社会を見ると、だれでもが自分の進みたい方面へ行くのではなくて、ただがむしやに、有名校を希望するので、現在の状態に至ったのではないでしようか。

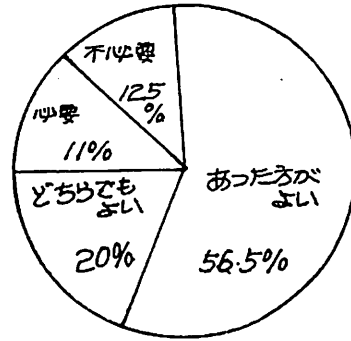
やはり就職でも、入社試験はありますが、大学の入学試験よりは『いかにして落すか』と言ったような事は、若干少ないと思います。私の理想の「受験制度」と言うのは、自分なりに持っていますが、松高の現状に対してあまりにも、くい違ひが多いので、これを少しでも良くするのは、やはり、「私達」松高生は授業にもっと、しっかりした状態で臨むべきだと思います。」

「まづばら」入試地獄に思う

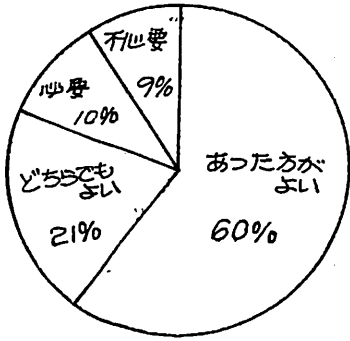
また昭和三十四年二月五日、三十八号「まづばら」の「論説」

「入試地獄に思う」ではこんな事がうたわれていた。
「社会の革新とは、俗に言われている『学問』や『出世コース』などのくだらない観念の打破である。

二年

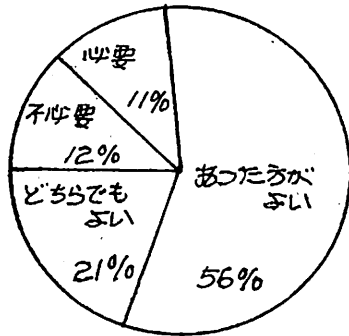


一年



IX

三年

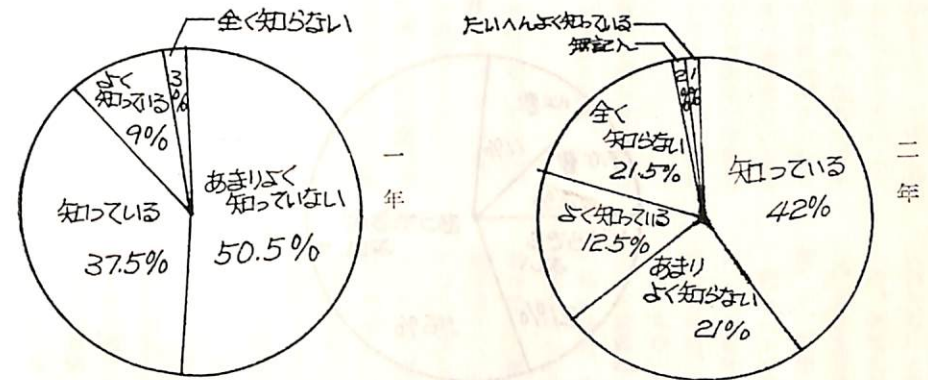


X

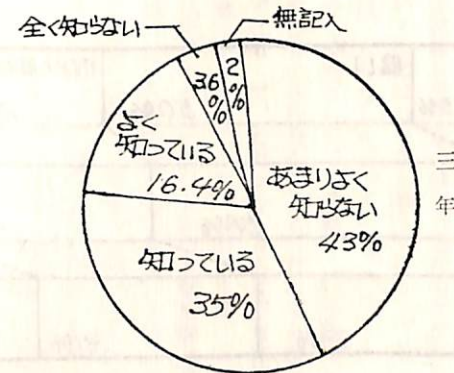
年	良い	悪い	どちらでもよい	無記入
一年	15.5%	50%	24%	10.5%
二年	3%	56%	34%	7%
三年	8%	33%	35%	24%

一年	良い	68%	ひどくない	18%	良い	14%
二年		56%		22%	無記入	9%
三年		41%		32%		23%

IX



二年



三年

(22)

日本人が『文明開化』以来の悪い考え方として『東大』とか『秀才』という物に対して、一種の特別意識を伴わせ、支配階級の旗印と寄せる傾向が強い事である。

学校教育上、成績無視という事は出来ないが、相撲や野球の様に学問において、勝ち負けを決める事が果して、本質的な問題であろうか。なお蛇足ではあるが当時の浪人就业率は五十二パーセントでした。

太田発言

昭和三十五年五月十三日、四十八号々まづばらー太田悦信「卒業を間近に」という特集が出されている。

この発言は当時の松高が大変に沈滞していたので、

④ 松高全体の停滞

⑤ 自信のない松高生

⑥ 厳格な授業をやるう

⑦ 受験対策の知識不足

右の四項をあげ「この現状では自分が、三年間一生懸命、生徒会に尽くしてきたけれど、少しも良くなっていないので、安心して卒業できない。」と言っていました。

図表XI (別表)

この表は、ここ四年間の松高の入学状況である。この表は、「松高生と受験」（という題）であるので表を参考にしてみた自分の「力」とも相談して将来の事を考えて下さい。

定時制の考え

定時制の人たちはどう考えているでしょうか。

現行の受験制度を肯定する者はどの学年も少ない。又、わからないという回答もだいぶあった。現行の受験制度を否定するものは「入学しやすくして、卒業のむずかしい形に。」「二度とない青春を受験でつぶし人間がたよってしまわないか。」と言っている。肯定している者は「血となり肉となる。」「受験がないとだらける。」と言っている。

授業に対する不満

不満を持っているものが多く、その多くは学習進度が遅いというもので、授業に対する生徒の態度、熱意のない授業への不満も見えていた。

定期試験

学年によって多少差はあるがどの学年も定期試験を肯定している。その理由として「定時制であるのでテストがないと勉強しない。」「学習の整理になり、実力をためることができる。」と言っている。

又否定しているものの中に「試験だけで成績をつけるのは反対。」という意見が多数見られた。

グラフXII (別表)

(d) 松高生と社会問題

第二次世界大戦が終って二十年という月日が過ぎ去った。そして

(23)

人類は平和というものを求めて、あらゆる事を考え手段を選ばず進んできた。しかしこの二十年がどれだけ平和に近づいたのだろうか、それとも逆に遠のいたのだろうか、この事を考えなくては、私達がどう生きていくのか、進む道がはっきりしてこない。その問題を考えるには、どれだけの人が、現在の世界の状態を確信を持って言い切れるのか。それが無理なら、現在の世界をどの程度知っているのか、という所まで問題を下げて考えてみなければならぬ。単に知る知らないの問題にとどまれば、なんの意味もなさないのはもともとだが、ここで結論を出してしまうと、かえって間違った結論が出やすいので、後のことは、読者の人々にまかせたい。

まず私達が現在置かれている立場であるが「幼稚園からきたえあげられたテストに関する知識や、アチーブから見ると自己は、実に敏感で正確にとらえるが、他の問題となったら暗しにならない。」このような事が、学生を批判する声として聞かれる。それが大学生となると急に政治に関心をもち、デモにも参加する者が多くなる。これがかえって社会には逆の作用が生まれてしまう。すなわち一部、表面的な見方で受け取られる結果になる。実に悲しい事実である。根本的に見るならば、日本の民主主義議會会制が他から、あたえられたもので、自分達で築きあげたものではないからでしょう。

なにもこれまで述べただけではない。日本で起っている問題が私達に繋がっているのです。国会での強行採決と牛歩の激突、デモ隊との乱闘・労働者の首切りの続出・中小企業の倒産・そして物価の上昇・もっと範圍を狭めるなら、東京のと真中の公園でおこったある浮浪者の凍死など、いろいろな問題があげられる。どれをとっても私達なしでは、考えられない問題はばかりです。その問題を自分

の私達はどのような見方でいるのでしょうか。そこで編集部は先日生徒に書いてもらった松高世論調査から探ってみました。

調査には「ベトナム戦争の実態を知っていますか」という間に對して「よく知っている」「知っている」「あまり知らない」「まったく知らない」と四つの解答を書き、丸を付けてもらいました。又次の間には「ベトナム戦争をどう思いますか」と書いて筆者自身の意見を書いてもらいました。特に後者を主体として見ていきたいと思います。

現代の通信技術の進歩のせいか戦争がベトナムで起っているという事は、だいたいの人が知っていたようです。ただ残念な事に「あまり知らない」と答えた人が半分以上を占めていました。多分このように答えた人は、知っているには、知っているが、それ以上の関心を持たなかったと言えると思います。このようなことはベトナム戦争だけでなく、現代の風潮の一つで、最も考える必要があります。一番大切な事ではないでしょうか。次の問の「どう思うか。」では、なかなか活発な意見が出ました。これらをまとめると大きく三つの型にわけられます。一つは戦争という問題だけ考え、人道的立場から見た意見です。この意見はアンケートの大部分にあてはまりました。「人間が人間でなくなる残酷な戦争は、すぐやめるべきだ。」「戦争で人命を欠くことは、その国にとっても損だし、恐しい。」「少し毛色の変ったのでは「人類の不幸の原因は無数である。しかし一つとして自分の生命より出でざるものはない。自己に内在する宿じゅうが環境に応じて出てくるのである。故にベトナムの戦争も小乗教のはびこっている彼らの生命力のおとろえが一番根本的な原因である。」「二つめは、アメリカはベトナムから手をひけと

の利益なしで客観に近い立場に立って見られるのは、学生を除いていったい誰がいるのか。私達学生は、学問を通してそれを学び社会に訴えていかなければなりません。そのためにも、私達は現状をしっかりとつかみ、正しい批判と適切なアドバイスが必要です。

そこで編集部は、四つのテーマを投げかけてみました。ことわっておきますが、ここで中心になっているのは、社会問題に対する私達の考えであり、四つのテーマだけでは、とうてい表現できません。ただ四つのテーマの上だけの事です。その四つのテーマとは「ベトナム戦争」「日韓条約」「現在の国会」「宗教」です。

・ベトナム戦争

東南アジアの西にあり、南北に長く、雨季と乾季の気候を持つ熱帯モンスーン気候に属し、仏教とカトリックの国、熱帯森林が続き生ゴムとアジア式米作地域の国ベトナム。一口で言うなら不幸の国とも言えよう。一八六二年〜一九四五年までの八十余年フランスや日本ファシストと他國の支配を受け、一九四五年に南北に分かれ、北は社会主義の国ベトナム民主共和国、南は資本主義の国ベトナム共和国となった。北ベトナムはフランス・アメリカ軍と戦って一九五四年五月七日(十七時三十分)にディエン・ビエンフー完全破壊で勝利した解放軍(ベトミン)の国であり、南ベトナムは、ジュネーブ協定で独立したアメリカ軍の援助を受けている国です。この戦争は、南ベトナムの國での資本主義をあくまで存在させようとするアメリカ軍と、民族解放の旗をかける南ベトナム民族解放戦線(ベトコン)との戦争です。この戦争を資本主義陣営諸國の中の日本

という意見です。「ベトナム人民を無視し、新植民地主義を根本とする帝國主義アメリカはベトナムからすぐに手を引き、ベトナム人自身に解決させるべきである。」他の一つは人種的側面から「アメリカは口では『平和の為』と言っていますが、それと同時に北爆を実行し続けています。そして東南アジアの國々が共産主義化するのを嫌って戦争を起しています。それはただ自國アメリカ合衆國の為のものです。私はアメリカがベトナムから去るべきで東南アジアの人々や有色人種をいじめて白人の優越感を持つことは、取り去るべきであり、日本政府がアメリカのめかけであることが残念です。」「三つ目の意見は、アメリカは自由を守る為に戦うべきだという意見です。「今や世界は第二次大戦以来最大の危機に直面している。それはアジアにおける最大の好戦主義的侵略者(北京政府)がその力と経済力と、低開発國に對する空理空論の講義によって共産勢力のアジア進出を計っているからである。共産主義の脅威からアジアを、そして祖國日本を守る為にベトナム戦争は当然であり、我等日本に代ってアジア最大の侵略者と戦っているアメリカに對し、我々は最大の謝意と敬意を払っても払いすぎることではない。むしろ我等日本は今こそ徴兵令を引き世界平和と資本主義陣営及びアジアを共産主義の侵略から守る為に立ちあがるべきである。」

以上三つの意見に分けたのであるが他に「日本はもっと訴える必要があり、日本がそれに間接的にも加わること、自分の方向を大きく誤っている気がある。」という日本の立場を考える人もいた。これらを統合すると、極端な意見もありましたが、戦争というものと、アメリカの非人道的なやり方に批判が集まっていました。

・日韓条約

韓国人と聞くと、あの先のとがったクツ、あの白い足首のところがヒモでくるズボン、冠、ヒゲ、長キセル、このような姿が浮かんでくる。しかし、あのような陽気な姿だけが韓国人を表わすとしたら、本当の韓国人を見ることはできない。古代から外国の侵略、圧迫に苦しんでいる、いつも悲惨と荒廃の中に涙をこらえながら人々は、長い月日を送ってきた。その結果おとなしい人種ができあがってしまった。その昔韓国人は守備を好み、勇敢な民族だったそうです。だから、このおとなしさは、根からのおとなしさではない、仕方なしのおとなしさ、望みないおとなしさなのです。

高句麗・百濟・新羅の三国が争ったのは四世紀から七世紀にかけて、現在は、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国と、二國の争いが続いています。韓国のひとびとにとって南北の分断の意味するのは一体何なのだろうか。やはり人々は暮しの安定を望んでいる。しかし、資源の貧しさ、人口圧、たびたび重なる政権交代、政界の腐敗、もっと負担の大きいものとして予算の三〇％を食う、六十万の軍隊など、いろいろな問題をかかえています。物価の水準を見ても日本の二分の一、女工さんの初任給は月三、四千ウォン（一ウォンは二円三十四銭）で日本の三分の一、製造工業の月平均賃金四千八百ウォン。労働問題は朝の七時から夜の七時まで（もちろん保険はない）の労働。失業者は総人口二千八百万人のうち二百五十万人。国民総生産をみだてて日本のざつと四〇％。国全体で調達できる資金といっても日本の〇・三％。このようなことが韓国の経済力である。もう一つ韓国をあらわすものとして、「ミド」という名の喫茶店

がノウルにあった。店の主人は初めミドリ（緑）としたのであるが看板を出したら警察に呼ばれた。『なぜ、日本の名をつけるか』店主は譲って看板から一字「リ」の字をはずし、ミドリがミドになった。この話は最近の新聞に載っていたものだが、日本が統合していた時代の抗日思想が、まだ残っているといえよう。このような、

経済的な問題と、微妙な対日感情が、今度の日韓条約に際し、関係してきています。その結果として、あの連日のはげしい反対デモが起ったのでしよう。又日本でも、徹夜国会と強行採決・牛歩戦術・質問時間の制限など、民主主義議會制を無視した状態を生み、國論が二つに別れ、デモ隊とそれを阻止する警官隊との衝突が続きました。日韓条約はこのような国民の不安と焦燥の中で締結されました。まず、条文そのものを読んで人を調べてみました。アンケートの結果をみてみましょう。グラフ12これを見ると、まず第一に、関心がある人と関心のない人の差がありません。ことに気がつきます。条約文を読んだ人の中にはマスコミの影響が強いことが注目されます。又、韓国というところ、一種特殊な感情が条約を読まずに至っていることも見のがせません。次に「日韓条約をどう思うか」という問に

反対の意見

「日本と韓国との交友だとか親善だとかいっているが、実際は日本の国民、韓国の国民にとって、あまりいい事はない。ただ、資本家

が増々ふくれ上り、我々は職につけない状態になる可能性が多分にある。」と言っている。反対の立場としてこれと少々異なった意見もある。「一言でいえば屈辱外交である。というのは、竹島は昔から日本の領土である。ちゃんと条約に明記せよ。漁業ラインは譲りすぎで、在日韓国人の法的地位の問題は、国内に少数民族を形成させてしまう。この条約はアメリカの圧力がかかって結ばれたものである。政府はもっと日本に有利な条約で取り決めるべきである。」

次に賛成意見をみてみよう。

「隣国（大韓民国）との平和を維持し国交を正常化することすらできず、何故世界平和を論ずることができようか。」と大分単純に解釈している人もいる。「問題になることからして、おかしいと思う。民主的に選ばれた人々（政府）が結び、国会でも賛成者が多い以上、日本国民の多くは、日韓条約に賛成であると考え。」と実に割り切った意見もある。

もう一つ、次のようなものもある。

「この条約に関する事は矛盾した点が多い。韓国国内の反対派は、自國が譲歩しすぎているというし、日本ではその反対もある。とにかく、この条約の締結によって日本の大資本が進出し、所謂經濟侵略という事態は避けられないと思う。現在この締結を押し進めることは、時間的にみて早いのではないか。」以上、代表的な意見を述べてきましたが、何といっても、わからないという人が多かった事を最後に記しておきます。

・国会

「自民党の一方的なものにはまったく頭にくる。あんな議會は、俺達のH・Rにもおとる。頭のよい敏腕な議員諸君にしてはひどいね。あれでも大人かね。けれど社会党の牛歩その他にも原因がある。民主主義の原則は多数決、だから少数ということとは支持者が少なくことである。あんなに反抗しないで、自民党の悪いところを指摘して次の選挙で社会党議員をふやすのが本当の民主主義だと思ふ。」

混乱していると思う。民主的に選ばれた議會である以上、採決の結果に従うべきである。それを混乱させているのは、野党の責任であらう。元来自民党の数が多くということは、国民に支持されているからであり、もし支持がなくなれば都議會のような結果になると思う。」この意見に代表される意見が非常に多い。

現在の国会をどう見ているかでは、「テレビニュースで国会をみているといやになる」とか、「あまりりこうな人が多く、國の為よりも自己の繁栄と黨の繁栄しか考えない人があまりにも多い」又「今の国会を見ていると動物園のサル山並であり、小学生の話し合いに劣る」など手きびしい批判が大部分を占めていました。そしてある人は「現在の黒怪」とひねくっていました。

何分にもこのアンケートは、日韓条約の強行採決の後に出しただけに、大分反響が大きく、国会を非難した意見のところだけは、書きたいほうだい書かれていたという感じでした。

・宗教

人間が存在して二十世紀の今日までの発展は、いい悪いにしろ宗教と共に歩いて来たようです。世界には何百という宗教があり、

日本を例にとっただけでも、仏教、儒教、キリスト教など様々な宗教が入りこんでいます。

よく宗教は信じなければ理解できないといわれます。学生の多くはそこらに抵抗を感じているようです。しかし、今まで続いていたことを無視できません。このようなことを考えながら、私たちが宗教をどう見ているか、探ってみました。

アンケートには、○宗教の必要を感じるか、○宗教をどう考えるか、○宗教団体に所属しているか、と以上三つの事をあげて答えていただきました。最初の問題については、感じないという答が圧倒的に多く、感じると答えた人は一〇程度でした。次の問に対しては、かなり手厳しい意見がかなりありました。「もし、宗教というものが真実であるならば、ヒューマンイズムや民主主義や政治の必要は存在しない。この世に存在しない亡霊AキリストBの前にひざまづいて、世界が平和になるなら、国連はいらない。人民が救われるならば、社会保障もいらない。しかし、事実が証明するように、宗教が無意味かつ愚劣であることが確信できる。宗教こそ人間の精神を奮い、人間を人形化する世界人類共通の最大の敵である。」次に宗教を必要とする人は、二つの型があつて、その一つは自分が必要でないが人間にとって必要であるといっているのと他方は自分が必要であつて、宗教団体に属しているという立場である。前者の意見は「何か信じることによってその人に安心感とか、満たされたものがあるなら良い」「自分が強い意志を持っていれば、何にもたよらなければ良いが、何かのショックで自分の心がぐらついた時、やはり、自分の心を支えるものがほしい、それには、宗教が一番たよりがいがあると思う」と言っている。又「宗教の必要を感じるが日本の宗教

方向性

〔生徒会に関して〕

松高生は、次の三種に大別できると思われる。

第一に 生徒会に対して、何も感じない。

第二に 生徒会に対して、何かしら感じているが、やりたくない。

第三に 生徒会活動に参加している。

松高生のほとんどは右記の第一及び第二である。そして、これから次の傾向が生まれる。

傾向A 松高生は生徒会に対して、無関心である。

―傾向の直接的原因―

① 生徒会員は、生徒会（ここでは総務を指す）を、知らない。

a 生徒会員は、生徒会を知ろうとしていない。

b 生徒会は、会員に知らせようとしていない。

② 生徒会員は生徒会の必要を感じていない。

③ 生徒会員が各々に利己的になつていて、これらの原因によって傾向Aが確定され、次の事実がより明白になります。すなわち「松高生徒会は停滞している。そして、これら原因を破壊しない限り、今後増々この状態は悪化するであろう」ということです。

〔日常生活に関して〕

学校生活に関して。

教となると、頭を横にふらないわけにいかない」という日本の宗教を批判した意見もあった。宗教団体に属している人の意見は「真の人間性を追求し、世の中を『和』を持って生きる為には是非必要だ」という意見やただ「美しいと思う」という意見もあった。

宗教団体に属しているかという所では、ほんの少数の人がキリスト教、創価学会などに属しているだけでした。以上の事をまとめてみると、私たちはだいたいの人が「私は自分でつくる」という意見のようです。

以上四つのテーマに関する問題を述べてきましたが、実に極端な意見が大部分あつたようです。編集部はなるべく主観を混ぜないで、アンケートに書かれている意見をそのまま述べてみました。これには色々意見があると思いますが、御了承下さい。最後に、社会問題に関しては、何も書かれていないアンケートが大部分があつたことをくり返しておきます。

傾向B 松高生は学校に誇りをもっている。

傾向C 松高生は、学校を、一つの生活の場と考えて、学校生活を楽しもうとしている。

傾向D 松高生は、学校内の設備の不充実に嘆いている。

傾向Cの一步進んだ表現として、

傾向C' 松高生は、将来を考えることよりも、現在を楽しむことがより好きである。

これらの傾向のまとめとして次のものがでてくる。

「松高生は、真実を見て見ぬふりをすることが多い。」

「松高生は個々では、高校生のようだが、集団になると、そうとは思えない。」

又、傾向Dから、

「松高生は、余りよくない状態で授業をうけている。」

社会に関して。

傾向E 松高生は社会に不満を感じている。

傾向F 松高生は、社会問題を自分たちでは、どうにもならないものとしてあきらめている。

傾向E' 松高生の多くは、社会問題に対して、意見をもとうとしていない。

傾向G 関心がない。

傾向H 政治は政治家がやるものと思つていて、

傾向I それについて、論ずる年令ではないと考える。

これらのことを総括して、

「松高生は、政治に関して無知である。」と云えると思う。

授業に関して、

傾向J 松高生は授業に不満を感じている。

―傾向の直接的原因―

① 授業が形式的である。

② 教師が不完全である。

これらによって次のことが言えるのではないか。すなわち、
「高校らしい」（中学と比較して）授業でない。「授業の意義」
という疑問が必然的に残る。」

……受験に関して。

傾向K 松高生は進学したがっている。

理由・勉強をした。

しかし反面、

傾向L 松高生は、受験制度に不満を感じている。

これらによって次の疑問が松高生の中に残っている。すなわち、

「現代の受験制度はまちがっているのではないか。」

※ この問題に関しても、傾向Eと同様の意見を持った人間が多い。

松高生に関して以上の傾向、集計ができました。そして、最後に次のような傾向が全般に言えると考えられます。

「松高生は、現在の生活に満足していない、しかし、だからといって、それを打壊しようとしてもしていない。」

〔松高生の傾向、総まとめ〕

松高生の傾向を、川を流れる枯葉にでもたとえてみましょう。』

で、松高の、世の中の罪悪は一つへるのです。しかし、今はどうでしょう。

前だけ暖めるだけでも、石炭は四時間目までしかありません。

そして、昼休みには例の如く、例の……となりまます。松高のすしづめ教室全体を暖めようとしようものなら、最低でも二台のストーブは必要です。換気の良いすぎる教室にはやはり二台は必要でしょう。いくら私たちが熱気多き若者でも、やはり、現在の状態では困るのです。

しかし、私たちは、この状態を現在に黙認しています。果してこの黙認は何をよんだのでしょうか。そして、これから何をよぶのでしょうか。まず寒い寒いという状態、昼休みに石炭をよろまかしに行ったこと、そして、それを黙認していたこと、石炭の変りにイスをこわして燃したこと、もしこれが見つかれば立派な先生に怒られること、そして教師、生徒間に出来る『みぞ』。不満な葛藤による反抗。もし見つからずに済んでも罪悪感の黙認による、モルヒネの如き進行性の罪悪に対するマヒ。罪悪の正統化。事実このような事を書いていても「なんだ、そんな事たいしたことはないじゃないか、当たり前だ。」と言うだろう人が、ほとんどではないのでしょうか。

しかし、運動着の盗難に頭にきている私たち。それは私たち自身で生んだものではないでしょうか。盗んだ本人に聞いてみれば、別に悪いと思っていないことが多いのです。本人はこんなことを言うかも知れません。「何だロッカーがあいていたからいらぬのかと思つたよ、おまえが悪いんじゃないか。」——どこか狂っていますね。しかし、私たち全体もこれに近づいています。キセルをあたり

枯葉は、木の枝から落ち、小さな川を流れて本流に出ます。大河には、他の小川から来たたくさんの枯葉が、流れています。どの枯葉も、ただ水面に浮かんで流れることしか考えません。もちろん、自分がどこに流れていくのかも知りません。流れを見ないから、そして、流れは一本でないことも知りません。枯葉は余りの激流にものおじしてしまいました。逆らうことは恐いのです。真中を安全に流れていきました。そして、枯葉は、下流で、巨大なるデルタに成長するのです。

枯葉はデルタに堆積することを夢見て、逆らわず流れます。三日月湖になるのを心配しながら。』

松高生は、このように受動的で消極的です。不満も反感も出ていますが、一つの流れにはなりません。生徒会の低迷の根本的な原因はここにあるのです。授業が高校生らしくないのも、原因がここにあるようです。生徒会の仕事というのは、予算の分配ばかりでは、ありません。予算の分配などというのは、予算が少ないからいるのであって、予算がたっぷりあればいらぬのです。ですから予算の分配は、生徒会の内職です。生徒会というのは、もともとと、みんなものであるべきです。同時に、みんなの不満の代表であるべきです。

ストーブの石炭が足りない。だから寒い。こんな投書があれば、すぐに生徒会では、現状を調査し、それを、職員生徒連絡会議という場において提出し、極めて友好的なムードで、極めて優秀な生徒会総務の人間と、極めて立派な松高諸先生方とが、極めて立派な話し合いを行なうのです。そうすれば、午前中で無くなった、石炭を昼休みにこそこそ、ちよろまかしに行く必要はありません。そして

前として公然と行っている私たち、なのです。私たちはこの調子で大人になる訳です。

今、行っている罪悪の黙認はもっと発展します。私たちは、きつと大変な黙認をするようになると思います。このままでは、ただの悪循環を起こすだけです。こんなことはやめましよう。自分たちの意志を、はっきり表現して、はっきり行動し、自ら、ものを動かそうとすべきではないでしょうか。

自分の都合の良いように黙認します。どこで、人が死のうと関係ないそうです。それから、どこで人が苦しもうとかまわぬいそうです。きつと今と同じように「いけない」と思っても、黙認してしまいます。流れにはしません。流れを作ろうとは思いません。流れるのは雨ばかりです。そして、こんな状態で、次の大人への指導が行なわれるのです。これが、悪循環でなくて、一体なんでしょう。

私達は今まで「ル・クール」第14号の紙上を貸りて「松高生」の分析を試みてきました。私達は最後に今後の「松高生」諸君に望むことを提示し、特集「松高生」を終りたいと思います。

巻頭言で私達が言つたように、現代は高度に規格化されつつあります。型破りは一種のタブーとなつてきているのです。それは分析の中で述べたように私達の日常生活までもがそうなりつつあります。私達のだれもがこのような状態をよく思っていないことは明らかにありました。しかし、私達はそうだからといって、無闇に反抗すべきではありません。私達はまず互いをよく知る作業から始めるべきでしょう。そして、それは次第に大きなつきあけになるのだと思います。

私達はこの特集が終るに当って、当初三つの解決策を提示しようとしてしました。しかし、私達はあえてそれをストップさせました。それらは、立て割りHR・HRのゼミ化、統一テーマ制といったぐいのものでした。私達は考えに考え抜いたあげく、これらを載せなかったのです。

私達は、ここに私達の考え得る解決策を載せる以上に、解決策を、「松高生」一人一人が真剣に考えていたかったのです。流動する世界状況の中で、激化する受験制度の弊害の中で、「松高生」一人一人が、高校生としての自覚を高め、学園の発展に大きな礎になつていただきたかったのです。

私達の一人一人がH・Rをもう少し充実させようと試みる、それだけでも、大きな進展があると思います、統一テーマ諮問委員会の

日韓条約を探る

社会科学研究部

はじめに

日韓条約は昨年の第五十回国会において、十五年にわたる、交渉史のまくを閉じた、しかし批准されたとはいえ、たてつづく強行採決による、民間の批判の声はいまだに国民の脳裏に刻みこまれている。

この安保条約に続く重要な条約を私達、社研は、その実体の一部をここにできる限り公開してみたいと思う。

私達がここで望みたい事は、私達学生にとって、この条約が決して無関係でないと言ふことを認識してはいいのである。

そのために条約の内容を

○朝鮮の歴史

○在日朝鮮人の法的地位

○日韓条約の経済的側面

○日韓条約の軍事的側面

の四つに分けて調べてみました。

朝鮮の歴史

パンフレット、地理の授業におけるグループ制、現国の研究発表制など、私達のまわりには、問題解決につながるようなものが、たくさんころがっています。捨るか否かは私達「松高生」自身の問題なのです。

※尚、この特集作製に当り、多くの助言をいただいた西山先生、笠原先生その他多くの諸先生方に誌上をかりて、御礼申し上げます。どうもありがとうございました。



佐野順一

朝鮮の歴史の流れをひと口でいうならば、外圧と抵抗の歴史であるといえよう。なぜなら、遠くは北方からの大陸の圧力と、下つては南方からの日本の圧力である。その間朝鮮は国を宗主国とする重苦しい立場におかれていた。それでは歴史をひといてみよう。

○動乱期の朝鮮

朝鮮では稲作はすでにBC五百年ごろから始っており、中国文明も入っていた。固らしい国が出来たのはBC一九〇年の「衛氏朝鮮」であった。しかし、BC一〇八年には漢の植民地となった。その後、漢は亡び朝鮮各地には・「高句麗」・「百濟」・「新羅」が起つた。これを三国時代という。「新羅」は六七六年、中国の「唐」の助けを得て朝鮮を統一した。ここに初めて前までわかれて住んでいた朝鮮民族が統一された。

統一新羅は中央集権体制を施し、遺族には土地を与え、被支配人は隸民として酷使された。世の中が平和になるにつれて、中央では王権をめぐって血なま臭い争いが続いた。

地方でも隸民となつた農民の暴動が起つた。このため、新羅は九三五年亡んだ。高句麗はその後をひきついでたが、政治形態は隸民支配の上に立つ形態で、新羅と似たりよったりだった。しかし初めのうちは、農業重視政策をとり、生産力も上り、人口も増大したが、中央では王権争奪が起り、農民も暴動を起した。こうして「高句麗」は弱つていった。一二三二年、中国の「元」は「高句麗」を襲い属国とした。一二七四年・八一年に「元」は日本を攻めるための船や軍隊を、高麗に負担させた。そのために「百姓は皆草の実、木の

葉を食う」といわれるまで疲弊した。それでも中央の遺族は自己の私的権力を高めることにつとめていたため、農民の暴動が起った。

一三九二年に、日本の海賊倭寇を破って名を上げた李成桂が、高句麗を亡ぼし「李氏朝鮮」を作った。彼がまず着手したのは土地改革であった。（これは朝鮮の歴史の曲り角にみられる特徴の一つである。）

この結果、いろいろ土地の支配的性格が強められた。又、国教を仏教から儒教・朱子学にかえた。儒教は、封建政治体制の具となつたばかりでなく、広く社会全般に根をおろした事大主義（一定の考えはなく、勢力の強い者に従つて自分の存在を維持する主義）や、繁文褥礼（形式を重んじて手続きなどのわずらわしいこと）の形式主義などをもち、後々の政治にも悪い影響を与えた。一五九二年日本の秀吉は朝鮮征服を二度も行なったが、李朝は、からくもこれを退けた。しかし、このすぐ後、一六二七年、「清」に侵入されてあえなく降伏をした。このような国家的危機になつても、中央ではあいかわらず政争が絶えまなかつた。このように日本と清に侵入されて朝鮮はすっかり荒れてしまい、農民は流民となつてさまよい、水害・悪疫等々も相ついで農村を襲った。李朝は十九世紀に入るとかつてない困難に直面した。

たよりにしていた「清」では、一八四〇年のアヘン戦争によつて欧米の半植民地となつていた。このため李朝は強固な鎖国でこれに臨んだ。一八五四年隣国の日本は開国し、富国強兵の資本主義へと踏みだしていった。そして一八七五年武力で日本は朝鮮に不平等条約をおしつけた。そして清の助けをかりて独立しようとする「事大党」と、日本の助けを借りて独立しようとする「独立党」との争

○解放後の朝鮮

一九四五年、朝鮮は日本の植民地から解放され、米ソ両国が、便宜的に三八度線を作り北をソ連が南を米国がそれぞれ分割占領した。一九四五年、モスクワ協定反対をとらえた右派の手に完全に移った。

軍政を施した米軍は、日本が朝鮮の植民地支配に用いた機構を、そのまま用いた為、朝鮮の産業は停滞を続け各地にストライキがおこつた。北鮮では人民委員会とソ連占領軍が次々と改革を行い、社会主義国家建設をめざしていた。このようにいまや南北朝鮮は対称的な国家になつて行き、朝鮮の分断は固定化してしまつた感があつた。しかしモスクワ協定にしたがつて米ソ両国は、統一の為の会議を開いたが、結果は、米ソ両国とも南北朝鮮を自分の支配下に入れた。そこで米国は朝鮮問題を国連に持つてき、米案が可決・承認された。米案がそのまま国連案となつたので、北朝鮮ソ連が承知しなかつた。そしてついに南・北の中でおのおの選挙が行なわれた。李承晩を大統領とする韓国・全日成を首相とする北鮮、と別々の二つの政府が出来た。

一九五〇年六月二五日、北鮮は武力統一を試み三八度線を突破・快進撃を続けた。米国はこれに対し国連の決議（米案・ソ連欠席）で米軍を朝鮮に投入した。一方、中共は北鮮の為義勇軍の名の元で正規軍を送り米軍と対決した。一九五三年、戦線は三八度線付近で膠着し休戦となつた。この戦いはほとんど全土わたつて行なわれたため国土くちくち々に破壊された。そのため今から六年前「四月

い」が起つた。この争いで被害を受けたのは農民であつた。一八九四年、「東学党の乱」が起つた。この乱はたちまち雪だるま式に大規模となり、国内の改革と同時に日本や西洋諸国を駆逐しようという大農民戦争となつた。これは日本と清が朝鮮に兵を進める口実となり日清戦争が起つた。日本は朝鮮に親目的な内閣を作り、清国を徹退させて兵を進めたが、農民軍の抵抗にあつた。しかし農民軍は近代装をした、日本軍に虐殺され、その数は四〇万人にのぼつた。こうして日本は朝鮮における地位を独占したが、清にかわつて露が勢力を伸し、朝鮮政府は日・露両国のなすがまゝになつていった。一九〇四年日露戦争が起り、日本は朝鮮を實質的植民地化に成功した。一九一九年三月一日、「三一・一独立運動」が起り、ついに民家の不満が爆発した。戦いは約一年間続き、これに参加した者は延べ約二千万人であり、砲火で殺された朝鮮人は十万人以上にのぼつた。これは日本の朝鮮統治方針に大きく影響し、従来の武断政治に代つて、文化政治になつたが、それにはもとより限界があつた。三一・一運動に失敗した者達は李承晩を大統領とした。大韓臨時政府を上海に組織した。これらの人々はアメリカの力を借りて独立しようとする人達です。一九三七年、朝鮮にたいして「皇民化」政策を強行し、一九四一年からの大太平洋戦争になると徴兵制度を実施し、朝鮮の青年たちが日本軍として戦場で戦つた。

一九四五年八月二三日、日本は降伏し、朝鮮は解放された。今まで述べた事をふり返つてみると、被災を受けたのはいつも農民だったということ、中央の役人・貴族の権力争いが、一般民衆のことを考えないで続いていた。そして儒教の教えがこれをささえていた。

革命が起り、李承晩はアメリカへ亡命した。その後をひきつづいた張晩内閣も、何も出来ず、産業は停滞を続け、失業者は町にあふれた。

一九六一年、韓国に軍事クーデターが起り朴正熙が政權を握つた。しかし経済は停滞を続け、せつなく盛り上つた南北統一ムードもこわされた。一九六三年、民政移管が行なわれ朴正熙が大統領となつた。しかし経済政策に失敗し今なお産業は停滞を続けている。

北鮮でも朝鮮戦争の被災は大きかつたが、共産各国の援助（特にソ連）・中共の援助を受けて着々と発展して、現在に至つてゐる。

以上ざつと朝鮮の歴史をふり返つて見ました。

○朝鮮の歴史を貫ぬいている問題。

①外国勢力の侵入

②中央の役人の墮落

③④の結果被災を受けるのは、いつも農民（民衆）。

去年日韓条約が結ばれ、日韓両国は新時代に入つた。しかしこの条約の中にある「援助」によつて韓国の民衆が本当に利益を受け韓国が発展しなければ、日韓条約によつて私達日本人は二たび朝鮮・朝鮮人に対して、とり返しのつかない間違ひを残すことになるだろう。

在日朝鮮人の法的地位

現在、朝鮮人の約八〇%が失業又は半失業の状態にあり、職にありついている人でさえ、土木工事の労働者・屑鉄・紙屑回収業、よくて食堂・パチンコ店などのサービス業を営んでいます。たとえ普通の会社にとわかれたとしても働いて得る賃金は、日本人労働者の約半程度で、工場などを経営している朝鮮人も銀行の融資制限を受けて暮らしているそうです。

みなさんよく聞いて下さい。われわれ日本人か他国でそんな差別されたらどうしますか？又そういうことかあるとしたらどう思いいますか？

田代博文氏（弁護士）の在日朝鮮人の正対な処遇についての論文の一部を紹介しましょう。

〈処遇問題を考える場合の二つの観点〉

第一は、在日朝鮮人は国際法上、正当に保護されるべき権利をもつた外国人であることです。世界人権宣言が、保障する諸般の不可侵の基本的人権の享有はもちろん、日本国憲法、その他国際慣例上の保護を受けるべきことは当然のことです。第二は、略一国際法上、通常の外国人が日本において与えられている権利と自由はもちろん、略一完全な内国民待遇ないし市民的權益の保障を認めるべきであり、それが日本の歴史的・政治的責任であり、また人道的・道義的責任です。（略したのはそれだけの事実で明確に認識できなかったのと、それに関する具体的な知識に欠けていたため書かなかったのです）。

〈処遇に関する八つの原則〉

役割りを推進した大韓民国々民としてのきょう（略）持と民族主体性の確立をはかるとともに、在日六十万同胞を自由と民主主義のもとに堅く結果させ飛躍的發展と前進をはかるものである。

総連中央常任委員会日本政府の採決強行は、さきに朴正熙一味が銃剣の暴圧のもとで、韓日条約の批准を強行したりくちと、何ら変わるとうろがない、これは朝日両国民と世界の平和愛好人民に対する重大な挑戦といわざるを得ない、このような採決にこそ韓日条約の侵略的本質が如実にあらわれている。

朝日両国民に歴史的に、生じた問題は、朝鮮に統一政府が樹立されたのちに、両国民の利益とともに合致するように合理的に解決されなければならない、朝鮮人民は朴正熙政権を打倒し、祖国の平和的統一を実現することによって、韓日条約を完全無効たらしめるであろう。――文中韓日条約は日本人は日韓条約と言っている。

それではこの条約の問題点というのはどういう点なのでしょう。この在日朝鮮人に関する条約文を正式には「日本国に居住する大韓民国々民の法的地位及び待遇に関する日本国と大韓民国との間の協定」といいますが、その第一条に「永住権」付与の範囲を一九四五年八月十五日以前から引き続き日本に居住していた者とその直系卑属（子供）で協定の効力発生から五年以内に日本で生まれ申請の時まで引き続き日本に居住していた者と協定の効力発効五年後に日本で出生した者としています。この第一条では戦後入国者や戦時中、妻子を南朝鮮に疎開し一時帰国した人達は永住資格から除外されるので、親子、夫婦で在留資格がバラバラであるという非人道的な結果が生じるという問題点の起きる可能性が多いということ、そして第四条に第一条により永住することを許された大韓民国々

民に對する日本国における教育・生活保護及び国民健康保険に關すること、日本国での永住する意志を放棄して帰国する場合の財産の携行及び資金の大韓民国への送金に關することは、これについて妥當な考慮を行うものと書いてあります。が、それについて、具体的なことが書いていないので在日韓国人にとっては何についてどのくらいの補償がどうされるかが良くわからない、これも政治家や、その方の権威者の解釈のしかた次第でどうにもなるというあいまいな点が残る――日本の政治家がそんなことをするとは思われないが――最後にこのように永住権を獲得した人々に「韓国の国内法」――例えば徴兵のことなどが適用されるかどうかである、もし適用されればせっかく日本の永住権を獲得した人もすべて韓国へ強制帰還させられるという事態も起こりかねないのである。

これはすべて法律・条約に關する問題ではあるが、もう一つ問題点となるのは、この条約により朝鮮籍の人々――現在約三十五万人――の処遇である、これは条約に關する限り韓国人の永住を認めることであつて朝鮮人――朝鮮籍――の人々への永住権を認めたものでは決してないという点にある、ここに、一九六五年十月二十八日の衆議院における横山利秋氏（社）の質問に對する政府側の答弁が問題になつてくるのである。ここで話された内容は韓国が国籍であるか用語にすぎないか、二十七日まで用語であると言つていた政府が二十八日に急に国籍であると言ひだしたのである、もしこれが国籍であれば、もちろん北鮮の人々の居住権はおそらくは認められないであろう、しかし用語にすぎないとなれば、まだ朝鮮籍の人々の居住権はいくらかでも認められるのである、又現在、政府は国籍は韓国人と韓国との問題であると言つておきながら、朝鮮籍から韓国籍への国

籍切り変えを認めその反対は認めないのである。そのために、韓国籍から朝鮮籍への切り変えを許さないのは、韓国々内法の徴兵に日本が援助しているのではないかと懸念する動きもあるのである。

このような問題点があるままに条約は結ばれてしまった。政府ではこのような疑問をすっかり掃除してから条約を締結すれば良かったと国民の批判も高まっている。そして条約の結ばれた今では、我々のしなくてはならないことは、今迄朝鮮人にしてきた偏見と差別をなくすことである。又この在日朝鮮人の問題を基にして、皆さんが自分のまわりの差別について考えてくれれば幸いである。

「人種差別は人間の尊厳を侵し、平和と安全を乱すものである。」
第十八回国連本会議で満場一致で選択された。(人種差別撤廃宣言)

日韓条約の経済的側面

野口 和康

韓国における激しい日韓条約反対運動は、「韓日国交正常化が、これまで商業借款によって浸透してきた日本資本に、いよいよ直接または合作投資による本格的な韓国市場進出の道をひらくことになる」という点を最大の直接的根拠としている。これに対し朴政権は「そのような議論は主体意識を欠き、いたずらに日本の侵略を妄想する敗北論であって、対日経済協力は韓国の自立経済体制の確

立および経済的繁栄の基礎構築に寄与する」(『韓国会談白書』他)という意味の弁明を行なっている。その朴政権を相手に対韓経済協力を進めようとしている日本政府や財界筋もこれに歩調をそろえ「日本は隣人の友人を助けるのだ」と強調している。このような朴政権の弁明や日本政府の説明のとおりならばまことに結構な話です。しかしそれにしては韓国国内の反対運動が大きすぎると思う。そして忘れてならないのは、日本資本の対韓進出に対する韓国民衆の反対々ということだ。

日韓経済協力によって韓国経済の危機が打開されるという主張の基礎にあるものは、韓国経済の危機症状は根本的治療の必要はなく、いわば「売薬でもって十分に治せる」という考えです。しかし、このような考えは韓国経済の現状とは著しく隔絶したものであり、実際には慢性的な危機状態が続き、そのような状態が体質化している。今や在来的な解決方式では打開不可能な重大破局に直面しています。

これまでの韓国経済の歩みにみられる主要な特徴は「アメリカ援助への過度の依存体制下に、慢性的な苦悶を持続してきた」という点です。韓国経済のアメリカ援助への依存度は、たとえば三十七億ドルもの貿易赤字をそれによってカバーされた一例によって、もうかがえる。こうした高度の対米依存は、たしかに物的自給力の大幅な欠如からくる諸混乱の抑制に一定の寄与をした。しかし問題は、こうした物的自給力の大幅欠如——すなわち生産力の停滞と衰退——というものが、多量のアメリカ援助にもかかわらず、ならん改善されなかったばかりでなく、むしろそのために一層ひどくなったという事です。

大量のアメリカ余剰農産物導入によって、もともと主要な産業部門である農業生産が激しい衰退を余儀なくされるに至ったという事実が、それを典型的に示している。これはアメリカの援助というのが、韓国をみずからの反共アジア政策の最前線基地として確保するという目的を持った軍事的性格のもので、経済構造の変革や、それに随伴する社会的・政治的変動をめざす工業化を、支持するようなものでは決しなかったのです。このような基本的性格を持ったアメリカ援助への依存体制下の韓国経済は、みずからの主権的力量をはるかに越えた、過大な軍事費負担にあえがねばならなかった。

韓国が六十万人にのぼる大軍を維持し、そのための過重な負担に苦悩しているのは、韓国自体の必要というよりも、何よりもまずアメリカ極東政策の要請によるものであることは、こんにちでは韓国の多くの経済学者達によっても指摘されている。この過大な軍事費負担のシワ寄せは、恒常的に膨大な財政赤字——通貨の増発という形で行なわれざるをえなかった。そして世界にも類を見ないような激しい悪性インフレを累進させるに至りました。こうした条件の中で、ありとあらゆる不均衡が激化し、拡大したのです。この多くの不均衡を集中的に表現するものこそ、一方における「農民や中小企業者」「賃金労働者の流浪民的存在への地位悪化」「失業大群の存在と、地方における、彼らからその生存を脅すような租税政策や農民収奪政策」などによってかき集められた社会的剰余と、アメリカ援助に寄生し、驚くべき程の富を築いた一部少数の財閥及びこれと結合した政治勢力の腐敗との間の非常なアンバランスです。

このような韓国経済について有数な韓国経済専門家である洪惟有ソウル大教授は『韓国経済が現在直面している困難から脱却するた

めには、何よりもまず対内的・対外的均衡破壊の根本要因をなしている財政赤字の構造を改編する必要がある、さらにそのためには軍事費支出などの、消費的支出の果敢な削減が不可欠である。』と指摘している。また、「現在のこのような従属的・奇形的な経済構造と政策体系とを国民経済的なものに根本的に改編しうる基本契機が作り出されぬ限り、外部からどのような援助が持ち込まれても、韓国経済のためにはプラスとなるどころかマイナスにしかならないだろう。」と断定している。

いわゆる最後の政權の異名をとる朴政権によって「成長よりも安定を」という在来の経済政策基調とはニュアンスを異にする工業化のための第一次五年計画が持ち出されたことは、工業化の否認の上に立つそれまでの経済政策基調の行詰りを反映するものであった。そしてこの計画も机上プランの域を脱せず、事実上失敗した。

日韓経済協力によって日本から供与されるのは、無償三億ドルと有償の政府借款二億ドルならびに民間借款三億ドル以上であるが、このうち不確定な民間借款は別として、政府の計五億ドルからは韓国の対日コゲツき債務がさし引かれるので、結局四億数千ドルが十年分割で韓国に入っていくことになり、年国ベースにして四千数百万ドルで、無償分だけで二千数百万ドルになり、韓国が現在規模の経済水準を維持するためだけでも、自力稼得分以外に年間四億ドルの外貨を必要とする現実に照らすことはそう大きな額とは言えない、ましてやアメリカ援助が日韓交渉妥結を好感して、さらに削減される気配を見せるとすると話はさらにシブくなる。つまり日本からの経済協力は、その絶対額が少ないうえに、これまでに減

ったアメリカ援助ではなく、これから減らされるアメリカ援助の肩代りにされる可能性が濃いということです。

次に、一口に総額八億ドルと言われるが、五億ドルまでは債務に他ならないのです。そして韓国側唯一の債務である無償三億ドルといえども別に韓国側が自主的に使用できるわけではなく、購売生産物や用役の契約証証権は日本側に帰属し、さらに購売生産物及び用役の輸送・保険・検査などもすべて日本側の手によって行なわれるのです。さらにそのうえ、こうした購売の対象となるものは日本の「生産物または用役」に厳しく限定されている。これではだれが見ても経済協力力の重点が韓国側にあるのではなく、日本側の販売にあるのだということがわかりになるでしょう。

日本が友人を救うために、経済協力力の効率的な運用のためとして、韓国の経済計画や政策に対する関与をしようとしているのも事実です。しかし日本側で発表されている各種の対韓経済協力構想には、韓国の経済開発方式に関する「卒直な忠告」が含まれているばかりでなく、日本側の当局者の中には、韓国経済計画作成過程への日本の参画の必要性を公然と主張する人も現われている。（「日本経済新聞」四月四日付座談会での牛場外事務官の発言。）

このようにして日本の重化学工業製品の輸入と韓国の一次産品輸出、低生産性の韓国経済を下請的補完関係においた高生産性の日本資本による飛躍的な資本蓄積といった典型的な垂直的分業関係の強化をもたらす、停滞的傾向と従属的・奇形的構造の一層の強要をもたらす可能性が著しく大きいと言えましょう。しかしそうは言っても、韓国内にも日韓経済協力力の「寄与」を確実に受ける受益者はいらる。これまでアメリカ援助などを養分として生成・存続し、そ

の援助の急減によって栄養源の縮小に困惑しきつていた少数の特定財閥や、それと結合する政治勢力の場合がすなわちそれなのです。彼らが反対運動を無慈悲なまでの暴圧手段によって封じようとしているのは、決して偶然ではない。こうして韓国経済の矛盾は、より深められることになり、政治的不安と混乱が激化するものでありましよう。そして日本も侵略者々として直接その渦中に巻き込まれる見通しは大である。そうだった場合に、激高する韓国民衆のナショナリズムを「排日」「反日」運動と決めつけ、権益擁護や「居留民保護」のための実策措置が講ぜられる可能性もあるのです。

私は今まで「日韓条約」に反対する立場で書いてきました。しかし私が皆さんに望みたいことは、「日韓条約」に賛成するとか反対するとかいうことではなく、皆さんにもっと知って載きたい、ということなのです。つまり、政府の言っていることは正しいでしょうが、全てではないのです。私が書いたこともそうなのです。皆さんはでき得る限り全てを知り、その上に立って御自分の意見というものを持つよう心がけて載きたいのです。

日韓条約の軍事的側面

青柳 進

一九五一年GHQシーボルト外交局長のあつせんで開始されて以来、去年六月二十二日に本調印が行なわれるまでの十四年間に渡って進められてきた日韓条約が、韓国において衛兵令、日本では自

を裏書きしていると言える。

・三矢計画とは

韓国の李東元首相は「佐藤首相とはアジアの集団安全保障について話した。韓日条約の主なるねらいは、中国を中心とする社会主義に対する集団安全保障にある。」と言っている。三矢計画とは簡単に言って防衛庁の出したもので、米軍と自衛隊の秘密の戦争計画で、第一に日韓会談を妥結し、南朝鮮に在る「国連軍」（実は米軍）が戦争を始めるのに協力して自衛隊も参戦し、北朝鮮・中国を攻撃する。そして国内を戦争体制におくということです。これは一九六五年の二月国会で問題となり、首相は、初め「知りませんでした。」しばらくしてひらきなおし「防衛庁も国防上当然の研究を行なうための国内法の準備をする。」と言い出している。三矢計画の第三動・状況下の研究ナンバー十一の抜すい「米軍の日本を基地としての戦闘作戦行動は、朝鮮における武力戦を有利に、かつ、迅速に進展させるための一つのポイントであり、又日本としても、朝鮮の態勢を極力早期に、自由陣営の勝利によって終結させることが、波及を小規模にとどめる最良の方策であろうと判断される。」と言ふ考えは防衛当局の率直なところだといえる。又一九五一年九月八日、サンフランシスコで平和条約と旧安保条約と締結した際、吉田、アチソン交換文書を取りかわし、朝鮮動乱に従軍する国連軍の軍隊が日本国内及び附近で行動することを承認し、その便宜をはかることを約束している。これは六〇年の安保改定の時に引き続き効力を有する々と確認されている。それ故に戦争が起つて在日米軍が国連軍として出動する場合には、日本は自動的に国連軍に基

衛隊の出動をはめかして、両国の反対勢力を弾圧しながら、妥結されねばならなかったか。それを考えるのには、アジア情勢（外因）、日本独占主義自身の持つ矛盾（内因）を頭に入れておきたい。では先ず第一の外因であるが、この会談は「日米韓の三角会談」と言われてきている通り、アメリカの極東における政策の一環として、当事者である両国に会談妥結を終始要請してきた。だからアメリカはこの会談に非常な関心を示しているのは承知の通りである。なぜか、その理由の一つに「一昨年の中国の核実験の成功と一昨年後半以来のベトナム情勢の悪化に原因があると言えよう。客観的に見て、アメリカのアジア政策はかつてない程の深刻な危機に直面している。大戦後十数年に渡って続いていた米ソの冷戦は六十二年のキューバ危機をきっかけとして雪どけの方向に向っていたが三年前のモスクワにおける部分核停条約の成立以来、世界は米ソ平和時代に入った。こうして国際間の緊張はヨーロッパからアジアへ、米ソ対立から米中対立となった。これは一昨年のトンキン湾事件以来、北爆までの対立にいたった。（この場合ソ連は、本腰を入れたベトナム介入はやらないだろう。）又中国と正面衝突となれば本土を攻撃することをねらっている。朝鮮戦争の時、アメリカは中国との本格的決戦を回避し、満州爆撃を計画したマッカーサー元帥が、時のトルーマン大統領によって罷免させられた事もあった。そして昨年春韓国山航空基地にF-105戦闘爆撃機を配置している。そうすれば米中対決となった時三十八度線に飛火する事が考えられる。これは昨年の五月中旬朴大統領のアメリカ訪問の際「十七・十八日の米韓首脳会談では中国がベトナム紛争に介入した場合、朝鮮での戦争が再開されるとみている。」と言っており、このことは事実

地の使用、その他の便宜を提供する義務を負わされている。

・自衛隊の海外派兵の問題

六二年十月一日付「東京新聞」には次のような事が書いてあった。

①防衛駐在官をソウルに常駐させることに共に、自衛官と韓国軍人の交換視察を行なう。

②韓国軍の航空機の一部は、国連機として民間会社で修理しているが、艦艇その他の修理などを日本でやる。

③航空自衛隊では台湾、韓国と防空共同作戦がとれるようにする。

④非常時の際対馬海峡を封鎖する。

これは六二年十月の日米安保協議委員会でも秘密の中に合意された。日韓会談の軍事的側面を表わす言葉として、「NEATO（東北アジア条約機構）結成への第一歩」というのがある。これに関連して自衛隊の海外派兵が問題となる。六月二十日の「朝鮮日報」で元韓国々務総理丁榮泰氏が韓日協定調印は何を意味するかで「このままで行けば、日本の兵隊が再び国土を踏むようになることは間違いない。我々がそれを黙認できるだろうか。死んでも民族の魂だけは生かされねばならない。」

・アメリカの中国封じ込み政策

一九五四年二月当時のアメリカ国務次官補は下院においてアメリカのアジア政策を述べた。

クーパー議員「政府の中国及び台湾に対する政策は、次のよう

に解釈しているのですか。つまり中共に内部崩壊の起ることを期待しつつ限定されない期間に渡って常に中共に武力攻撃の脅威を与え続ける政策を理解してよいのですか。」

ロバートソン国務次官補「そうです。それが自分の考えです。」
クーパー議員「言葉を考えて言えば、アメリカはその限定されない期間中、台湾及びその他の極東の諸国に援助を与え、冷たい戦争を続けるのですか。」

ロバートソン国務次官補「そうです。」

クーパー議員「そしてアメリカの指導権のもとに台湾を中心とする一連の極東諸国を軍事的に支援し、中共へ武力的に突入する時期を待つというのですか。」

ロバートソン国務次官補「そうです。まったくその通りです。」
また同年十一月二十三日、アメリカ第十軍団長オルモンドは「中国軍に対抗するには朝鮮ほど都合よい戦場はない。補給基地、海空軍の支援を受ける基地として朝鮮よりもよい戦場はない。後方基地となる日本、フィリピン、台湾基地は、中国ソ連からの攻撃に対して安全である。韓国は第一級の戦略的地域である。」と声明している。以上はアメリカの「中国封じ込み」政策と日韓交渉とが不可分の関係にあることを物語っていると言える。同時にアメリカの集団的防衛政策が会談と前後して実現されつつあった。それは全世界に「共産圏」封じ込み網を結成することである。アメリカと軍事的に結びついた国はパキスタン・フィリピン・ニュージランド・オーストラリア・日本・韓国・台湾である。この中のSEATOはパキスタンとフランスが、抜けたので、経済的にもそうとう苦しい。それでアジア特に極東においての結びつきが必要となってきた。これ

が日韓条約を促進させる一つのものと言える。

・なぜベトナム戦争と関連するのか

アメリカは現在ベトナムで泥沼のような処に入りこんだのと同然で、ますます悪い、方向に向って行く。ベトコン（民族解放戦線）は南ベトナムの四分の三以上を解放し、又SEATOのパキスタン、フランスが離米傾向のためSEATO自体が機能麻痺の状態になっている。このため反共路線を固めていかななくてはならない。しかしアメリカの軍隊は国外と国内の一定数を保持して行かなければならないのでアジアの各国の援助が必要となってくる。これでベトナム戦争と日韓条約の締結がスピードアップされたことの結びつきが理解できる。

・日本人はどうすべきか

今まで書いてきたが自衛隊の海外派兵の問題でも危機意識過剰なところがあるかも知れない。日本が工業力の提供を拒んだとしたら、つまりアメリカが利用することに反対したとしたらアメリカのアジアにおける活動は弱いものとなる。

一番の問題はアメリカの極東戦略が中国封じ込み、朴政権が韓国軍派遣（自己延命のため）を進めている時に日本が反共軍事協力を主体として対韓外交を続けて行くとなると、それは危険なものとなる。それはアジア人が同じアジア人と戦うという不幸な事態に手を貸すことになりかねない。唯し隣同志である日韓両国が自然な形で国交を回復するということは反対すべきでない、むしろ歓迎すべきことである。しかし我々日本人は唯単に利益を得るためでなくア

ジア全体引いては世界の平和のため真剣にそして進歩的に見て行かなければならないと思う。

最後に我々日本人は今の段階に於いて一刻も早く殺し合い侵略を止めて平和を望むために全世界の人の心にあの広島・長崎の人々とともに訴えなければならぬだろう。

それが現在我々ができる唯一のことである。

□□□おわりに

ばくたちは不正確な知識で論文を書いた。だから、もちろん間違っているところも多いだろうと思う。その上ばくらは学生である。学生である僕らがほんとうの社会問題について書けるかは疑問である。でもばくらは学生という領域内で、知らない知識の内を書いた。そしてそれゆえそれなりの真実もふくまれていることを確信する。一観念的ではあるがーこの文に対して質問、疑問のある方はどしどし社研に書面でも、口頭でも結構ですからたずねに來て欲しい。

重症心身障害児問題

灯　　サ　　ー　　ク　　ル

脳性マヒと知らされた時

世の中にそんな病名が

ある事すら知らなかった

おろかな母よ

一年目には死を思い

二年目にはあちこちの

病院をかけ廻り

三年目に初めて知った

母の「道」

ああこの子は

私の師であり

いとしい神の子であった

不二愛育園々長

加　藤　すみ子

※

※

※

「重症心身障害児」私たちは二年前、こんな言葉は知りませんでした。この言葉の持つ意味の重大さを知りませんでした。私たちはある新聞によってこの言葉と現実を知りました。

私たち高校生が「重症心身障害児問題」の現状、実態を調べていくうちにこの問題は一部の人たちつまり障害児の両親だけの問題ではないと気がつきました。この問題は私たち人間が一度は考えてみなければならぬ永遠の問題なのです。私たちの調べたことをあげておきますから皆さんがこの問題を考える場合に参考にしてください。

まず、重症心身障害児とは、

1 心身障害が単一ではあるが、重症であるもの。例えば重症白痴のように、或は重症肢体不自由児のように何才になってもお座りもできない、寝返りすらできないもの。

2 心身障害が二重或は四重とかさなりあっているもの。

3 幼若であるため、現実には収容所がどこにもない障害児。以上三つに分類されます。

―島田療育園（重症心身障害児収容施設）

園長小林提樹博士の分類による―

この子どもが生まれてくる原因については、充分に解明されていません。しかし、遺伝的なものは少なく、妊娠時、出産時における障害が多いようです。さて、在宅児の現状はどうでしょう。在宅児は施設収容児よりはるかに多いのです。例を二つあげておきます。

―『全国重症心身障害児（者）を守る会』発行の『両親の集い』（一九六五年十月号）の中より―

「私の娘は現在三十二歳。脳性小児マヒによる左下肢の中等度の

マヒ。耳は聞こえるのですがしゃべることはできません。お便所へは世話をするものが時間的に連れてゆきます。食事はスプーンで一人で食べます。着る物はぬがせたり、着せたり誰かがしてやらなければ自分ではできません。けいれんやてんかんは時期的におこります。施設をお願いしましたがみなことわられました。そこで政府、社会、守る会へお願いします。私がこの子をいついまでも世話をしつづければよいのですが、年齢も七十八歳の老人です。し、二月中旬ごろ事故で骨折して、いまだに病院に入院しております。るす中は兄嫁のやっかいになっておりますが、家の方も商売をしておりませんし、学校へ通っている子どもの世話もしなければなりませんし、たちまちみんなが困っております。私も退院できても自分のことも世話してもらわねばなりませんので、娘の世話ができません。一日も早くよい施設を、年齢制限のない困っているものから入れていただける施設を作ってください。」（京都、不具の子を持つ悩める老人より）

その次にもう一つの例は朝日新聞「おんもに出たい」⑥を抜粋します。

二人の障害児を男手一つで養育しているAさん一家はひどい。同家をたずねると二間きりの家の中は薄暗く雑然とちらかり、その中にごろんと二人の男の子が寝ころんでいる。下の子はテレビの子ども番組に見入っているが、上の子は天井を見つめたまま。Aさんは小学校を出るとすぐオケ屋に奉公して年期を入れた腕のよい職人。結婚して四人の子をもうけたが、長男（一八）と次男（一〇）は生れながらの身障児。脳性マヒで手足が不自由な上に言語障害があり、おまけに重度精薄と、三重の障害を負っている。次男はやや症

状が軽く、両手は使えるし寝返りも打てるが、長男はそれすらできず、上を向いて寝たつきりだ。二人の間には心身共に健康な娘さんが二人いるが、奥さんは八年前、白血病でなくなってしまった。それからはまだ幼い四人の子をかかえて男手一つの生活が始まった。よい勤め口があっても、始終、帰宅して子どもの面倒を見なければならぬので、遠くには通えず、いきおい近くの木工所に勤めている。

朝晩は娘さんが手伝うので助かるが、昼休みは勤め先から飛んで帰って、二児の世話を一人ですなければならぬ。まず二人のおしめを取替えてから食事こしらえ。「支度ができると二人を両側に寝かせサジで交互に食べさせるんだが、それがへ、小一時間はかかる」それから飯をかつこんで職場に戻る毎日だ。残業などはできないから収入も少ない。

だがそれは生活保護で補ってもらっている。二人とも治療らしいことは何もしていないので医療保護はないが、地元の民生委員などの努力で生活保護費は限度いっぱい支給される。ほかに重度精薄児扶養手当（月一人千円）と甲府市身体障害児児童年金（年一人四千円）も支給されているので、「金の面はどうやらこうややって行ける。」と言う。しかし、問題は金ではない。寝たままといつても子どもの身体は大きくなる。フロに入れるのは大仕事。月に一、二回がせいじいばいだ。便はすべておしめに頼っているが、赤ん坊とちがつて汚れもひどい。「まとめてタライに入れておいて、熱湯をぶっかけて消毒し、せんたく機で洗う。いつも百五十枚ぐらいいる。うちの財産はおしめだナ。」と言う。子どもの世話をするだけがAさんの生活のすべて。「子どもを考えると会社の慰安旅行に行く気

もしない」息子たちのことはすっかりあきらめている感じで「なまじつか動き回らないだけ始末がいい。」というのだ。「先のことは考えない、考えたら生きていけない」というAさんにこの子たちを一生面倒をみてる施設がほしいと思わないか、と聞いたら「もちろん、そうしてほしい。ただどわしが死ぬまでにはむりでしょう。施設はできてもヘエ、そこで働く人がいるかどうか。こんな子どもたちは親以外のお他人には世話できないですよ。」

「あなたに万一のことがあった時どうするつもりですか」「私が死んだら、施設に入れてもらいたい。だが、それを約束してくれないなら、私は二人の首をしめて一緒につれていく」Aさんはこう言うのだ。

以上、在宅児の現状の一部と親の訴えを紹介してきましたが、いまだに座敷牢にとじこめられ、太陽のない日々を送っている在宅児もいるのです。一日も早くこれらの在宅児のために数多くの施設が建設されることを望みます。次に施設の現状を述べてみましょう。

現在、重症心身障害児は全国に三万人とか一万七千人（厚生省調査）いるとか言われています。この彼らを収容する施設は全国に三ヶ所しかありません。それも民間施設で国公立施設ではありません。三ヶ所とは都下にある秋津療育園、島田療育園、琵琶湖の近くにあるびわこ学園です。では実情はどうでしょうか。秋津療育園と島田療育園を例にあげて考えてみましょう。

秋津療育園

〔環境〕

西武池袋線秋津駅下車。徒歩一五分。白い鉄筋コンクリートの平屋建て。

〔ベッド数〕……………一二二床、〔従事者数〕……………三三名、

〔患者数〕……………九三名

島田療育園

〔環境〕

京王線聖蹟桜ヶ丘駅の西約六Km、バスで登三十分で中沢または島田療育園前で下車。小高い丘の上にある鉄筋コンクリートの建物。

〔ベッド数〕……………一六九床、〔従事者数〕……………一二〇名、

〔患者数〕……………一五〇名、

両方ともに国と都から援助として国からの援助（医療費三万円＋指導費五千元）＋都の援助金＋寄付四万五千元（一人当たり一ヶ月分）その他に親の負担があります。ここではまず第一に施設の環境について考えてみましょう。

両方とも都心から離れています。特に島田療育園は駅からこぼこの道を約三十分バスに乗っていかねばなりません。したがって、一般人の奉仕にたよっている現在の社会情勢で、奉仕にくる人たちは一日がかりでこなければなりません。また、内部では従事者の慰安ができないのです。まわりに娯楽場がないだけに彼女らは交代をするとすぐ都心に向かい、一時のやすらぎを得、またすぐに帰ってこなければならぬのです。

次に問題になってくるのは従事者の問題です。ここに一般の看護婦の種別を載せてみたいと思います。

〔看護婦〕

①資格：④高校卒→高等看護学院・看護婦養成所→三年間→看護婦国家試験→資格

などの席上で、都が地方の看護婦を引っぱっては困ると抗議された。

③看護婦を集めると言えば、医師会の猛反撃を食う。

④本来の看護業務の他に子どもたちの日常生活の世話が大きなウェイトを占めるから看護助手（無資格者）を採用したいのだが医療法に縛られて、採用できない。

⑤脳性マヒ施設のような新しいタイプの施設には従来の病院とは違う新しい基準を作った欲しいと何度依頼してみても園を作ってくれない。また、重労働になるのに対して具体例ではあるが、北療育園では看護婦には特別手当として、昼食に七十円、夕食に八〇円支給されるのみである。

このような不足の理由があり、結論として言えることは「重労働に安い給料」という矛盾があるということです。この現状に対して意見がでていたのであげてみます。

①一般人側から（古い資料からの抜粋）

島田療育園を見学した。私は最大の問題はその立地条件であると痛感した。また山間の辺地にあるので慰安設備も皆無といったところである。うら若い人の多い看護婦で、しかも激務とあってみれば「愛の奉仕」にも限度があり、休養と慰安とは絶対必要である。一日も早く改善されることを望む一人である。（ある団体役員の見解）

②看護婦側から

一分も休む事なく働かねばならないし、また重労働であるので寮に帰った時はもうくたくたになる。また体はもう大人である子どもたちの便の始末、おむつの交換、こはんの世話、子どもとは

〔看護婦〕

①資格……………中学卒→看護婦養成所（都道府県知事が指定）二年間→看護婦試験→資格

②総数（昭和三十八年末）……………九一六三二人

③初任給……………一四八七〇円

④仕事……………正看護婦より簡単・補助的仕事（入院患者の身の回りの世話）

〔看護助手〕

①資格……………正式には何も持たない。

②総数……………はっきりわからないが、多くの病院で働いている。

③初任給……………一三〇〇〇円程度。

④仕事……………看護婦の手助け。重症心身障害児施設「島田療育園」に來た秋田県のおばこ天使たちはここに入る。……………

次になぜ重症心身障害児を世話する看護婦が不足しているか。その理由をあげてみましょう。

①全国的に看護婦が不足している。なぜかというと夜勤（北療育園（都立身体不自由児施設）の場合、準夜勤と深夜勤と合わせて月に十回）があるので結婚後、共稼ぎができない。保健婦や養護教諭に変われば給料もよい。

②都が看護婦募集の広告を全国的に出したら、全国衛生部長会議

違つて少なからず抵抗を感じる。けれども愛を求めて身をすりよせてくる大きな子どもたちのあどけない顔を見ると、それらの感情もいつしか消えて自然に子どもたちと一心同体になっていく。

また、次のように看護婦が要望しています。汚れない純真な心だけがこの子どもたちのとりえなのだ。人々が重症児問題を対岸の火事とせず、自分の問題として考えてほしい。今の私たちは議論ばかりで子どもたちは救えない。まず行動しなくてはならない。多くの若人がこういう種類の職業に目を向けてほしい。この種の職業に就く人が「天使」と呼ばれなくなる日まで、自己の意志でなく不幸を負わされた重症心身障害児たちが与えられた生命を安心して全うできる日が一日も早く来る事を祈りながら青春を賭けて悔のないこの仕事に明日もあさっても全身を打ち込んでいきたい。

この訴えを私たちは心にとめてこれからの歩みを進めてゆきましょう。これで一応、施設の現状は終わりました。

a 目的

本人及びその家庭の保護救済の為、各種の障害者を一括収容。
千人以上の収容能力を持った総合施設設置

b 各国で障害対策が必要となった緊急の動機

重症の障害者がいる事——障害者とその家族・近隣の人々が健全な生活を相殺してしまっている。

c 施設の形式

千人以上の収容能力のある施設——スタッフ等は既設病院と連

・ 重症児問題を児童福祉の重点政策とした。

(1) 重症精薄児国立収容施設

④四十一年度の方向——重症心身障害児施設新設2、増改築2

⑤四十一年度から長期五カ年計画——東京・大阪を始め、各ブロックに設置、土地は国立療養所——有効な転換

(2) 在宅指導態勢——強化

(3) 重度精薄児扶養手当——重症児扶養手当（支給範囲拡大）

精薄の外に精神障害、身体障害、結核等に基く重症児

(4) コロニーの研究（四十一年度——調査研究）

社会復帰の向上に努めるとともに働きながら一生を暮せるコロニー建設。

また、四十一年度予算案にみられる対策は次のものです。

(1) 重症児十一ヶ所五百二十ベッド新設。東京を除いてはいずれも国立結核療養所を転換するもの。

(2) 重症心身障害児月千二百円の扶養手当を支給。

(3) コロニー（心身障害者の村）建設のための調査費五百万円。

昨年よりよくなっている予算、対策ですが、まだ数多くの重症心身障害児が法律の谷間であえぎ苦しんでいます。一日も早く、政府の力でこの子らを救ってあげてください。しかし、いくら政府がやってくれても私たちがこの問題について知っていなければ、この問題を解決させることができません。そこで、今度は文化祭のために取ったアンケート（学生だけ。質問が不備なので、結果はあまり正確ではないが。）を利用して、大衆の認識度、関心度についてみてみましょう。

(1) あなたはこの社会に精薄児がいる事を御存知でしたか。

携。

○理由

- ・ 各種の障害者を分類できる。
- ・ 収容数の変動にもかなり幅広く応ずることができる。
- ・ 経済的である。

西独においての重症児の施設と取り扱い。

【考え方】

①価値のない生命というレッテルを貼り殺す。（三十年前）。

②弱い者は守られるべきだというキリスト教思想に基く考え。

※②の考え方によりヨーロッパでは早くから社会事業に対する法律ができた。

【対策】

第二次世界が終わるまでは全身体障害者は保健所に申請され、資金・施設・その他・実際の看護などはキリスト教徒の中から出た。一九六一年に新しい社会保障制度によって金銭的援助を得ている。

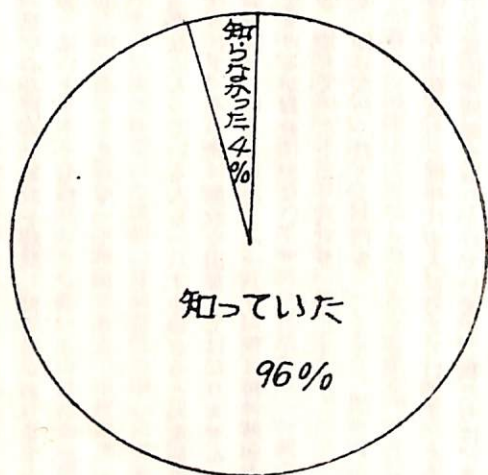
【程度別取り扱い方】

①（軽い場合）——家庭で育てられることが理想。その為に特に母親は特定の保健所で正しい看護の方法を教えてもらうのが必要。

③（施設に入れる場合）——特に重症児は早期に施設の中で教育する。

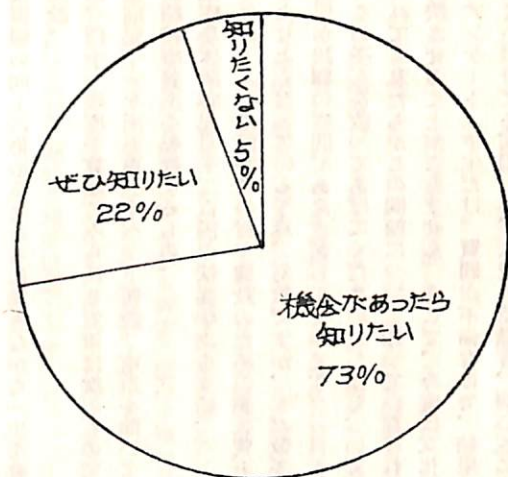
このように欧米の施設は日本と比較すると、歴史が深く総合的であり、日本のように症状別に施設を建設していません。日本も欧米の施設のようにしてほしいものです。

次に四十年七月十六日、厚生大臣の質疑に対する応答から得た政府の方針。



- ④ 知っていた
- ⑤ 知らなかった

- (2) この問題を知った現在、もっとよく知りたいと思いませんか。
- ④ ぜひ知りたい
- ⑤ 機会があったら知りたい
- ⑥ 自分に関係ないから知りたくない



(3) 現在、我國には施設が数ヶ所しかありません。そして、その施設に入るには相当のお金(月二・三万円)を払わなければなりません。もし自分の子供に精薄児が生まれたらどうしますか。

⑧ 家で普通の子同様に育てる

.....七%

(b) 経済的負担は覚悟で施設に入れる

.....三八%

① 殺してしまう

.....十一%

② 施設をもっと建ててもらおう様働きかける

.....三九%

③ その他

.....五%

(4) 重症心身障害児施設を訪ねたことがありますか。

⑧ はい.....七%

(b) いいえ.....九三%

(5) 施設に入っている人も一八才を過ぎると児童福祉法の適用を受けられず、その後は施設を出なくてはなりません。このような矛盾を知っていましたか。(一八才以後は精神薄弱者福祉法の適用を受けるが施設は少ない。)

⑧ 知っていた.....六六%

(b) 知らなかった.....三四%

このように私たちと同年代の人は考えています。この所、マス・コミでも重症児問題を取り上げています。私たちは、そのような報道機関を通じて、もっとよく知ろうではありませんか。児童憲章第一条に「すべての児童は身体が、不自由な場合、または、精神の機能が、不十分な場合に適切な治療と教育と保護が与えられる。」と記されています。しかし、本当にこの条文通りに対策がなされているでしょうか。また、児童福祉法第一条には「すべて国民

は、児童が心身ともに健やかに生れ、かつ、育成されるよう努めなければならない。——とあるが、これはただ単に文字にすぎないのだろうか。いや、そうではない。私たちはここで法律があることを忘れてはいないでしょう。しかし、重症心身障害児に対する法律は現在ありません。児童憲章実現のために重症心身障害児に対する法律を一日も早く作成しましょう。

今年度一番面白いニュースとして、コロニーがある。今からコロニーについて考えていきたいと思います。

「朝日新聞「おんもに出たい」⑧」の中にある討論を紹介しておきます。

コロニーとは言葉通り言えば「集団居住地」とか「町」とか訳される。障害を持つ人々を長期にわたって収容し、保護する施設の集りで、そこで働く人々の施設も加わって、それ自身が一つの町を形づくるといった大きな夢をこめたものだ。だから、コロニー計画は一つの町づくりであって、お金と土地があればできあがるという簡単なものではない。

以下はコロニー懇談会での討論、

【場所】

○広大な土地を必要とするが、どのような条件が考えられるか。

「コロニーも文化や都市に近いことが必要だ。」と関根真一さん(国立武蔵療養所)や牧賢一さん(社会福祉協議会)。

また施設の立場から菅修さん(国立秩父学園)は「施設に入っている者と家族との交流がとだえると、好ましくない結果が生れるので、訪問する家族の便利も考えた方がいい。根本的にはこうしたコロニーが各地方にいくつか出来れば良いと思う。」と説明した。

これに対して小林提樹さん(島田療育園)は雄大な構想をかかげ「逆にそこを大きな町にしてしまおう。」という考えを述べる。そこには収容施設のほか、研究所や養成所やそこで働く人々の家族の住宅、その子供たちのための幼稚園や学校、マーケットや劇場などがあり、それ自身が一つの社会をつくるというわけだ。

働く人の立場から糸賀一雄さん(近江学園)は「コロニーが最終的にはそのような形になるとしても、そこへ行くまでの、家族を持った職員の困難は大変なものだろうと思う。そうなるまでに、つぶれてしまわないかを心配する。」と言う。従事者を確保するためにも、地理的条件が大切なものになってくる。

また秋山ちえ子(評論家)は市民の立場から「一般の人々が私たちにお手伝いさせてというときに、いつでもそれにこたえられるようなものであってほしい。」と言う。

【入所者】

これまで見放されていた重症心身障害児を中心にすることに異論はない。軽症者をどう扱うかが問題である。田波幸男(肢体不自由児協会)は「身体不自由児のうち軽いものは社会復帰してゆくが、脳性マヒの子供のような場合、むずかしい。だから重症の子供ばかりでなく中くらいの障害児もコロニーに入れて、そこに保護的職場をつくり、一生面倒をみてやるのが当然だと思う。」と言う。

仲野好雄さん(精薄児育成会)は「既存の施設がこたわっている子や、今は施設に入っているがその施設が取り扱いに困る子供、また軽くて社会で自立するのが困難な子供をコロニーに入れると考

えたい。」

また登丸福寿さん(みのわ育成園)も「従来の施設が収容できな

いものをコロニーが引き受けるべきだ。」と注文する。

富田忠良さん(国立箱根療養所)は入所する人の立場から「本人や家族が喜んでくるようなものにするのが大切だ。」と言う。

【経営】

井深大さん(ソニー)はコロニーの経営にふれて「簡単に十分なお金が集まるとは考えられない。いいことをやっているのだから当然お金がくるだろうという、なまやさしい考えではだめだ。極端に言えば、健康な人もここへどんどん飛び込んで、身障者といっしょにバリバリやるようなものでなければならぬ。」とコロニー建設の気構えについて発言する。このコロニー計画もまだレールが敷かれたにすぎません。計画がいちはやく実行されてほしいものです。

以上のように現状を見ました。去る三十九年秋、不二愛育園(重症精薄児施設)が資金難のため、建設できなくて困っているという新聞記事がありました。前記のように不二愛育園の資金難が訴えられていらい、多くの人造の善意がよせられ、また、学生が文化祭のテーマに取り上げ、大きな反響がありました。私たちもその年の秋、文化祭で不二愛育園建設資金募金サークルとして、発表の機会を得て、学校側にも特殊サークルとして認められ、現在、灯サークルとして活動しております。

さて、不二愛育園はいま、世田谷区宇奈根町四九二番地、多摩川べりの非常に環境のよい所に建設中です。着工いらい、二年近くになり、やっと今年の四月には開園のはこびとなります。五十名しか収容することができないのですが、重症精薄児の施設がまた一ヶ所できあがったということでおくればせながらも前進といえるのでは



金子 進

彼は歩いた。そして歩いた。しかし砂、どこまで歩いても目の前は砂ばかりであった。それでも彼は歩いた。太陽が容赦なく彼の瘦せ細った体に熱風を吹きつけている。砂は彼の足をすくって、彼の歩行の邪魔をする。空には三日程前から、彼の死の真近いのを知った禿鷹が昼も夜も彼の後をつけている。それでも彼は歩いた。這うように。いや事実這って歩いていた。何度うつ伏せて、カラカラに渴いた砂をなめたか分からない。それでもグッと頭を持ち上げて又、歩いた。何日?何日だろうか。もう三週間も歩いたかもしれない。三週間も何も食べていない。砂漠の中で三週間も!! できるか? できるとも。事実、彼は歩いて、いや這っているではないか。もうほとんど骨と皮ばかりで驚く程瘦せていた。あの、ガッチリとした色男の面影はどこにのなかった。もう汗もでなくなったその蒼白な顔は、誰が見ても七・八十の老人の顔であった。彼は、とうの昔にまる裸になっていた。しかしベルトのわきの皮袋だけはしっかりと

ないでしょうか。

では、これから私たちのみたこの問題について意見を述べておきたいと思います。

私たちは最初のうち、ただぼうぜんと資料集めに熱中しましたが、資料を集めていくうちにいろいろな問題にぶつかりました。

まず、資料が少ないいうえに信頼できる資料がないということでした。厚生省へ行ってもわら半紙にちよとした説明しかのっていない。ありきたりの資料しかもらえませんでした。図書館へ行っても、数少ない資料を見つけても古いのが大部分をしめていました。そのような状態なので、どれを信頼してよいのやらわかりませんでした。

次に感じたのは障害児関係の団体の不統一でした。あっちへ行くところの批判をし、こっちへ行くところの批判をしあっています。自分たちの子がかわいいのは親の気持としてわかりますが、もう少し、各方面とも協力しあっていかなければ、障害児(者)の幸せ、いや社会福祉の問題の進展などみられないでしょう。一日も早く、日本が真の社会福祉国家になるように私たちすべてがこころがけていこうではありませんか。皆さんも将来学校で職場で家庭でこの問題に遭遇すると思います。その時は、この問題を取り上げて、もう一度、深く考えてみてください。

参考資料として次のものを使用しました。

全国重症心身障害児(者)を守る会発行

「両親の集い」

朝日新聞「おんもへ出たい」

彼の体にくっついていて。その皮袋から金貨がこぼれ落ちた。彼はその落ちた金貨を手探りで拾って、又もとの皮袋に入れた。十ドル二十ドルとバラバラと落ちた。そのたびに拾った。彼は、この袋の中の金貨一万ドルを一月程前手に入れた。そのために彼は五人の男を殺した。二人は銀行の男。金庫を守ろうとした勇敢な人達であった。あとの三人は彼の仲間だった。

「ま、まっくれよ兄貴!! あ、あにき」彼等は叫んだ。ズダーン!! 彼は容赦なく用のなくなった仲間を撃った。銃の先から出てくる煙をフツと吹いて言った。

「ハハ、てめえらなんか死んじまった方がこの世のためだよ。」彼は自分だけの物になった金貨をそっとたいてニタリとした。

しかし今は? そう、這い回っている。砂の中をただ水と食べ物求めて。あたかも彼の上の禿鷹が彼の肉を求めるように。彼の死を待っていたのは禿鷹ばかりではなかった。真赤な太陽も彼の死を待っていた。それは彼がこの砂漠へ来て以来一日も欠かさずガラガラと彼を照らし続けてきた。しかし気の短かい太陽は、もう待ちきれなくなったようだ。突然、怒りだしたかのように、より強烈に彼を照りつけた。熱の塊が彼の頭を打った。遂に彼もグッタリと膝を伸ばし身体中を砂の中に埋めた。禿鷹がスーと上空から彼をめがけておりて来た。

と、その時どこからともなく水の匂いがした。その匂いは彼を再び生き返らせた。思わず頭を上げた。

「み、みずだ!! 水の匂いだ!!」

彼は最後の最後の力を振り絞ってフラフラと立ちあがって、あたりを見回した。

「穴だ？」

そう、すぐ五・六メートル先にポツカリと穴があいていて水の匂いはたしかにそこららしい。しかし本当に小さな穴だ。彼はその近くへ行ってみて失望した。それは直径が三十センチ程しかない。それなのに水は遙か下にあるようだ。彼は思い切つてその穴に入ってみようかと思つた。しかしその小さな穴にはどうやっても入れそうもなかった。イチカバチカ、彼はその穴に体を入れて見た。入つた!! そう今や彼は骨と皮ばかりだつたのである。いつもの彼だつたら、もちろんはいれる訳がなかった。全くの幸運であつた。彼は、その穴にはいつてびつくりした。それは穴というより地中の部屋と云つた方がいい。高さが二メートル程で縦も横も五メートル位あるようだ。水はたしかにあつた。いや水ばかりではない、驚くのかれ部屋一杯に食べ物が並んでゐるではないか。彼はもちろん喜んで。そして急いで水瓶に顔をつつ込み、水を飲むだけ飲んだ。そして一息入れると食べ物を夢中で口に押しこんだ。

食べおわると急にめまいがしてグツタリとそこに横たわつた。目がさめたのは、それからだいぶたつてからだつた。眠りからさめて彼はやつと「考える」という事を思い出した。

「この穴は一体なんだ。誰がこんなにたくさんの食い物と水をためておいたんだ。インディアンか、いやインディアンがこんな砂漠のど真中に食い物をためておくはずがねえ。じゃあ、誰が一体? 誰が……。」

じつとしばらく考え込んでいた。

「ハハハハハ」

彼は突然笑いだした。



た。しかし今度も又、出ることはできなかった。一晩位食べなくても、さほど変わりはないのである。彼は又震えた。そして泣きだした。

「いやだ——。俺は出るんだ。この穴から出るんだ!!」

だが彼は、固い決心をした。

「よし、これから三週間にも食わないでやる。そうすれば、きっと出られる。それまでガマンだ。」

そして遂にその日一日中何も食べなかった。しかし、それは大変なことであつた。前にも述べたように、彼のまわりは食べ物の山なのである。しかし、それでもガマンしなければならぬ。三日目の夜、彼は夢の中でパンを見た。目をさますと自分のまわりには、そのパンが山とあつた。それでも彼はそのパンには手をつけずにいた。そして又、次の日。彼は泣きだした。

「食いてえ。食いてえ。」

一日中泣きとおした。目はランランと輝き、口からはよだれがたらたら落ちた。そして五日目。

「ア、あと何日ガマンすりゃいいんだ。一、二、三、四、……ア、俺はもうガマンできねえ。」

彼はついにその食べ物の山に頭をつつ込んだ。食べた。食べた。前より一層太つてしまつたようだ。

「これさえ食べればいいんだ。そうしたら明日から三週間、絶食してやる。」

そんな甘い決心が通る訳がなかった。それからまた四日しかたないうちに、もうガマンしきれなくなつた。そしてその次の絶食は三日しかもたなかつた。こうして食つたり食わなかつたりして遂に一カ月程たつてしまつた。一カ月間彼は震えて、泣いて、わめいた。

「そうだ、そうに違いねえ、他に考えられねえ。神だ。神様が俺にくれたんだ。この俺に、ハハハハハ……」

笑いながら彼はむっくり起きあがつて上を見た。入つてきた穴がポツカリと見えた。

「あの穴のむこうで、また楽しい世界が俺を待っている。うまい具合に、まだ金はたっぷりある。もう少しでメキシコ国境のはずだ。ハハハ」

彼は笑いおわると、ふとつぶやいた。

「それにしても、よくあんな小さな穴から入つてこれたもんだ。」彼は食べられるだけ食べて、その穴から出ることにした。腹一杯食べてから、二、三の食べ物を穴からほうつて地上に出した。地上に出てからメキシコ国境までの食糧にするつもりだつた。そして今度は彼自身が出ることにした。

しかし……しかし彼は満腹なのである……。そう腹一杯なのである。さつきは……骨と皮ばかりの彼はやつとのこととでその穴から入つてきた。だが、今の彼は? ハハハ何度やってもどうやっても無駄であつた。彼は震えだした。出たい!! この穴から出たい。しかし彼は一案がうかんでホツとした表情でニタリと笑つた。

「そうだ。きょうは一晚ここでとまつて明日腹がへつたら出ればいい。食べ物は地上へたくさんほうつておけば、出た時にいくらでも食えるんだ。」

そう決心して横になつて眠ろうとした。しかしなかなか眠れなかつた。不安であつた。恐ろしかった。もし明日になつても出られなかつたら……

次の日の朝がきた。彼は起きあがつて、すぐ穴から出ようとし



なぜ彼は食つたか。彼は人間だからだ。彼は心配になつた。泣き声で言つた。

「もう一生この穴から出られねえじゃねえか? いや、一生もつまい。いつかはこの食い物もなくなるはずだ。あ——」

だが事實はそうではなかつた。その山のような食べ物は、いくら食べても減つていないのだ。だが彼はまだその事に気がついてはいない。それではあの穴は一体の何の穴か。そう、あなたはもう気がついたかもしれない。あの穴は地獄への入口だつたのである。左様、彼はあの穴の前で倒れた時から、この世の人ではないのだ。彼が今、泣き叫んでいる所は地獄の世界なのである。

永遠に彼はあの穴に。永遠に一人で……。無論、あの食べ物は神が与えた物ではない。悪魔だ!! そう、悪魔があの男に食べ物を与えているのだ。

切符

十三 和子

七月三十一日、夜九時、新聞紙と本とコーヒーを持って家を出、十時八重州中央口に着く。ホールに、たくさんの方が新聞紙を敷いて坐っている。この風景を見た時、何か氣違ひの思ひがした。「

すごいな」という感じなのである。もうそれ以上何も言えない。前の方に並んでいる人に話を聞くと、その後には三百人はいらるうと思われる人が皆、みんな九州行きの切符を求めているのだそうだ。一番前の人は、朝の十時頃から並んだそうである。買えるのかなとも思ったけれど、折角来たのだから、という事でその何重にも曲がつて並んでいる人達の後に続いた。時計の針が十二時を回る頃、家に帰りたくなった。でも井の頭線の終電車に間に合わないと思い、諦める。でも、どうして夏なのに九州へ行く人がこんなに多いのか不思議でたまらない。北海道行きの窓口には六、七人より並んでいないのに。こんな所に並ぶ様な人は、んな人ばかりだと聞いて来たし、私もそう思っていたのだが、冗談じゃない、どう見たって皆、品行方正な人達ばかりの様に見える。大体、こんな所に、まともにも並ぶ様な人に悪い人なんかいる訳がない。濃いコーヒーを飲んで、本を読んだりトランプをして暇(そんなにヒマという感じはしなかったが)をつぶした。そのうち、こんな事をしている人達が、バカに見えて来て、その中で一緒に過ごしている自分も変な感じがした。他の人々は雑誌を読んだり、おしゃべりをしたり、寝たりしている。マージャンをしているのは一組だけあったが、おとなしくやっていて迷惑な感じはうけなかった。でもなにしろこんな所で一夜を過ごさなければならぬ事について、不思議な、気違いじみた妙な感じをうけた。家に電話してみる。来る時、お母さんに言わないうで(居なかった)出て来たので、泣き声を出して怒っていた。「ダッテ、ショウガナイデショ」と言って電話を切った。そのうち、東京駅着の終電車の乗客が出て行き、暑苦しい構内の事も考えず、警備員(だろうと思う。)が、戸という戸、全部に鍵をか



ら。一やっぱり非常識だったのかな? 三時頃、タクシーで来て戸口で坐り込みをし始めた家族が何組もあった。そして五時、戸が開けられると同時に暴力団風の男の人が入って来て前の方の列に入ろうとした。ここで整理している職員は相当年が入っている様でこういう人達をきっぱり後に並べた。このあと、次々と沢山の人が並び始めた。六時頃、ホールは超満員。暑さ中、不快指数は増々上がる。七時半に新聞紙(これを敷いて坐っていた。)をかたづけさせられる。皆が立つ。来た順に並ばせようと職員は苦労する。皆、睡眠不足のせいと暑さと生まれつきの図々しさのせいとが混じり合って、殺気立つ。(このすごい殺気立った雰囲気は表わししょうがない。もう死ぬ思いも同然で私等、本当にブルブル震え上がってしまった。)「私の前にいたあの人があんなところに。じゃあ、私も!」「あんだ、もっと後じゃないですかネ。」「あたしはこの人の後でしたよ。」

こういうのが一番列を乱す原因の様だ。そのあの人というのは、大体重の人で体格のいい、こわい感じの人に決まっています、その後が続くのが大抵キーキー声のヒステリックな感じのオバサン、オネエサン方である。そして注意するのが正義派のオジサンである。でも幸いにして(もとから並んでいる者にとって)そういう人々をちゃんと国鉄の人達がよく知っていて、後に回してくれる。でもなにしろ、皆が平気で、しかも大人が喧嘩(殆んど口論だが)するので、十七才の私としては、何とも言い様のない何かを感じずにはいられなかった。要するに皆は、自分のものと位置にしようとしなくて、少しでも前へ行こうとするからいけないのだ。私も内心そういう所があったがなにしろ、前の人の後についていた。切符の売り出しの

けてしまう。鍵をかけるのを知らないで、外に出ていた人がいた。帰って来て驚いていた。そのうち、外で寝てしまったようだった。電気が半分消される。一時半、フランクリン自伝を読み続けているものの、何を讀んでいるのかさっぱりわからなくなってきた。隣の人がこんな事を言っていた。「こういう経験を味わなければ、本当の旅は楽しめない。」と。でも、私はそうは思わない。こんな事をしなければ、切符が手に入らないなんて、なんてばかげた国だろう。国民にこんな事をさせておいて、先進国になろうなんて、いや、日本は先進国だと思っている人もいるんだから……全く変な国だ。ちょっと考えてみた。本当の先進国は道路と空路が発達していて、鉄道は余り混雑しない。後進国では、旅行する人が少ないから、供給がうまくとけ合っているのだろう。その日の朝、七時半に吉祥寺に九州行きの切符を買いに行った事を思い出す。希望列車名を書いて出し、九時頃来て下さいと言われた。九時に行ったら、九州行きの切符は全然ないとのこと。驚いてしまった。いろいろな駅に電話してみた。でも全然なし。そのうち分かった事は、東京駅で発売された切符の余った分だけが、他の駅に回されるという事。確かに切符を手に入れる為には東京駅に並ばなければならないという事。等々だった。でも、この後、知った事に、友達の友達のお父さんが国鉄に勤めていて、その人に頼むと、どんな切符でもすぐ手に入るという事と、私のお父さんの勤めている会社の切符係の人に頼むとやはりすぐ手に入るという事があった。弟がさっきから独りでトランプをしている。この頃、自分のしていることの非常識さを感じた。というのは、女の人はいることにはいるのだけれど、私ぐらいの人は一人もいない。それも私は小学生の弟と来ているんだか



九時までそのまま立たされている。立たされたと書いたが、殆んど人は坐ってしまふ。前夜の寝不足で足もとがふらつき、立っている体力をも消耗してしまつたという感じなので。私の隣の列にいやに生き生きとした人が列に入ってきた。警備員が列に入らないで下さいと言ったら、「あ、ここは九州行きの切符を買う列じゃないんですか」と平然と聞く。警備員「この人達は昨日から並んでいる人達なんですよ。」「どこが最後なんですか。切符はあるんですか。」「わかりませんよ。」「わからないって、国鉄職員だろう。」「後に並んでみて下さいよ。」「だから後はどこなんだよ。」

最初穏やかだった人がいつとはなしに、殺気立ってくる。先頭の方の人に切符が発売される!! しかしその順番が、私のところに来るまでの長いこと言ったら、先ず九時になったら職員が、先頭から希望列車名等を聞いてまわり、その座席をチェックし、カードをくれる。(私の番にこの事がまわって来たのは、十時であった。)それからそれを窓口に出し、切符を貰う訳であるがその窓口というのは、一人の人がカードを見て、切符をとり、お金の計算を二回して、何かに書き込んで始めて、切符が手に入るのだが、その手ぬるさには驚いてしまふ。驚くのはそれだけではない。その後で五、六人がお茶を飲みながら、ふざけあって、おしゃべりをしているのだ。いやな感じ! 家に帰ったのは、お昼の一時、延々、十六時間の間の間であった。

川と花のある町

野 呂 宜 輔

夏も真近な、ほかほかした、うららかなある日曜日の朝、昌二は珍しく一人で目が覚めた。庭のグミの木で小鳥がさえずり合っている。それに誘われて、普段着を着るとさっそく下駄をつっかけ庭に降り立った。胸をいっばいに広げると、清らかな朝の空気がさわやかな感覚を残して胸におさまった。おとし植えた梗桔もだいぶ丈夫になって、葉の艶もよく、いまにもほころびそうな蕾が三つ付いている。やつ手の葉も背筋を延ばしたように、ピンと張りつめて、葉表に水玉を浮かせている。その水玉に、木立ちからやつと通り抜けて来たような細い朝日が当たると、チカチカと繊細な光のつぶてを八方に振りまく。緑側の傍にかがんで、万年青の葉を指で拭いていると、すぐ近くで「ああ。ああ。」と言う、聞き馴れた言葉ならぬ言葉が起った。笑顔を上げると、真白なフカフカした毛の服に身をくるんだ光夫がにこにこして、障子のさんにつかまって立っていた。昌二が両手をさし出すと、まだ歩くのに馴れていない体をせわしく動かして、前のめりになりそうになりながら、飛びつくように抱きついてきた。そこへ掃除を済ませた妻が、光夫のおしめを取り換えに来た。

「朝飯は何だい。」



った時、その事務室で、ちよつとしたはずみで、持ってきた木箱の角にジャンパーをひっかけて、大きなカギ裂きを作ってしまった。

その時、いつも受け取りをしてくれる事務の女の子が、

「まあ、ひどく破れてしまったのね。私、ちよつと縫ってあげますわ。」といって、昌二の肩からジャンパーをはずし、手際よく応急処置をしてくれた。思わぬ出来事に顔を赤らめながら彼女の動作を見ていた昌二は、そのビルを出た後も彼女の事で頭がいっぱいだった。あんなちよつとしたことで、全くの他人がこんなにも身近に感じられるのだろうか。街で出会うきれいな女性のイメージが、すぐ彼女の顔に重なってしまう。好きになってしまったのかなあ、と思いがちながら、たかがちよつと親切にしてもらっただけで好きになってしまうなんてことはあり得ないと考えながらも、強く気が引かれるのをどうしようもなかった。今までこんなことはなかったのに、俺は女に飢えているのかもしれない、と考えたりした。

その日からちよつと一カ月後、又東亜商事に行った時、椿の入った大きなダンボールを抱えて、事務所のある三階でエレベーターを降りた時、ちよつと彼女が化粧室から出て来て、向こうへ歩いて行くのに会った。

「今日は、この前はどうかありがとう。」と声が出そうになったのをとっさに飲み込んで、均整のとれた体に事務服がびったりと合った美しい後姿を眺めることにした。彼女が何も知らずに事務室へ入った後、昌二は今来たばかりのような取り澄ました顔をしてドアをノックした。いつもの手続を済ませた後、「こないだは御親切にどうもありがとうございました。」と改めて礼を述べ、

「お礼に昼食にお誘いしたいんですがいかがですか。」と、つかえ

「鮭と味噌汁とお新香よ。お昼もそうなるかも知れないわよ。」
「みんなお前に吸いとられてしまつて、お父さんはうまい物が食べられないよ。」と、関係ないといったような光夫にしゃべりかけた。

「久しぶりに散歩でもしてくるよ、あと何分位で御飯だい。」

「そうね、一時間位かしら、ゆつくり光夫と遊んで来て下さいな。」

昌二は顔を洗わないまま左手で光夫を抱き、右手を冷たくもないのにポケットに入れて外へ出た。家から百メートルばかりの所に、一応農園と名付けられた百六十坪の温室があった。温室へ続く小道の入口には『田所昌二、園芸農場』と、札が立てられていた。

昌二は、気候のよいこの地に、希望通りではないが満足できるだけの土地を買い入れて温室を作り、妻と二人で忙しい毎日ではあるが、好きな花を栽培できることに満足しながら生活していた。花の内でも特にお気に入りの「おだまき」を、是非多くの人に可愛がってもらいたくて、自分がいいと思う所を細かく説明して、機関誌等に載せ、一生懸命宣伝をしていた。

緑の少なくなった都会では、家の中に置ける手軽な鉢物の草花が、わずかな慰み物として喜ばれた。

昌二は幼い頃から、わずかばかりの草の茂っている所を漁って、目新しい花を咲かせているのを掘り起こしてきては、小さな鉢に植えて、自分の唯一の独占物として可愛がっていた。大学も農学部で園芸をやつて、三年ばかり、横浜の種苗会社に販売員として勤めていた。

社員として働いていたある日、東亜商事に注文の球根を運んで行



ながらも、ビルに入る前に決心して来た事を、一応はつきりと言い切った。脈が体の至る所で感じられるほど上がっていた。

「ええ、お付き合ひさせていただきますわ。でもあんなことでお食事をお願いしてしまうなんて悪いわ。」昌二は一瞬ホツとした。

「とんでもない。ほら、あの時のままにまだ着ていられるんですよ。」

「じゃ、十二時に又ここへ来ます。」

彼女に近づく第一歩目のチャンスを得ることができて、嬉しさにふくらんだ昌二は、回りの物が全て若々しい新芽の色を呈しているように感じた。これをきっかけとして、彼女・曽根明美との交際は続き、二人の仲は発芽したばかりの根のように、どんどん深さを増していった。

やわらかいやさしげな姿。奥からマリモが浮き出て来るんではないかと思われような深く澄んだ瞳。思わず指で押してみたくなるような可愛い鼻。ゆるやかに結ばれた唇。全てに魅了されてしまった。その後数カ月の付き合いで、彼女が派手好みではなく、生活もまじめで、人によく尽くしてくれる性格であることをしっていると、昌二にとって曽根明美は離しがたい存在になってしまった。彼女の方でも昌二に好意以上の気持ちを抱いてくれることを強く感じるようになった頃、昌二は結婚を決意し、そして都会からは大部遠ざかった新しい土地に、自分達の生活を築ける目処がついた時、意志を告げた。そして三年後、現在十四ヶ月になる男の子を育てながら、屈託のない日々を送っている。

光夫が「うっ、うっ。」といって、いつも連れて入る温室の方を指さすのを、「うっ、うっ」と口まねしながら小川の方へ続く道

を真直ぐに歩いていった。ミカン畑を通り越し、東京へでも出荷するのだから、ダリアの沢山植えられてある畑を通り越して、川にそった、きれいな草の一面に茂った野っ原へ出た。アザミの生えてない所を捜すと、地面に降ろしてもらえんことをしって、キャッキヤ言いながら足をバタバタやっている光夫を降ろした。柔かい草が手足に当たるのがうれいいのか、かん高い声を吹き上げながら、どたとあたりをはい廻り出した。

小川の水はコトコトと穏やかな音をたてて流れていた。昌二は岸辺に腰かけてズボンの裾をまくり上げて足を水に浸した。ひんやりと冷たかった。心持ち前かがみになって両手で頬をささえ、向こう岸のクルマの木に目をやった。

川が流れている広い草原に寝そべりながら頬杖をついて、目の前の小さなスミレ草を眺めながら、人さし指で柔らかな葉を揺さぶったり、親子の馬が寄りそって草を食べているのを見ていたり、なだらかに続く丘の向こう、はるかにそびえる万年雪をかぶった夏山を、指の間から覗いたり、高い天空でひばりがさえずるのや、側の葎の茂みでよりきりが鋭く鳴くのを、自分が今働いて苦しんでいるような自分ではなく、魂だけの自分が自然界の美しさを感じているのならどんなにいいだろうなあと、まだ結婚する前、大学生の頃、農場で実習している時に感じた。今はそれが現実になったような気がする。

ある地域に住みついた人間は、その土地に必要な食べ物を作り、より住み易い環境を作るために働き、努力し、人間同志互いのためになる物を作りながら、より生活を高めていくのが一番自然でいいんじゃないだろうか。だが現在、複雑な問題ができ、社会構造が細

だ。

すでに朝食のお膳が整えられ、光夫のミルクもその真中に載せてあった。昌二のひどい行為を言葉で訴えられない光夫はまだぐずぐず言って目玉をあちこちにしていたが、母から「光夫、はい。マンマ。」と云ってミルクを渡されると、さっそく乳首を口におし込んで、すぐに御機嫌をよくした。

朝日がもうかなり室の奥まで射し込んでいた。



須長玲子

その一

浩二がこの山に登ってから、すでに三日たっていた。ふもとの村では捜索隊がつくられ、両親と以前の学級担任の大枝が地元警察の捜査本部で、おちつかなく歩きまわっていた。「おかあさん、浩二君は友達と登るっていつてこの山に来たんですね。」

かく分化してしまい、皆一部分の小さな開いの中で生活している今些細なことでも食べていけなくなる要素があり過ぎる。それに至る所で戦争が勃発して多くの人の生活が脅かされている。人類発生当時の人間は食料を得るために獣と戦った。そして又同族同志でも飢えている時なんかは殺し合いをやったのだから。人類がこの地球上に増すに伴って、戦争の規模も大きくなり、はてることなく現在に至っている。人類と戦争という現象は、人類が消えはてるまで相伴う運命なのだろうか、やだ、やだ……

頭のいい人間が創造されて、この地球上から戦争なんて言葉を無くしてくれないものだろうか。なんとかこんな幸せな雰囲気を感じられる地球から殺し合いが無くならないものか。と、突然「おっ、おっ。」という、もらしたという合図の光夫のうなり声を聞き、思わず想像を害されて後をふり返った。この温かいのに、まさか漏らすとは夢にも思っていなかった昌二は、あわてながら急いで毛のズボンを脱がせた。天下太平の光夫は遠慮無く、ありったけ放出してくれたらしい。すでにおしめはびしょびしょだった。拭く物も無いので、しょうがない、妻が見ていれば目尻をつり上げて怒るだろうが、辛い辛い。光夫には可愛そうだがこうする他無いと、光夫を抱き上げると岸辺に立って、めだかの泳いでいる中へざんざんぶと下半身を水につけて、大根の泥でも落とすように大きく揺さぶった。

このひどい扱いに腹をたててか、思わず川の中に落っこしそうなことになるほど大きな鳴き声をたてた。それを懸命にあやしなながら、ポケットから飴玉を取り出して口に入れてやり、上下にふり水を切って首にまいてあった手拭いで青いお尻をくるんでやった。それでも鳴き止まない光夫を一生懸命にあやしてやりながら足早に家へ急い

「はい、あの子はこの前の手紙にそう書いてよこしました。でも誰方と一緒に手紙に書いてなかったんです。」

「お前が悪いんだ。あんなに山へやってはいけない、いかせるなど言っておいたのに、よこすなんて。」

「そんなことおっしゃったって、あなた。」「まあ、お二人共、安心して下さい、浩二君は、山岳部のキャプテンをしていたんですしお話の様子だと、大分食料も持ってそうですから、どこかの山小屋にでも避難していますよ。」

「でも、先生、あの子はまだたったの十八なんです、たった一人でこんな雪の多い山の中で道に迷ってたら……もしかして遭難して……ああ、おそろしい……あの子をごえて……あなたどうしましょう、あの子……死んでいたら……。」

「おかあさん。」

「ばかな、そんなことがあって……。」

三日目も終りかけていた。捜索隊の連中も疲れ切った、青い顔をして、降りしきる雪の中を戻って来た。

「ふええ、凍みる凍みる、このぶんじゃ、あしたは吹雪になるぞ。」

ふと一隊員のもらした言葉に母親はすくみあがり、泣き出してしまった。

その二

——急いでお便りします。夕闇が濃くなりましたから……。この前、駅であなたにお会いしてから一カ月になります。大学受験の結果はどうでしたでしょうか？ 私はこんな状態になってしまいまし

たので、進学はあきらめねばなりませんでした。半年前には、あなたと一緒にいろいろと勉強しあったのですもの、とても残念ですけど、しょうがありませんね。ですが、就職先で許してくれたら勉強しなおして、あなたの後を、獺犬のように追いかけるつもりです。私なんかにおいぬかれたら駄目、絶交しちゃうわよ。どうか私以上にがんばって下さい。もう手元もよく見えないほど暗いノ。母さんが来ます。母さんには進学したい気持はないしです。これで、バイバイです。

浩二の手に一通の手紙がとどいたのは一週間前、考えてみると彼が最後に彼女の住む故郷の静岡の小さな町に帰り、彼女に会ったのは冬休みの始まった三日後だった。青白い顔をして、淋しそうだったが、明かかった。まるで父の死と一家の破産を気にしていないかのようにほがらかにしていた。そして相かわらず美しくぎゃしゃだった。

「明日、面接テストするの、それによって採用されるかどうか決まるって先生いったわ。」

「ふうん、面接かあ、会社のおえら方は、おっかないぞ。」

「へいきよ、ちょっと恐くたって落ちついてるんだもの、へいき、へいき。」

「そうだ、元気出して会って来ちまえよな。」

「うん、それよか、浩ちゃんノ。勉強の方はどう？ 試験はいつなの。」

「二月の一日と二日が城北大、五、六日が商専大だ。」

「城北大って国立ね、何科だっけ」

「理工系、おふくろがうるさいんだ。おれ、国立の理工は無理なんだ。



たい——会いたいノ。そうだ、智恵子、春休みのはずだ。」

入試失敗は浩二の普段の冷静さを失わせ、理性を狂わせていた。

彼は学校をサボリ、母親に余分の金を送らせ、さらに智恵子を呼んだ。

その三

その頃、静岡の小さな町では、恐い事がおこった。父の破産と死亡により、母と二人になった智恵子は川本物産に就職した。そして、その喜びを浩二への手紙にしたため、京浜第一国道のむこうのポストへ入れに行った帰り、折りからの降りだした珍しい大雪にすべり転んだ所を、すつとばしてきたジャリトラにはねられた。全身打撲、両足骨折——ひん死の重傷を負った。トラック側とは示談がすみ、入院の費用をまかなわせる事になったが、十日もしないうち、彼女は意識不明のまま死んでしまった。

浩二の母はこの事件を知っていた。浩二と智恵子の仲も知っていた。そして小さな町の人々も、浩二と智恵子が小学校以来の仲良しで、高校へはいるために上京した浩二と智恵子が文通し、愛し合っている事も公然の事実として認めていた。しかし、母は、この事件を浩に知らせなかった。唯でさえ、がっかりしている浩二にそれ以上の負担を負わせたいとは思わなかったの……町の人は町の人で、母が知らせたと思い、彼女の葬式に彼の来ないのをいぶかっていた。そんな事で智恵子と呼んだ浩二の手紙は智恵子の母の手で開封された。彼女はおどろいた。浩二が知らないとは思わなかったの……すぐ返事が書かれた。

じゃないかと思うんだ。」

「そんなことない、浩ちゃん、今まで一生けんめいやって来たんじゃない、あと半月、心を落つけて頑張ってらっしゃいよね。」

「うん、イチカバチかやって見るよ。」

小学校からの仲良し智恵子のはげましにもかかわらず、彼の大学受験は二校とも失敗した。彼は故郷の母親に対して、すまないと思う反面、自分の意志をとおして文科を受けなかった自分の弱さをうらめしく思った。学友達は次々に、うれしそうに顔を担任の大枝先生に見せていた。彼はあせり、焦立った。するとレベルを落して受けた山崎大も三國大も失敗していった。母親は彼の浪人を気にし、わざわざ東京に出て来て、学校に行っては、大枝に頼み込んだ。浩二にはそんな母の愛が、かえって重く、じまになり、先生に最敬礼をしたり、贈り物をしようとする田舎じみた母の姿に嫌悪を感じた。

——大学だけがすべてを決めるのだろうか。人間の価値は大学によって決まるのだろうか。いや、違う、違うはずだ。しかし、大学を出なければ、社会的地位は得られない。成功はできないんだ。社会的地位を得ることが成功なのか、少なくとも、母さんはそう見ている。父さんだってそうだ。そしておれの実力以上のものを欲しがっている……いかん、そうじゃない。おれの実力が低いのだ、そうに決まっている。だから山崎大なんかさえ落ちちまったんだ。人間失格かノ。そうだ、人間失格さ、だめな奴なんだ俺はノ——ああ会いたい。智恵子に会いたい——おれの事を愛してくれてるのは智恵子だけだ、そうさ母さんも——父さんも——大枝先生も——クラスの奴らだって俺を嫌ってるんだ。おれの頭が悪いからさ。ああ智恵子に会いた

その四

準急静岡行の二等車の中で浩二は腹がたつやら、悲しいやら、なさないやら、口惜しいやらで涙がこぼれてしかたなかった。わけのわからない衝動でワッと泣き出したかった。また馬鹿にしているとも思った。そして駅をおりてからもいつになく町がよそよしく冷たく思えた。その日は母の言い訳に耳を貸そうとはしなかった。智恵子の家へも行かなかった。

どこかへ行こう、どうか誰も来ない所へ行っちゃいたい。誰も捜しに来ない所へ、そして……もう家なんかには帰らないんだ——そう思っとうちを飛び出したときどこにも姿を見せなかった。

しかし、やはりその夜、浩二は家に帰った。一日の残りを三保の松原の浜でボンヤリ過ごしたあげく、たまたまなく悲しくなり、家に帰って来たのだ。そしてその日以来、母親や、父親が何をいおうとどの大学も受けようともせず、何もしないで暮し始めた。

——ちえっ、大学なんかんだ、大学大学って、結局は親のみにすぎん、本人の気持なんかどうだっていいのさ、恋人より大学、親子より大学、いまに本人はいなくてもいいから大学へってことになるんだ——

毎日同じ事を考え、自分の部屋に座ったまま、両親に背中を向け、ポツンと暮すうち、彼はふと何かの本を思い出した。その本に書いてあった。「友は第二の我、我を愛す友は我なり、友を裏ぎるなけれ、うらぎりは最大の悲しみ。」

浩二が東京へ帰ったのはそれからしばらく後だった。げつそりとして、下宿のおばさんがおどろいた程だった。それからの浩二は気

重い無感動な状態で予備校と下宿の間を往復しだした。智恵子からの最後の手紙を同じ気持で読み返してはポケットへしまった。もう悲しくはなかった。淋しくはあったが、ましておかしくはなかった。ほとんど無感覚な無感動だった。そしてなんとなく、山に行きたかった。やがて、貯金箱をこわし、準備をして、母親に「友人といくんだ。〇〇山に」とだけ書き送り、一人夜行列車でこの山にやってくる。来てしまった。

その五

雪がふっていた。軽い粉雪が静かに風のおだやかな山の空を舞いおりて来た。

「おれがこの山に来て——もう三日たった。かあさん、許して下さい。父さん、不肖の息子を持ったとあきらめて下さい。大枝先生お世話かけました。おれは、凍死という方法で自己逃避をして、智恵子のいる所へ行きます。この山は智恵子のような感じですからね。そして、その大学に入りますよ。」

搜索隊員が言ったとおり、翌日——四日目は一〇中吹雪いた。山はヒューヒュー、泣き声をあげた粉雪は冬の終りをつける最後の乱舞を演じた。山になれている搜索隊も「命あつてのものだね」とばかり、一日中ストープの廻りに集まり今後の搜索方針をたてていた。母親は泣く力も失って、充血した眼をうつろに見開いていた。父と大枝先生は並んで窓の側に立ち、吹きあれる外を見つめていた。そしてそこにいる人々の気持はどうあったにしろ五日目はカラ



志津雅美

「与一のまぬけ、」
「馬鹿与一やあい。」
「隣の与一は大馬鹿だ、
渋柿取ろうと、木に登り、
登ったその木は、銀杏の木
あわてて下りて、ド布林コ
落ちた所は、肥溜だ、
そこで与一は這いあがり、
川で泳いだが、匂いは抜けぬ
いまでも、臭い、お臭い、
よるな、よるな、大馬鹿め、

ッと晴れあがった。山は白さを増し、キラキラ光るその雄姿を皆の
見ている前にさらして立っていた。

再び、浩二の搜索は開始された。六日目になって、一人の隊員
が、尾根から少しはずれている平らな、窪地に、浩二を見つけた。
彼の呼び声にしたがって隊員たちが集まり、雪を払ってみると、寝
袋の中に遺書をにぎった浩二がいた。

「生きている。」

隊員達はびっくりした。浩二の様子は実際に安らかだった。弱い呼
吸がなければまるで死んでいるようだった。だが生きていた。
奇跡的に。

浩二がスノーボードに乘せられて搜索本部に帰った時、彼はまだ眠
っていた。ひどい凍傷ではあったが、それでも無理やりブランデー
を口に入れられたり、強心剤をうたれたりしているうち気がつい
た。

「母さんノ」

「浩二」

「浩二、ここにいるよ。」

母はほっとして涙をこぼした。

「死のうとしたんだ。でも、死ねなかった。」

今夜こそ寝袋へ入らずに寝るんだと思ってもだめだった。死のう、
死のうとする脇で、まだいけない、死んじやいけないんだって声が
聞こえるんだ。こわかった。かあさん、こわくて俺にはどうして
も死ねなかったんだよ。」彼は泣いた。母も泣いた。皆泣いた。助
かった一個の生命のために。空はあくまでも澄みわたっていた。

完



まぬけな与一、ハッハッハハ
与一やあい、ここまでおいで。」

村の子供達は、年中紺姿の与一を見ると、自分たちの歌を歌い
ながら、与一に石や馬糞を投げ付ける。当の与一は、なにをされよう
と、一向に気にしないで、ふらふらと歩き続ける。石などが頭に当
ると、にたりと笑って、「いたいなあ、やめてくんろ。」といい、
それ以上の事は、まるでそれが禁断であるかのように、手を出さず
に、また歩く。子供らはそれが面白くて、厭きずに投げつける。け
れど石といっても、その子らの親が、『馬鹿に怪我させると、手足
が曲がる。』と、意味のない言葉で、戒めているものだから、ほど
よく小さい石を投げつける。それほど馬鹿な与一は、十年程前、貧
乏な農家に末子として生まれた。兄弟は十二人、その末子だから、
親もそんなに気に懸けない、後継は長男、次男には米穀商の娘を嫁
にもらい、三男は隣村の農家にやり、長女は……と見積っていくう
ちに、末子の与一は、半端者で、どうでもよい存在になってしまっ
た。夜も更けてから、ぶらりと家に帰っては、親は何も言わない。
与一もそんな自由な身を、良いと又反面悪いと思っていた。ちよう
ど与一が十二歳の時、与一の村全体の農民が、あまりの重税に苦し
められた怒り、今までは心の奥底にしまっていたが、それが急に爆
発して、土一揆を企てた。結果は、無残残酷なもの、農民の大半は
殺され、主だった者を除ければ、小土地を持っている者、貧困な小
作人は死刑となった。与一の家の親類は家族のみで、与一の家全部
が一揆が敗北と村に知らされると、子供十二人はばらばらに逃げ廻っ
た。与一は九男と一緒に逃げ、ある農家の馬屋に隠れている所を役

人に押えられた。九男はすなおにつかまねられたが、与一は役人の顔を引つ掻いたり、手にかみついたり、じたばたしたから、役人も手荒に、棒で与一の頭を殴った。与一は泡を吹いて倒れた。役人は、死んだと思い与一を野ざらしにして立ち去った。与一の馬鹿はそれ以来だった。笑ってばかりで、いつの花を摘んで、鳥に話しかけたりしてけけら笑っている。

与一がふらふらと一人戦乱のうちに続く中を、のんびり歩き始めたのは、晩秋で、その戦闘の直後の光景は物凄く。遠くまで広がる真白な霧は、厚く厚く、冷たく屍の山を包み隠している。こびりついたり、飛びちたりしている真紅血、あるいはどす黒い血塊も、総てを霧はぼうっとさせ、現実の醜さをまざまざと見せつけている。不気味な、地面を這うように低い霧の中に、時としてゆつと槍、刀、薙刀が、屍の群から首を突出し、その流暢な肌を鈍く輝かせている。全くの死の世界、静の世界なのだ。反して、カラスだけは、不吉な黒の羽毛、大きな嘴を震わせ、生の醜い調子を醸し出している。カアカアと高い山にいた奴も、低い山にいた奴も、今、応に終ったばかりの戦場に、餌食を求めて、全く敏感にそれを感知し、腐らぬ内にと充血した褐色の目玉をほじくり返す。大きな嘴と、爪は我武者羅に肉体を引っかきまわす。

山からの生ぬるい風が荒ぶと、木の葉は一団となり、ひらひら舞い、小さな竜巻となって飛びさる。ごろりと転がった血の塊は、必ずといえるほど、骨にこぼりついた肉が食い荒され、滅茶苦茶になり、四方に飛び散っている。戦の怪物、ここで自然を抹殺し、人をすつかり死に追いやつてしまい、再びあちらで同じことを繰り返す。カラスは一向に立ち去らず、幽かに不気味な音をたてる。ある



か、少しも自らの益は求めず、死んでいるのだ。陽は一向に光を射ち放たず、カラスは鳴き止まない。浄土も仏も、ここでは心の玩具に他ならない。死が今そこにあるということだ。霞み、止めどもなく果てしない霧はまだ、もうもうと姿を消さず、カラスの食い残しには血がたをりはじめる。ぬるい風は、乱れた髪を整えるのか、乱すのか、無心に戯れているようだ。斑点の現れ始めた体、青紫の唇、黒々とした血、黒褐色の木々、充血して赤黒い目と白い目。

与一には目の前の景観は何の感銘も与えない。与一は、今気付いたが、足許の死体が、じつと与一を凝視している。

「へへへ……」「この人おいらの方を見るわ。」その場で与一は、小鳥のように首を傾けて、座りこんだ。しばらくはじつと屍の目と睨み合っていたが、そのうち微風が、髪をなびかせて顔を隠してしまった。「なあんだ。」与一はつまらなそうに呟いて、首を無造作に蹴飛ばした。それは髪を顔中に巻きつけながら、ころころと転んで、死体の山のむこうに消えた。何回も首を蹴飛ばして遊んでいるうちに、首が土手を飛びこえ、血で染まって赤く濁った河の淀にどぶんと落ち、ぶくぶく沈んでいった。与一はそれを取りに河へ一歩踏み入れたが、横でクウンクウンと犬の鳴き声がするのど、どっちに行こうか下を向いて考え、首を惜しみながら、大きく生えている草を、へきへきと、かきわけてくくと小さな、毛がぐしよくしよになった犬を見つけた。頭を両足の上にのせ、びくびくと寒さに震えていた。与一はじつと立ちすくんで、何とも知れぬ心持ちでながめていた。小犬は、耳をふせたまま、与一の方を見る様子もない。目を瞑り苦しうに。与一は、しだいにその犬に近づき、怪訝そうに跪いて、撫でた。冷たい身体だ。両手で包んでやった。

死骸の首は、全部と迄はいかないで。喉笛の辺まで、立ち切られ、身体からぶらりと下がり、あらぬ方向をうかがっている。またある者は、後頭部をガツツと太刀でやられ、白灰色の脳を、みだれた長い髪の隙間から覗かせている。手首のない者、足のない者は多数だ。頭部のない死体は、無残に土砂をあげて転倒し、ぼつかりと気管支の穴を見せる。茫々と生え連なる草々の中に、カラスはまだ飽き足らずに食を求めている、カアカアと。生首も、良いものは主人の近くに、悪くしては、沼の中に沈んでいたり、どこかの名将に持ち去られたり、実に散々で、槍や、刀でずぶりと貫かれてる者もある。顎から後頭部へ、口から、目から……そういった刀や槍でさえも、柄には誰の物とも知れぬ手首が、しっかりと付着している。華々しい最期を遂げる名君もあろうが、ほとんどは、命令を受けただけで、参戦し、ころりと死んでいく。まさしく、天下に名の響かぬ、蜉蝣の一生を送る人々の平凡な朽ち果ての地である。口は紫白色でだらりと開き、力なく笑うのか、悲しんでいるのか。目なども、かっとは見開かず、濡れた睫毛の下から、かすかに白い目を光らせている。皆、そこいらの名もない武士には、そうあるのが当然かのように、静かに横たわっている。非悲無情な所だ。焦げ落ちてしまった木の元には、深愛の夫を探しにやって来て、肌着一杯、全裸の子供を引き連れ、そこで仰向けになった蒼白な夫を見つければ、そのまま笑い死んだ姿がある。子供らは餓死より他に何があるうか。瘦せ細った体で、そこに。だがカラスは容赦なく、満腹になるまで食い荒らしまくる。親子か、抱き合って死んでる者。手に数珠を持ち、心に浄土を願いつつ死んだ者。妻子の髪を持つ者。全く、今はじつとして動こうとしない。これほどの人間が、誰の為に



冷たさが指先から腕へ、そして与一の身体へと伝わる。与一は思わずぶるぶる震えたが、しっかりと暖めるつもりなのか、おさまっていた。犬が薄目で与一を見てクウンと鳴いた。片手で頭をそうと撫でてみた。再び小犬がクウンと鳴いた。「へへへ」与一は笑った、笑っているが、与一の目からは大粒の涙がぼろりと流れ出た。与一にはわからない。小犬をしつかりと手の内に収めて、頬にあてた。冷たさは格段だ。与一は、小犬を懐にくるむようにしてくられた。冷たさにまた驚いた。ぶるぶると震えがよく判る。なおも涙は、ぼろぼろと留ることなく溢れる。小さく、幼い、可憐な、しかし、冷たく、空腹らしい震えている犬。なぜか与一は、わあわあ泣きだした。頬を伝わる涙の感触が、与一を無性に走り出させる衝動を起こさせた。涙を拭いてみた。拭いても拭いても。走りた。与一は混乱してきた。小犬。涙。心の衝動。与一は涙を流れるままにして、ゆっくり走りだす。小犬を大切に懐に暖めて、わあとお声を出し、思いっきり走った。小犬はまだじつとしていた。小犬の口から唾液がしたり、与一の下腹部に伝わり流れる。それでも与一は走る。ひたひたと林間に足音が響く。目の前の道が涙で濡れて、後方に走り行く。陽はいつ沈んだのか、もう暗く、与一には、大木が目を見張らせてつかみかかるようだ。枝を低く伸ばして、五指を広げる。与一は、まだ泣きやまず、犬を愛撫しながら、きよろきよろ回りに目配せし、「やだやだ、おらあ犬っ子はやらねえぞ、やだ、やらねえぞ」与一は叫ぶ。木は大きく幹をゆさぶり、さわぐ「よこせえ、よこせえ」与一は混交した頂を持ち「やだあ、やだよお！」、とどろ森の奥深く逃げていった。梟は後から追いかける「よこせ、よこせ、あほうあほう。」低梟の声は木々を縫って与一

につかみかかる。川も「よこせよこせ。」木も「よこせよこせ。」草花も「よこせよこせ。」与一は、小犬をだきかかえて、ごちゃごちゃに頂は混乱したまま、大声で大粒の涙を流して、

＊

＊

その夜、与一は優しく小犬を抱いて、枯れ草の中に寝入った。真直ぐな陽に目を覚まして、与一にとつて、いつもとは全然違った朝日が射しているように思えた。与一は、おなかかとてもすいていた。腹の虫はしきりにぐうぐう鳴くが、それは二の次、三の次、まず犬のおなかのことが心配だ。空腹のせい、病気なのか、小犬は死んだようにぐったりしている。与一はふらふらと立ち上がり、食物を探して歩き廻る。冬も近いとあって、そこいらには全然食物はない。見上げると、鳥があざ笑って飛び去る。そうこうしているうちに、一発の銃声が聞こえ、与一をびくりとさせ、希望をもわかせた。猟師が先か、与一が先か。与一は林間を探し歩き、一匹の小さな山鳩を見つけた。腹部を射抜かれている。血はどくどくと流れ土を赤色に変わる程流れでている。与一は、それを引、摘かむと、一目散に元居た場所に駆け戻った。大木の陰に隠れて、そとと小犬の口元に山鳩を近づけた。小犬は、幾分、拾った時より身体も温もり、クウンと鳴く声も大きくなったが、目を閉じたまま、鳩に見向きもしない。

「よう、食べるよ、なあ、なあ」　しくしく、半分ベそをかいいて、食べるように、せがむ。

「よう／＼」口にあてがってても、口を開けても、食欲をそそるよう鼻に持っていても、小犬は、なおも小さくなって、しょんぼりと、クウンクウンと声を出すだけだった。与一は茫然として、小犬



あきらめたように、ぶつぶつ呟いて、片手で犬をささえ無理に犬の口に鳩をつめこむ。与一は、地面に腹這いになって、小犬の顔と目と鼻の先まで顔を近づけ、鳩を口に持って行き、ゆっくりと説明した。「こうくうだよ。口に入れて、もぐもぐと。わかんねえかなあ、こうするんだよ。」と囁んで見せるが、与一はもう無我夢中だ。

どうしてでも犬よ食べてくれと泣いて泣いて、泣いて、その他には小犬をていねいに撫でてばかりだった。しかし与一の頭で、犬と与一を一生涯離別させない考えが、遂に結ばれた。与一の目はきらめいて、急に鳩の肉をがぶがぶと、口に頬ばり、夢中に噛みはじめた。口のまわりは血がベタベタくっつき、乾くにつれて、皮膚がペリペリに張ってきた。与一は顎の筋が疲れるまで噛む。口の内が、どろどろになって来たので、与一は喉にこぼれて行きそうな、気持ちの悪い感じを我慢して、犬を静かに手に取り、自分の口を持って来て、じっくりと舌で肉汁を入れてやった。小犬のさらさらの舌にねっとり舌が触れ、鋭い歯に触れたとき嬉しさが、ぬるぬるとした犬の唾液が自分の口に流れこむとき、それ以上の嬉しさが手に取るように、与一の心に充滿した。犬はやっと少しずつ与一の肉汁を飲んでいくようだ、与一はそう思うと、心が躍り、面白い事のように口移しを再三再四行なった。鳩の生肉をもぐもぐ噛んだ。肉が喉に詰まると、血と混した川の水を口に含み、小犬に与えてやった。与一が鳩を内臓と頭部と骨だけにしまった時、犬の口の囲りは肉汁と血で濡れ、地面には多くの肉汁より、それは、与一が噛み砕いた大部分だけでも、与一は犬の胃に入った少しの肉があったということ、天にも登らんが如く嬉しくて嬉しくて、顔が火照る。少しの肉を食べた犬は、また目を閉じてしまった。そうした姿

を見つめ、泣いていた。手の鳩からは血が滴たり、血は与一の両手に、べっとりくっついていている。突然与一は鳩の羽を毫り始めた。与一にはこの考えは、珍しかった。一つの手段でできぬなら、それ以上の思慮をせず、あきらめ投げうってしまう与一だから。羽はうるさいほど、血のついた手につきまとう。背中から、ぱりっ、ぱりっ羽毛をむく、腹、首、尾、翼ととる鳩はすっかり鳥肌を現わして、美味しそうになった。与一は、鳥への食欲より、嬉しさに涎を流しそうな顔つきで、小犬に再び食べさせようと頑張り。むくられたままである。笑が、たちまち悲しみになってしまった。与一は、一生懸命、いままではなかったことだが、出来る限りの脳神経の一本一本を整理しはじめた。考えるけれども、考えは結ばれず与一の行動は犬の口に鳩を押しつけることに留る。与一は、目を涙で潤ませ、鳩を地面へ思い切り叩きつけた。血がぱつと飛びちり、紅葉の血痕を残して、大きく弾み、むこうへ転った。犬はどうしてか、クウンと鳴く。与一は悲しみが足の先から、ぐつとこみ上げてくる。鳩を見下けると、傷口が大きく広がり、気味が悪い。与一には、気味悪がる感情も、小犬の食事に圧倒されているらしい。与一は犬を抱いて、そとと噛く。「なあ、食べるよ、食べなきゃ、おめえ死にしまうんだぞ、なあ、よう、愛撫もしてやる。と、犬は幽かに、目を開け、黄白の歯をみせて、クウンと鳴いた。与一は驚いた、「おめえ、笑ったな、ジャ、鳩食うな、」あふれ出る涙とともに、与一の顔面は、喜びの皺で一ぱいになった。鳩を小犬の前にさし出してみる。全然食べる様子もない。与一は小犬と肉をじっと見つめる。死にそうな犬を見ると、後で、前で、上でさずっている小鳥が、憎くてもたまらない。「どうしよう、どうしよう、」と、

が可愛い。与一は懷に小犬を入れると、しつこいぐらい撫で廻した。与一には、その時猟師がやって来て、大声で怒鳴ったことなども、その上銃身で頭を一回大きく殴られたことも、全然わからなかったのである。

＊

＊

その日から与一は変わった。依然として、馬鹿には違いないが、犬がいつも、傍にいた。「おいらには、犬がいるんだぞ、」

＊

＊

与一と犬は、八年間をあちこちの村で過ごした。犬は、あの時の姿を想像もさせぬほどに、立派な大きな姿になっていた。体格は、他のどんな犬にも負けない。否、歯も。鼻も。目も。毛並も。ましてや喧嘩は絶対に負けなかった。常時、与一と犬は離れたことが無い、犬が食物を山に探しに行った時は別だが。前になり、後になり、背中に飛びついたりする。嬉しい時は、尻尾を振りちぎれる位振りまく。腕に飛びつき、食い入る程に強く噛む。与一が、犬にわからぬように家の後に忍び込めば、いつの間にか与一の後に廻り、ワンワンと吠え立てながら尾を振っている。与一は、それが嬉しくて、首をしっかりと抱き締める。与一には年がない、もう十八才だが。相も変わらず間抜けだ。身体つきは、がっちりしているのだが、その馬鹿さ加減は与一が犬と遊ぶようになって、もっとひどくなった。子供らは、そばに犬がいるから、遠くから石や馬糞を投げる。当れば犬が吠えるから、大声で笑って逃げていく。

「大馬鹿、大馬鹿、たいした間抜け、お犬を連れて、どこへいくだあ あっただろ

こっちだろ

あっちだ、こっちだ

こっちはあっちだ

馬鹿にはわからねえ、やあい

馬鹿馬鹿死んじまえ

やあい

やあい

与一には全く反応がない、人が何をしようと、何を言おうと、かわらない。犬が傍にいたようになってから。

日が沈むと、あたりは深々とした暗闇となり、村の燈がそれに映えて美しい。めっきりと冷えこんだ一本道を、山を越え、川を渡り、馬鹿と犬が、何も食わずにやっと思いついた村だった。犬はいつまでも与一の傍にいたかったらしいが、食べ物を狩ってこいと言われて、渋々、山へむかっていた。与一は、ふらふらともたつた足どりで、軒に柿が何個も縄に結ばれてぶらさがっている家に進んでいった。萎縮して褐色に変化しているおいしそうな干柿だ。一つだけと与一は手に取ったが、気がつく、食べかすはもう六つも足許にある。胸が焼けるほど甘い、与一は井戸を探した。暗がり、どこにあるのかさっぱり見当がつかなかったが、ようやく家の燈でぼんやりとかんではいるのをみつけた。与一はつるべを持ち、桶を井戸に落す。パチャッと桶の落ちた音が、いやにそこら中に響いたようだった。桶には底の方に少し水が、それを与一は一息に飲んだ。冷たい水が、何も通っていなかった喉を伝わる感じは、与一に犬が居たらなあと思わせないはずはなかった。後の方で、ゴトゴ



がぼかばかと目のまわりに焼きつくように火照ってきた。頭がふらふらする。与一は、目の前の物に、何かを感じた。女を感じたのだ。だが与一にはその正体は何もわからない。優しく自分をあしらひ、美しく匂いのよいもの、すんなりした物を感じた。うっとりとしている、それはまるで子供が美しい景色なり、女の人なりを見た時のようであった。むらむら起こる心の底の煙は与一には何なのかわからない。その時、納屋の戸に犬の気配を感じた与一は、チョッチョと舌をならして犬を呼んだ。犬は両眼を緑銀に輝かせ、獠猛なうなり声をあげて娘ににじり寄る。娘は、とっさに横の箱に隠れ、びくびく胸を震わせていた。与一は犬を呼んだ。「おいで」今までの猛獣は、怒らしていた目をびたりと止め、尾をふって与一の横に、愛犬となって寝そべった。娘は今のうちにと飛び出して行ったが、与一と犬は抱き合っていてわからなかった。与一の涙を犬がなめて拭くと、与一はなおも強く抱きしめる。起きあがって出て行く時、与一は自分を手当てしたさっきの不可解な物が居ないのを知って、胸に大きな空洞があいて泣きたいような衝動がおきた。与一には、昔の懐かしい物のようにも思えたし、常に心に思い慕っている物、それは与一に何かわからない正体不明の茫とした物だったが、そのように思えた。「さあ、いこう」与一は赤々と照りかえる家にひかえる感慨を持ちつつ。

*

*

それからの与一に、また新しい変化が加わった。幼い頃小犬を拾った時のように、犬と戯れていると、うっすらと優しく、髪の毛の長い良香の物を思い浮かべる。そして、与一はいつのまにか犬をぎゅっと抱擁する。犬は嬉しくて与一に噛みついたり、なめたりす

と戸を開ける音がし、「こら！このやろう！」と、怒号。与一の振りかえる間もなく、拳骨が顔のいたるところにやたらと飛んできた。「ひい！ひい！」この盗っ人め！くたばれ！、与一がまさに死ぬ所の所で、その家の娘に止められて、男は与一の腹部を蹴飛ばして家の中に入ってしまった。ぶつぶつと。与一は、口から血を出して仰向けに失神していた。獲物なしに帰ってきた犬は、血だらけの与一をなめ回したが、与一が一向に起き上がらないので悲鳴を出してその場に跼まった。真夜中、耳が破れるほどの寒い時、家の戸が再び開いて、娘がそとと与一に近づいた。犬は、気付かぬようだ。与一の体は娘によって、裏納屋にひきずり運ばれていった。娘は焚火をして与一をあたためたり、手拭いで血をふきとってやりたりしていた。空が白んで赤味がかかる頃、与一は頭に痛みを伴って目を覚ました。しばらくは小屋の天井ばかり見つめていたが、しだいにあちこち目を配り始めた。娘が視界に入ったとみえ、目を見張ってどんよりとした声で、

「おめえ、だれだ！いてえ、ああ……」

「静かに寝てなきやだめよ、」

「ここどこだ！」

娘は体質と幼稚なすぐさから、馬鹿だと悟ったらしいが、与一米飯を与えた。与一はがつがつと御飯粒をこぼしながら食べる。食べていると急に娘を見る。見ているとまた急に食べ始める。娘には面白かった。笑うまいところだが、笑わざるえない。与一はいう、「なんで笑うんだ。おめえ一体だれだ。」「私はね、フフフ、私はね、この家の娘よ。」娘は笑いながら。その声は、与一の耳に、優しく明かるく流れ込んだ。眉を寄せた与一は、焚火のせいか身体



る。そうされるとその一瞬、心を惑わせた物を忘れ、犬をほうり投げる。犬は地面に四肢で着地すると前以上に主人に飛びかかり、おい回す。与一は逃げる、木々の間を縫い、川を渡り、田畑を荒らし石につまずきながら。犬も追いかける、木々の間を、与一の走ったとおなじ道を辿りながら。与一が止って下を向く。与一が走りだせば、犬も。本当に馬鹿と一匹は楽しくてたまらなかった。春になって、犬が小さな動物を山から採って来れば与一が焼いて食ひ、骨と残りの肉は犬がみごとに平らげる。与一は、村や町の理性に締められた人間ではなかった。本当の野性の人間、いわば原始人であった。何にも束縛されず、自由気ままな生活の与一にも、人間の動物的な本能が湧き始めていたのだ。与一は全く知りもしないことだった。

夏になると、青々とした森の奥まった所には、清く透んだ水が、とうとうと流れ、岩には鮮麗な緑色の苔がむしていた。ごうごうと落ちる滝は、白い泡をたて、渦を巻いて、谷間の兩岸に、谷間から溢れ出さんが如くその尊厳な太い音を響かせる。多くの鳥の声は、滝の響きに消されているようで、少しもそうでなく、小さく、大音響の調子を奏で、自然の音楽のすばらしさをふんだんに醸し出す。目には、滝の白、木々の緑、草木の雑多な色彩、水の深みの青が、そこに自然の大絵画を描き出す。与一は叫ぶ、「おおおおい。木霊がすかさず二重奏「おおお。い。」与一がもう一度、おおおとい言いかけた時、犬がワンと、深々とした山道を臨んで吠えた。与一の胸に為体の知れない雲が心に充滿した。与一の目に写ったのはいつかの娘だった。娘は山に草を刈りに行った帰りらしく、肩に大きな籠を背おっていた。娘は籠をおろすと帯をほどき始め



た。川で泳ぐつもりらしい。対岸の与一には何が何だかさっぱりわからない。いつかの物がむこうの方で動いている。ただそれだけで犬を忘れさせ、与一を居ても立ってもいらなくなせるものが胸をおおう。与一は声をかけてみたくなった。「よおー。おおい。」その声を聞いた与一の目の前の物は解きかけた帯をあわてて結び、籠を背おって足早に逃げるように消えていった。与一には、わからないことだらけになる。目の前にはもう何も見えない。それでいて、今消えた物は与一の心に何かを残していた。何かがひっかかってしかたがないのだ。その日は、陽が西に傾くと村全体が赤々と燃え、山には黒い影を切り抜いた。与一は知らず知らず、夕日に顔を赤くして、娘と会った家の方に一步一步足を運んでいた。家に着くと与一の心は、入りがたっているのか、入りがたっていないのかはつきりしない。戸の穴から与一はそうと内を覗いてみると、娘が一人髪の手入れをしていた。与一は戸を開けると家に飛びこんで娘に走り寄った。与一の頭にぐるぐると走馬燈がまわる。考えが一つに結ばれず、娘が首をかしげて立ちすくんでいるだけ。目の前の優しいものは何だろうか、全然わからない、じっと見ているうちに与一の目に涙が潤み、それが大粒の涙となって頬を伝い落ちる。幼い頃拾った犬を思い浮べる。良い匂いが鼻をつく。甘い口と鼻が目の前で回転し、頭いっぱいに漂う。びっしょりに濡れてぶるぶる震える犬の慕情が直線を描いて消え、娘の顔と姿がその上に円を描く、再び犬が円を割る、円がふらりと口を開き、円弧が円から離れようとする。良い香が漂うと、直線が円をずたずたに切り、その上に円が雑多に重なる。小さな犬、たまらなく嫌な匂い、食物、手、足、尾、口、目、鼻、寂しげな小犬の鳴き声、円と直線とによって

消化不良をおこした、頭デッカチの国だ。異常発達したマスコミがうなる中で俺は育った。みんなも……。

考えるなんてメンドウな事しないでも、マスコミが俺達の頭の中に整理された必要な知シキをたたきこんでくれる。テレビの前に鎮座している時、俺達は手品師。どんなオモシロイ番組も、悲しいドラマも、ヒーローマンなものも、ドキュメントもお好みしたい。見終ってから「意気に感ず」なんて事は毛頭ありえない。(多少の例外はあるようだけれど、ここであつかっているのは、現代的に規格化された典型的日本人である。)

こういう中で育って十何年、とうとう大学受験にまでこぎついた。もうあと少しで卒業、俺はその時期になって新聞を読むようになった。今までは、もっぱら小説とか、マンガ、芸能ランなどを専門に読んでいた。一面の政治、外交面の方になると足が重くて、それに堅いコトばかりでオモシロくないし、ついついごぶさたしていたという次第。何故俺にこのような奇跡的事実がおこったのか？自分でもよくわからん！思うに、何も考えずにそのまま就職したり、受験するのがいやだったんだらう。それに十八才でいよいよ社会人になるんだぞという心構え、責任感がそうさせたんだと思う。とだな、今までのあらの他に、もっともつと沢山のあらが目についてしょうがなかった。例えば一月八日付の東京新聞の夕刊にベトナム和平の記事が載った。ベトナムの泥沼の中でドンパチと戦争やっつてる位、周知の事実だよ。アメリカが膨大な数の兵隊と武器を送りこんでいるくらい誰でも知っている。そのアメリカの大統領ジョンソンは、ベトナム政策に対して平和功勢をしている。その一端

頭が錯乱する。「どうしたの」この瞬間に優しい声は与一の頭の円と直線の雑多の中から考えを引き出す。馬鹿な与一、人間本来の姿の与一は犬を見た。はつきりと心に犬を見た。無性に好きな犬、涙はぼろぼろと出る。犬は食物を全く食べない。これほど食べさせたいと思っても、食べさせたい。可愛そうな犬よ。犬よ。食べてくれ、食べさせよう。小犬の口が目の前に近づく。与一は餌を口ばいに含んで小犬の口に口をあてがう。心に浮かぶ情景が、今度は現実の情景と混乱を始める。与一は目の前の物と犬が与一の心に躍り出たある衝動によって同一に思えたのだ。あつという間に与一は娘に抱きついて、口づけをした。手は髪を愛撫し、目からはとめどもない涙を噴きださせている。愛なのだ。愛情だったのだ。与一に犬に餌を与えさせたのは。犬と娘とを同一にしまったのは。与一は小犬を愛していたのだ。娘を愛していたのだ。与一は娘の腕き苦しむのがなぜかわからない。娘の甘く、柔らかい、そして熱い唇の感触が何ともいえず嬉しかった。与一の後方で銃声が轟いた。与一は小犬を愛したことを知りつつ、目を閉じた。

太陽が強く強くてここに。

エッセイ

滝井 清

俺の国セキは日本。日本は不思議な国だ。外風文化と国風文化が



として彼は北爆停止をやった。アメリカの発表によると、去年の十二月二十四日以来北爆はおこなわれていないそうだ。ところが一月七日の北京放送が伝えるハノイ電によると、北ベトナム人民軍最高指令部連絡団は、米国の飛行機が一月五日の午後、北ベトナムのタノンア州ノップメオ地区に爆撃と機銃掃射を加えたことと発表している。どっちのいう事が本当かは実際にそこに居合わせたわけではないから言えない。だけど、どっちかが本当で後の一つはウソッパチ。これについてはアメリカも北ベトナムも互いに相手をなじり、なすり合いをしている。これじゃ、どっちを信じていいんだかわからなくなっちゃう。またアメリカは平和解決の意志を示しているにもかかわらず、今は何もない砂だけの土地に、ばかりかい軍港を建設中である。これは戦争が、まだ自分おわりそうもない事を示している。昔、日本が世界を相手に戦争していた時、軍部は日本が敗戦を重ねているにもかかわらず、新聞には、勝った勝ったとウソの発表を出した。今日では昔よりも民主的になった。それはいいとして、いくら民主的なにしてもみんなをダマス族(ヤカラ)は沢山出てくる。そのダマシ方も昔よりは、ずっと巧みようになってくる。今、俺達が読んでいる新聞に発表されている事実はみんなウソかも知れない。ウソとはいかないまでも多分に曲げられたものであるから見えてから判断しなければならぬ。俺達はベトナム戦争を多角的に見ているだろうか？殆どの人は無関心。関心があるにしても、今のマスコミから与えられる事実から判断した見解は正しいものとは言いがたい。一口の事実をそのまま受け取るだけでなく、他のあらゆる事実と結び合わせて考える事が必要だ。人間のやる事の底に

は一本のスジが通ってる。それを見きわめる事が必要なんだ。ベトナム戦争だけじゃない、俺達の身のまわりに起こってくる色々な事実を、もっと積極的に見ようと心がけるべきだ。

大学へ入って勉強するのもいいでしょう。だけど勉強ばかりしてないでもっと真剣に、何かを考えることが必要じゃないかい？俺は十八才、みんなもそうだ。国籍は日本。受験生だって、腹黒い政治家だってみんな日本人。デモクラシーが唱えられている今だ、もっとその特権をフルに活用しようぜ。この変な国、頭デッカチで、実のない国をもっとよく見て、もっとよくしようじゃないか。もっと日本を大切にしようじゃないか。

とまあ、そんな事を俺はのたもつたわけだ。どう思おうと諸君の勝手である。事によると俺は変人あつかいにされ、社会的に葬り去られてしまうかも知れない。葬りたきや勝手にしやがれとは言わない。一生、上を向いて叫びつづけるだろう。一個の人間として人間らしく生きるためにも俺は口を閉じない。馬鹿みたいに一生、口はあきっぱなし。俺は十八才。国籍は日本。
P・S 俺は独身である。

窓の中

目黒 康一

凍りついた石畳を街路燈がほのかに照らし
星がひとつ流れて暗闇がそれのみ込む
遙かかなたの街の火が（それは別の世界の小さな窓でした）
一瞬鮮やかに輝いたかと思うと
みる間にぐんぐん近づいて
目の前に大きく拡がりました
別世界の小さな窓にはもう手がとどきます
手をさし出せば暖かいもれ灯をつかめます
窓を開ければそれももう自分のものです
微かなほほえみが優しい貴女も
ばら色に輝く人生も
そしてすべてが
貴女の姿がそこに立つ（私はそこへ移ろうとしました）
私の腕は空をつかみ貴女の体はそこになかった
真っさかさまに落下した体は
凍りついた街路にたたきつけられた
ため息と涙が
かすかに音をたてて落ち
ほのかに明かるい凍った街路にすい込まれる

責任と協力

中 溝 正 枝

「責任」と「協力」ともに私達学生にとって最も大切なものであり、やらねばならぬとても必要なものです。

人間は、絶えずどこかの共同生活の場におります。私達を例にとってみれば、家にいる時は、家庭の一員であり、学校にいる時は、学生の一員であり、道を歩いている時、電車に乗っている時などは、社会の一員であります。そこで、その一員としての責任があり、その場その場の人と協力しなければならぬ義務もあります。

しかし、今日この事を忘れてしまっている人、いや全然気づかない人がいかに多いでしょう。私は、それを高校に入ってからずっと痛切に感じて参りました。そこでH・Rにも何回か呼びかけてみましたが、あまり効果がありませんでした。生意気かも知れませんがこのままではいけないと思います。

まず清掃当番の必要から話したいと思います。

自分の使用している物、場所は、すべて清掃しなければならぬ責任というものが、それは使用者の義務であるはずで、私達は、清掃したくなくても、自分が引き受けた任務であり、しなければいけない事だから当然やらなければならないのです。

しかし、この学校何百人もの人が皆で清掃する事は人数は多すぎ、用具は足りずと、不合理な事は誰にでもわかります。
だから清掃は、分担して合理的にやっているわけです。
それなのに自分の番が来てもやらない人はどういう訳でしょうか。
「しなければいけないこと」であるということを忘れてしまっているか、気づかないか、いや、知っていながら逃げているのです。「しなければいけないこと」は、しなければいけません。
「自分一人がしなくても……」という考えは、他人の負担を多くするばかりでなく、その考えが増大していったら、一体どういうことになるのでしょうか。他人の負担はますます重くなり、誰もが逃げ出したくなるようにさせ、しまいには誰もがやらなくなるのです。しかし、ホコリの積もったイスや机を使うのは、誰もがいやなのです。かといって、それを使わずに勉強することはできません。だから清掃をしなければならぬのです。そして、少し大げさかもしれませんが、皆同じ人格を持った人間なのですから、お互いに同じ負担を負わなければならないのです。
ですから、他人の負担を少しでも多くする様なこと、さぼる様なことはやめて下さい。共同の場では、自分が協力してもらわなければ困る様に、人に協力してあげなければ、その人が困る様なことがたくさんあるということをよく考えて、ちょっとした協力でも、勇気を持って、進んで行なって下さい。

雑布がけがいやだって、それは義務なのです。やらねば、後で自分も困ることなのです。きたない机で勉強するのがいやだから、毎日毎日自分の机をふかねばならないのだが、それを皆で分担したのだから、何週間かおきに自分の番が来るのはあたりまえです。

つまり、ここで言いたいことは、清掃は全員がやらなければいけないという事です。そして清掃当番という細かいところにも、責任と協力という大切な事があって、それが欠けると大変な結果が生じるという事をもう一度認識していただきたかったです。

もう一つ述べて見たいと思います。

H・R・委員会、生徒会の不活発さです。

この不活発という事こそは、やはり、この責任と協力ということが忘れられていたり、おろそかにされていることに原因があるに違いないのです。また、それに気づかない人が、私達の中に多すぎるのです。

H・Rの時間を楽しくする者にも、つまらなくする者にも自分が含まれているのです。いや、自分自身であると言ってもいいくらいです。それなのに、「つまらないからさぼっちゃえ」「早退しよう」「なんて言う人がいます。変でしょう。私に言わせれば、全く変なのです。

一人一人がつまらなく思っていて、どんどんつまらなくしているという事に気づかないで、「他人がつまらなくしたから、自分は、そんなつまらない時間を過ごすなんて、まったく自分にとってもったいないから、むだだから帰ろう。」なんていう人は、やはり言葉ですか？「最低の人ね。」とても言いたくないです。反対に、一人一人がおもしろくしようと思っただけならいいです。必然的におもしろくなるはずはです。

つまらない中にいらなくなって逃げ出すなんていうのは、自分のH・Rにおける責任を忘れています。学生であって、この学校で勉強していたら、その学校のH・Rには出る義務が、責任があるの



本当にそうです。私もつくづくそう思わせられた事がありました。あなたはそう思いませんか。

そこで、私の言いたい事は、まず参加したら、しゃべる勇気を持つて一言しゃべってきてほしいということです。

それがなされれば、H・Rも、委員会も、生徒会も活発になるはずはです。いや多くの一言があれば、活発にならざるをえないはずはあります。一言が大きな協力になっていくはずはです。松高生皆が、クラスの一人として、クラスの代表として、松高生の一人として参加する義務と責任があり、その中でも、自分の自由意志でのみ行動する事はできないのです。

クラス委員は、クラスの代表者として、クラス全員から託されているのです。

これらの事を絶対に忘れたり、おろそかにしてはいけないのです。その時の自分は、自分であって、自分ではないのですから……。今まで理屈みたいな事ばかり述べて参りましたが、皆単純でわかりやすいことであつたと思います。まとめてみますと、共同生活というものは、責任というものがあり、協力ということがとても必要であるという、ごくあたりまえの事を述べただけなのですが、そのあたりまえのことというものが、つい忘れられたり、気づかないままおろそかにされがちなので、こ

こでもう一度考えてほしいのです。最後に、あらゆるところにある責任という事を、もつとしっかりと自分に言いかせて、しっかりした行動をとって、自分自身だけが困る事ならいざしらず、他人には絶対に、めいわくをかけない様にし協力を惜しむ様なことはやめてほしいと思います。

ではないでしょうか。そこで逃げられなかったら、つまらないH・Rに対して我慢なんてしていらなくなってくるはずはです。そこで勇気を持つのです。そして発言して、少しでも話題をふりまいて楽しくさせようとして下さい。

H・Rは、全員で各々の人間を知り合うために語り合える唯一の時間なので、全員が全員を楽しめる皆の語らいの時間でなければなりません。

一人一人が、内職したり、帰ったり、勝手気ままな事をする時間ではないのです。クラスが一つになる時間なのです。

そして、黙っていたら何事をも運ばれないという事をしっかりと意識して下さい。

言わなくては、声を発して訴えなければ、わかって貰えないのです。勇気をもって一言いいます。

大勢の中で話のできない人がたくさんいますが、それはちよつとした気の持ちようです。私も昔は、今考えるとそう思えるくらい話せなかったものです。何かこわくて、恥ずかしくて……。

でも、ある時、何かの拍子で話すようになりました。そしてだんだん知ったのです。言うという事の必要性を……。

そして、自分の考えている事がH・Rで全然発表されない時、淋しくなる様になり、自分の考えを述べる事がだんだん多くなりました。今では、人の意見を聞き、考えて、自分の意見というものが少しずつでも持てる様になった事を大変喜んでおります。

どうか勇気を持って一言発言して下さい。自分から進んで……。

ある人が言っておりました。「人間でありながら、自分の言いたい事も言えないなんて、本当にみじめなことですね。」と。



教育政策と自治会

羽根田 文男

私は現在学校内を見ていて一番感じる事は、特に受験の事と生徒会の事です。世間では「受験地獄」だとか「無気力の高校生」とか言っただけでいろいろな意見が述べられているので別にこの場を使っただけでいいと思います。私は「生徒会」の事について私自身の意見を書いてみます。

朝日新聞の日曜版の三面に全国の高校新聞からの切り抜き記事が載せてあります。そこではよく「生徒会の不活発」という事が出されています。松原高校の新聞部へくる他の高校の新聞内容を見ても生徒会の不活発を取り上げて色々な意見が述べられています。なぜこのような状態が全国的に出てきたのでしょうか。まず私は受験の事が一番の原因なのかなと思いましたが、こればかりではないようです。なぜなら受験に関係ない専門高校にも同じ状態が起きているのです。さあ——みなさんはどう思いますか。僕はその時「はっ」と思いました。それは現在の小中高で行なわれていた教育自体が問題なのではないかと、よく教育とは、能力と価値観より構成されていると言われます。そして価値観とは、H・R活動、クラブ活動、生徒会活動の中で特に学習されていきます。(授業においても学ぶが)

そして「民主主義」を実践を通して学び、自分の人生観、人間観を高めてゆくものです。しかしながら現在の教育はどうでしょうか、一般的にはなりませんが「受験」一本の教育ではないでしょうか。どの学校も入試を前面に立てて授業を進めてゆき、特別教育活動とされているものへの教育は実際の事0に近いものです。これが一番の原因ではないでしょうか。又教育自体の方向にも問題があると思います。私が一年の時「戦後教育」について研究した内容を説明すればその事がハッキリ分かると思います。戦後とは一九四五年の八月十五日から今までの事であり、この時期は約二つに分けられます。それはアメリカ軍の占領下におかれていた時期と、一九五二年日本がサンフランシスコ締結以後日本政府の行なった時期とに分かれます。アメリカの占領時代の初期の教育政策は一九四六年の三月に来日した第一次合衆国教育使節団の報告書に述べられています。これらの主な内容は次の通りです。

(一)中央集権的な教育組織は、たとえ極端な国家主義の翼にかかるとがなくても城壁をめぐらした官僚主義に伴う害悪のために危くされる。そしてこのような組織は、大衆に一つの型式の教育を与え、そして少数の特権階級のためにはもう一つの異なった形式のものを準備するというものであり、今までの日本の教育組織はこれと同一の物であり、変えなくてはならない事。

(二)画一的な学校組織である今までの日本の学校組織を、「国民学校程度では不確実な所があった。そこで国民学校の年限は六年に固定し、無月謝で且つ義務制であり、如なる意味の授業料も取ってはいけない」と現在の小学校を提案し、国民学校の上に続く三カ年の「初等中学校」が設けられ、これも無月謝で義務制で、男女



わってきたのです。最初にその事がはっきりしたのは一九四八年一月六日のロイナル陸軍長官の対日政策の中で、「日本は非軍事化から、反共の防波堤とする」との言葉です。そして昭和二十五年朝鮮戦争が始まるとますます日本のアジアでのあり方がはっきりし、一九五一年九月三十日に来日した第二次教育使節団は「極東において共産主義に対抗する最大の武器の一つは日本の啓発された選挙民である。」と教育政策の目標をはっきりさせてきました。そしてその政策は具体的に進められ、自由を根本とした第一次教育使節団の報告書と全く反対のようになりました。その具体例は次の通りです。

(一)テスト制度がますます強くなってきた。そして〇×式などや、テスト勉強により生徒の物事を批判的に見る能力を低下させ、変体的な競争心が生まれている。

(二)選挙制の教育委員会が、昭和三十一年度二十四通常国会で、任命制教育委員会になり、中央集権制がしだいに強まってきた。

(三)教育大学の家永教授が最近裁判所へ「教科書検定制」について訴えた事は有名ですが、この教科書検定とはなんの目的に行われたものでしょうか。第一次教育使節団においてあれほど、批判された事が再び行なわれているのです。そして教科書無償などと言ってよいその制度を強化しているのが現状ではないでしょうか。五年生の歴史の教科書の、湯川博士のノーベル賞の写真が取り除かれ、東条首相の写真が出てきた事から考えても分かると思います。

(四)教師の組合権も、「地方公務員法」により弾圧されている。

(五)勤務評定が一九五七年から始まった。これは昭和三十三年十二月に都道府県教育長協議会が出した「教職員の勤務評定試案」が原

共学となるように提案した。又中学校の上に無月謝で入学希望者には誰にでも開放された「上級中学校」(現在の高校)が設けられる事を提案した。

(三)今までの試験制度の教育を批判し「試験準備という事に支配されている教育制度は形式に随し、常套に陥る。それは教師と生徒の側に画一化を助長させるだけである。それは自由探求の精神を窒息させ、批判的に判断を加える態度を殺してしまう。それは社会の利益よりも、むしろ官僚群の利益を計る権力者の操縦にたわいもなく自分をまかせてしまう。そしてこの教育制度は時に、ごまかしや、背徳行為に誘ったり、あるいは不健全な自棄の行為に走りたてる変態的な競争心を生む。」と主張しています。

だいたいの三点が主なものです。最初の中央集権的な教育組織を変えるために、各地方の人達から選挙された教育委員会が、その地方の学校の運営を行う事が提案され、教科書についても「学校の仕事で規定で動きのとれない教科書案や、それぞれの科目についてただ一冊の認定された教科書に限定されている限り、民主主義教育の目的の達成を助長することは到底不可能である。」と一冊の教科書を否定し、一定の地域から選出された教師達の委員会が、選択すべきだと提案しています。そして教師の組合権についても「教育の自由を守るために、全国的な組合が必要である。」と組合権を肯定しています。

このように、合衆国の初期の教育政策は、とても個人主義、自由主義に密着していたものです。しかしアジアの中で、社会主義的勢力と民族主義勢力が高まってくるとしだいに日本の国のあり方が変



型となりました。この方式は一人の上司(校長)による一元評定で、本人には見せない秘密主義の原則を持っています。アメリカでの評定は、普通品等法というものでこれは、生徒、同僚教師、視学の三者を品等としてその相関を調べるやり方で日本の場合よりずっと民主的です。これで教師の自由をある程度しぼり、中央集権をより強くするものと思います。

(六)と重複するが、能研テスト、学力テストまでのテストの乱入と、能力主義の時代の現状。

(七)「期待される人間像」のようなものが後期中等教育の目的である点、そしてそれらを作った中教審の特別委員会のメンバーは財界人と、昔の文部省関係の人が主である。

色々と上げれば切りがないのでこの辺でやめますが、このようにばげしく教育政策が変わり、自衛隊が作られる現在では約十四万人で近代的な軍事力を持ち、社員の一入隊や、スポーツの中での自衛隊の役割、防衛博覧会や週刊マンガ雑誌の内容など、自衛隊はますます青少年の内へと入ってきています。これは昭和二十八年十月MSA援助の受け入れについて行なわれた池田・ロバートソン会談での内「占領八年にわたって日本人は、いかなる事が起こっても武器をとるべきでないという教育を最も強く受けたのは、防衛の任にまづかなければならない青少年であった。会談当事者は日本国民の防衛に対する責任感の増をわけるような日本の空気を助長することが最も重要であり、日本政府は教育および、広報により、日本に愛国心と自衛のための自発的精神が成長するような空気を助長することに、第一の責任をもつものである。」との話し合いがなされ

た事から、このような事が起っているのではないかと思う。自衛権を現在の政府はどのように考えているのだらう。先日国会において「日韓条約」は与党の強行的な採決により成立したが、ある議員がその審議中「もしも朝鮮半島で戦争が起り国連軍がそこへ戦いにゆく時日本の自衛隊も国連軍としてその戦いに参加できるかとの間に對し、政府側は「できる。」と答えた。そしてその一年前に三矢作戦計画という紙上での朝鮮戦争が起った場合の計画が、自衛隊で作られていた事が、ある議員により暴露された。本当にこのような事が起ったら又戦争中の日本へもどってしまふのではないかと不安がよけい高まった。そして台湾の軍隊、南朝鮮の軍隊が日本の明石においての時刻を使っていることも見逃してはいけないうと思ふ。現在ベトナムでは、社会主義の侵略なのか、私達にはまだハッキリ分らない事が多いと思う。もしも朝鮮においてベトナムと同じような事が起ったならば、果して自衛隊か自衛隊として出動するか、又は侵略者の援助として出動するか、とても大変な問題ではないか。現在の教育がこのようにある方向を向いている事は事実として見て、その中の生徒会の役割を考えてみたい。ある先生は、生徒会とは学校での一つの教育機関だから先生の指導に従えと言うかもしれないが、実際の教育自体がある方向に行っているならば、私達生徒いや日本の平和を願う青年は、それを少しでも正しい方向へ向ける義務があると思う。しかし私達の中には、先生の方が経験もあるし、能力もあるから従うべきだという公式的な考えの人が多くいる。その考え方は一番危険だ。なにも先生を信頼しないわけではないが私達は本当に研究し、話し合ってからこそ態度をもつべきであらう。ですから生徒会はその話し合いの機会、みんなが真剣に研究してゆく機会を作っていかなければならない。ここにこそ現在最も

自治会としての生徒会の重要な仕事があるのだと思う。生徒会とは「生徒のための生徒会でなければいけない」と言われるが、どの生徒会でもあまり具体的な案があらがない。それは生徒会を抽象的概念で見からであらう。それを構成している生徒の典型を正確にとらえ、その問題の部分をぬき出して、それへの具体的な解決案を出してゆけばいいのである。しかしその典型を正確にとらえる事はとてもむずかしい、日本全体いや世界全体の動きの法則性、それと日本の今現在の動いている位置、そして教育政策と現実の生徒の悩みを自分から進んで行動し考えるのである。そして他の高校の経験や自分達の創意により、その高校にあわせた方法を用いて活動を行なっていくのである。活動する場合は必ず具体的に、任務を明確にして、責任者を一名必ず置くこと。そして一回の活動ごとに点検を強めながらその経験を含む総反省を行ってゆく事である。自分達の仕事の意義を本当に自覚し行なうならば、苦しくとも挫折しないで努力してゆくであらう。その例として僕が一年の時の生活委員会を上げてみよう。それは二期の後半からの活動で「服装規定改正」の大目標を掲げて活動した。そして何人かを具体的な任務につかせ、そして何回もやっていると今まで委員会になかった委員も自然と集まり、毎週何日か五時頃まで残り活動したことがあった。その時はその仕事の目標もはっきりしていたし、生徒一般の考えも分っていたのでよい活動ができたのだと思う。松高の各常任委員会の委員の集まりが悪い事は承知の通りだが、委員長や、総務会自体に問題があったのだと思う。今までの活動でマンネリ化した状態を突破したこともなく、いつも同じような事を役員が言って、同じような不活発さが生じてくるのだ。必ず具体的にのすばらしい方針に基づいて活動を進めてゆくならば生徒会活動も活発になってくると思う。



生徒会総務

前期生徒会長 鳥飼 博美

生徒会レポート

まず生徒会を動かす一生徒が団結してある方向に向って進んで行くことの難しい事を身にしみて感じた。一休生徒会とは何のためにあるのか？生徒会は何をするものかという難しい間に、愚かなる私は遂に最物まで解答を得る事が出来なかった様な気がする。自分では一生懸命やっているつもりでも実際には何も成果がなかったり、観念的には生徒会とはこうあるべきだ、等と自分勝手にそんな概念を頭の中に形づくっていたが、さていざ生徒会を執行するということになるとなかなかうまくいかなかった。でもそれはその現実と私の頭の中にある生徒会の姿があまりに矛盾していたからだ。自分の頭の中にある生徒会にするのにまず障害になったのが現「規約」である。普通、一般的には生徒会機構図で一番てっぺんにあるべきものが「生徒総会」であるというのには戦後の現代教育（民主教育ともいっているがね？）をうけた人達なら小学生でも知っている。ところがこの学校はどう



1965年度

いう工合でこうなったのか。一番上にあるべきはずの「生徒総会」の上に、いろいろなおまけがついている。そのおまけのおかげで生徒会運営にかなり支障をきたしたのは事実である。そしてどうしても忘れることの出来ないものは現在の高校の現状である。というよりこれが今の高校全部に通ずる現象(受験、受験で追いつめられて何もする気がなくなった人間だか何だかわからない人達がウヨウヨいるということ)。(かもしれないが勉強の妨げ(実際には妨げにはならないのだが)になることはスポーツ・読者・その他いっさいやらないという精神的にかたわの人間がたくさんできつつあるということである。当然、彼らは生徒会活動などはやろうと、また考えもしない。つまりそこから生徒会の不活発が生みでてくるのである。これじゃ、いつまでたっても、誰が、一生懸命やってもカラ回りばかりしているのは当たり前である。皆、もう少し生徒会・社会のことを、考えようではないか。でない、今にクイズ(テストのこと)しか解くことの出来ない人間が、出来てしまふ……………。



自己の犠牲を省みず、努力し、助け合った姿を、目の前に写し出して思いたすと、本当に、よくやったと思います。これからもこの松高で暮らす後輩諸君、そしてこの三学期で卒業される先輩の方々、悔いのない高校生活を送りましょう。

自治委員会 (前期)

自治委員会の出席率の悪さは有名である。そして前期もまたその例に洩れなかったのがあります。実際、面白いことに、このことは委員長が努力の如何に殆ど比例しないのであります。私が一年の時の委員長は、委員を狩り出すのに実に熱心でありました。しかし、それにもかかわらず定数を越える事は、まずなかったものであります。私の場合、前任の委員長に比較して努力が足りなかったにもかかわらず集まる人数は殆ど変わらないのであります。特に前期において一年生の出席率が悪かったことは残念なことでありました。この出席率の悪いという事には一体どんな理由があるのでしょうか。

直接的には各委員が委員としての自覚に乏しいということですが、その底には他の理

後期生徒会長 羽根田文男

まず、後期を振り返って見て、一番印象に残ったのは、公開質問状の件です。

これは皆さん御承知の通り、学校の生徒の言論活動への干渉を第一に上げ、その他に定時制の問題、H・Rの問題、教師の学校内での宴会の事の四点を学校側に質問したのです。これは総務で決議し実行しましたが、総務独自で行なった事は非常に反省すべき事です。しかしながら、水曜日のH・Rの時間一つのことを全校のクラスが討議した事、放課後、生徒ホールに於て、公聴会を持ち、約百五十名の参加者を集め討議し合った事、校長室で先生と話し合う機会を持った事は、とてもよい経験だと思えます。そして各クラスより生徒総務へ批判的な声や、支持する声など、多くの人々から生徒総務会へ意見が出された事は今までになかった事だと思えます。これが一時的でなく持続的に生徒会上部へ意見を多くの人が述べられるようになれば、生徒自身の生徒会になると思えます。そもそも生徒会自身、生徒全体で団体を信頼し、一人一人の悩



由があると思うのであります。

それは生徒会活動において自治委員会の印象が弱く、その役割が明確でないということでありましょう。

生徒会規約を読んでも役割の明確なものは、予算案を中心とした生徒会総務の提案事項の審議だけなのであります。委員長であった私自身任期を終えても自治委員会がどうあるべきものなのかはつきりと掴めなかったのであります。ですから現在の生徒会規約を大幅に改正する必要があるのです。自治委員会においてホームルームと生徒会本部を結び、各ホームルームの一員が直接生徒会運営に携わるようになることを私は切に希望するのであります。

自治委員会 (後期)

これからの自治委員会は、マンネリ化した予算の承認・不承認だけに終る自治委員会の仕事のあり方を考えて、少しでも積極的に、自治委員会独自の仕事を持って働こうと思っている。

現在、松高において、マンネリ化しているものは数多くある。しかし、中でも特に目に

みや意見が述べられていきながら、皆で解決してゆく一つの学校内での組織だと思えます。ですから一本松の会へも全員が参加し、定時制の生徒と話し合い一緒に考え合う事が重要になり、統一テーマを持ち、各クラスが一致協力して、研究を進め、クラスの親密度を増してゆくことが、大切ではないかと思えます。後期中にそのような事を全部実現させたかったと思いましたが、実際の所、階段を二・三段登ったにすぎません。しかしこの目標を次の生徒会役員が、引き続いて行なっていくならば、必ずこの目標を実現する事ができる日が、近いうちに来ると思います。私は次期役員へ、私自身の経験から、教訓として学んでもらいたい事は、「一般生徒が、生徒会へ関心を持っていないと、絶望する時が一度はあると思うが、その時も一般生徒をあくまでも信頼し、活発化への具体的案を作り、必ず実行してゆく事」です。

人間とは考えたり、言ったりする事だけでは真に学んだとは言えません。行動してからのみ真に学ぶ事が出来るのだと思えます。この事は、この二年の間、生徒会活動をやった本分に分かった事の一つです。

文化祭・体育祭などの、行事に多くの人が

つくと思われるのが自治委員会だ。

そこで、生徒会会員の生きた意見を尊重して、H・Rとのつながりを一層深く濃いものにして行くつもりである。

そうすれば、会員の意見によって、委員だけのコチコチの考えにかたよらず、この会を進めることができる。

今までは、委員のみの意見に固まっていた。そこで、このからを破り、本来の自治委員会の姿に思っている。この『からを破る。』とは、非常に大事なことである。

その一段階として、自治委員会新聞がある。この新聞は自治委員会の活動を知らせるもっとも良い手段であると思う。

この新聞によって、自治委員会独自の体制を作り上げ、マンネリ化した状態を抜け出して、生徒会に、全会員が関心を持って、その会を運営して行けるようになることを願う。

文化委員会

委員会とは元来どういう性格のものであるのだろうか？

この一年を通じて、この疑問を感じざるを得ない。

委員会とは単なる奉仕団体なのだろうか。
文化委員会はこの一年、前期は文化祭一本、後期は文化祭とル・クルにその全力を傾けた。

文化委員会とは元来、生徒会の文化面の活動をするのが主な仕事ではないだろうか。

今の状態では文化祭の一本にならざるを得ない。思うに、文化祭は特別に文化祭執行委員会を設けるべきである。ル・クルも編集委員会を別個にしたらどうだろう。文化委員会は、専ら文化的自主活動にその行動を限定すべきだと思う。

実際このままでは、二兎を追うものは何とかで実質的向上は、なかなか望めないように思える。

もう一つ感じることは、委員会全般のことでもあるが、委員の自覚のことである。現在のように実質的に奉仕団体になっているようでは、自覚より不満が、多くなることは必然であると思う。来年度は、この点をとくに、生徒全般に考えていただきたい。

図書委員会

皆が、この委員会に関心を持っているとし



次に、これからの委員会の方針を述べよう。

一番大きな目標は、H・Rのまとまり及び横のつながりである。これは、H・R統一テーマ制を取る事によって、達成せられると思うが、まずこの統一テーマ制の研究をしなければならぬ。

もう一つは、委員会の活性化であるが、一人一人の委員の「やる気」を期待すると共に、H・Rにとけこんだ生活委員会をつくって行きたいと思う。

特に、委員会の主体性、自主性をより上げて行きたい。

保健委員会

現在、保健室を利用する人は、一日に少なくて六・七人は、いる。ということは一ヶ月にして二百人近く利用するわけである。この中のはほとんどは、腹痛・きり傷等の軽いものである。

体育祭においては、けが人が数十人も出た。この時は看護婦さんが手伝ってくれたにもかかわらず、ありがたくなかった。

マラソン大会は例年であるとか、かなりのけが人が、出るということ、他の土地で実

たら、それはおそらく図書室の運営法だろうと思う。委員会として一番基本的な仕事でもあり、文化祭や読書会よりも確実に行なわれなければならないのだが、これ自体に多くの問題を残しているようだ。

まず、カウンターがしっかりしていないという事、これはどの学校でも悩みの種である。次に、生徒の望んでいる本が少ない事。

多くの本は、PTAの予算を先生方が各教科別に希望を出して購入される物で、当然生徒との間にギャップができる。そこで今年から購入希望図書を、いつでも書き込める帳簿を作ってみた。これはPTAの予算も使える仕組みで多少なりとも生徒の希望書籍が多くなる事と思う。又、図書室自体にも問題がある。

何しろ、床板の張力から計算した許容書籍重量と、ダンブカー並の制限があつて、書架も思うように増やす事ができないし、室は狭く五十名も入るとにわかで騒然としてくる。以上は、宿命みたいなもので新校舎が建たない限り解決されそうもないので、イスや机の配置なども十分考えて現状維持に必死となっている。

最後に、生徒の要望にも答えて「使い良い図書室」を重点的に作り上げる事、室外活動は

そのうえで出来るだけ行なう。欲張らずに着実な発展として生徒会員の協力も望みたい。又、悪い点があったら、できるだけ改めよう。

生活委員会

「無気力」ひと口に言って、今の委員会の状態はこれであろう。

委員会の出席人数は毎回十人前後。その度流会にしていたのでは、何もできなくなってしまうので、その情けない人数で話し合いを始めるのである。

先日、ある委員がこんな事を言っていた。「委員長がやれと言え、仕方ないから一生懸命やる。」これがH・Rを運営して行く生活委員の実態なのである。

生活委員の仕事はひと口に言って、H・Rの計画・運営・及び風紀一般。H・Rの方は、各クラスの性格もあつて、活発、不活発、色々であるが、風紀の方は、学校全体の事とあつてなかなか困難である。特に、服装、遅刻はむずかしい。

遅刻の件は、最近の委員会でも、厳重に取り締ろうという事になっている。それについての計画は現在進行中である。



ようなもの。これでは松高の新聞委員会が泣いてしまうというものであろう。

後期を振り返って見ると、二年生の修学旅行や文化祭・体育祭それに創立十五周年記念式典などと、ニュース価値を持つ大きな行事が多かった。にもかかわらず、新聞委員会では停滞が続けてきたというのは、どこにその原因があつたのであろうか。

まず第一に考えられることは、委員長こと私は、新聞を作るということを甘く考えていたこと。

第二には、委員は委員会に対してあまり協力的であるとはいえなかったこと、つまり、委員とは各クラスより選ばれたのであつて、中にはどうしてもやりたいので委員になったという人もいるが、それはまれなこと、強制的に委員にされてしまったという人が多い。だからあまり協力的でないということもおこってくるわけである。

私は、委員長として委員会が停滞したという事について大きな責任を感じる。と、共に今後このような事態を二度とくり返すことのないよう切望したい。学校における学校新聞は、世における社会新聞と同等の重要性を持つものであるから。

体育委員会

今年度の反省に真先に上がるのが、委員の委員会への認識の足りなさである。前期の反省の時、行事の企画、運営に当った一部の委員（全くゆゆしき傾向。）以外は、委員会というものを考えていない事が目立った。最も、委員長も、いい加減であったのだ。全く悲しくなる。これは後期になって少々見通しがついていたが、それでもいい加減なものである。

自治活動の大前提がなかった今年度の委員会は、全ての行事に渡って不徹底さを暴露してしまつた。不徹底さの具体例として、一つだけ恥をさらそう。

前期の初めの集まりの時、職員会議から、今年度のマラソン大会は今までのコースが危険と見られる為、コースをなるべく移したい、体育委員会はそれをどうするか、と見解を問うてきた。その時我々は、予算が少ないという事もあつて話し合いの結果、今年度は中止を決定した。（全く軽率であつた。）

その報告の後に職員会議は、恒例の授業行事であるマラソン大会の中止を決定するのは出鱈目だ、他のコースを捜してデータを出した上で、役所が許可しない以外は中止しない



を呼んで来るという全く本来の姿とは、かけ離れてしまつています。

ところで、昼休みに流している番組は、現在、もっぱら音楽番組が多いのですが、今学期からは、水曜日は中庭でフォークダンスを、木曜日は落語を、という様に、番組に変化をつける方法を取りました。又、特に放送を聞きたいという人に対しては、どこか教室で静かに聴けるようにしたいと思つています。

文化部

物理部

文化部員にとって文化祭の準備ほど充実した時間はないだろう。僕達物理部にとっては猶更その感が強い。毎年夏休み頃までは、クラブのまとまりが弱い。活動内容の性格も関係しているが、部員の怠慢が大きい。昨年もその通りだった。夏休み後、部会を開いた時、予定の遅々として消化されないことにあらためて驚かされたような次第であつた。しかしこれが転期となつて、一種の緊張感が部員の間に生じた。だが目標は遠い。ゴーカートの

という事で、一つの委員会の決定もふらりと変わつてしまつた。（ああ全く、皆にすまない。予算をその大前提を守るために使わなかつた事に対して。）考えると、来年度からの委員会には、もっと学生自治を話し合う場がひんぱんに必要となつてくる。望む、全く良く皆で考えてから出発。

整美委員会

どこの委員会でもいえると思うが、我が整美委員会は、委員会のたびに委員の出席率が少ない。又、出席しても意見が少ない。

今後の整美委員会の方針は、『生徒会の中の整美委員としての自覚を持ち掃除だけを行なうのではなく、教室の環境を良くする。委員に望むことは、委員会にあまり良く出席しない人は、自主性を持って整美委員独自の組織を作つてほしい。』とは先生のお言葉。

先生に言われるまでもなく委員会を、開いた時には、せめて最低各クラス一名は必ず出てもらいたい。

清掃用具の修理や庭の手入れをやる時には、積極的に出席してほしい。

又、委員会に出席した時は、建設的な意見が



以上毎年のように感じる感懐ではある。

化学部

僕は、先輩達のような名文を書けないので思いついたままに書きます。

中学三年間を化学部で過ごしたので、他のクラブは知らないし、化学が好きなので松高の化学部には興味をもつて入りました。十五名くらいいる一年の部員の出席人数は八十名でそのため基礎実験がほとんどできず、夏休み中は七月には実験と薬品整理をしたが、八月にはいると部員の出席状況が悪くなり活動が困難になった。化学が好きな連中の集まりのほゞであるのに、まったく困つてしまふ。でも二回の工場見学の時には一年から三年まで二十名位集まつた。今まで知らなかつたことを知り大変よかったと思う。やがて文化祭のまわっている二学期となり、今までやの気がなかった連中も活気づいてきた。それは全員が発表しなければならなくなつたからだ。一年生は入学して始めての文化祭、そして化学部の知識といえは中学の程度でまづたくおそまつではあつたがなんとかみんなの協力により無事成功した。しかし十五周年記念

出るように、生徒会の後押しとなり、活発化したい。委員自身、奉仕の精神を少しはもつてもらいたい。

放送委員会

MBSこの一年間を振りかえつてみて一番印象深く残っているのは何といっても、文化祭です。まず、私達の義務としてやらなければならなかつたことの重要なものの一つとして、体育館で、放送可能にすることです。これは、とても大変な仕事で、MBS技術課員が徹夜をして、やっと当日に間に合わせた位です。又、MBSは、放送委員会と放送研究会とで成立しているということに、問題があります。まず委員会側として、各クラスの委員の出席率が、あまりにも悪いということですが。しかし、MBS内部では、一日も早く委員の人達が出てくることを待っているのです。今年からは、待つていただけでなく、当然の義務として、必ず一週間のうち最低一日は、伝達放送及び番組制作のために参加することを徹底させるつもりです。

現在の状態では、委員の不足を補うはずの研究員が主体で、それを補う為に委員

でやった綿あめが人気をさらい、僕達が本
に見てもらいたかった発表の方には関心が集
まらず困った。

化学は自然を相手にした学問であるから、
今後僕達は自然を本当に見つめ、常に自然に
謙虚であることをモットーにして頑張りたい
と思う。

演劇部

我松高演劇部の第一に上げられる欠点は、
男子が少ないことです。私達はたいいてい劇の
上演三ヶ月位前から脚本探しをしますが、そ
のたびに有名な作者、たとえばシェークスピア
やモリエールやチェホフ等の書いた、恐し
くぶ厚い戯曲全集を手に取り、心を踊らせな
がら、それらの本のページをめくっていくの
ですが、皆の顔がだんだんガッカリしてくる
のはいつも同じ場所です。本を取って約二秒、
三秒、登場人物欄の所へくると、「ウー、
この登場人物見て男十人、女八人よ。これも
だめネー。」という会話がいつもくり返され
ます。そして結局「女性のための戯曲集」と
か、「未来劇場」等の中から、適当な脚本を
選ぶのです。男子諸君の中には、「劇なんか



る。一つのクラブを形成する大前提を生かす
事が必然であるから。

社会科学部

社研のする仕事というと、社会現象を知る
為に本を読み、話し合い、その中で自己形成を
する事なのですが、この魅力のありそうなク
ラブには、今年になってからは二年生だけの
五・六人の部員しかいません。何処でしょう。
第一に批判されることはPRの足りないこと
でしょう。それは本当のことですが、社研で
は少ない部員で充実した話し合いができるよ
うに部会・部員を通じてのPRは特にしない
で、勉強会中心の活動をしてきました。それ
が影響してか、それ以来人員数の足りないま
まに情勢的なクラブの代表として過ごしてし
まいました。このままでいけばつづれるのは
きまっています。その上このクラブは一方的
に「アカ」だといわれ苦労しています。今の
社研は社会現象を科学的に知る為に、あらゆ
る権威者からの意見を聞き、自分の考えにも
ついていこうとしています。それはあくまで自
分の意見であって「右」や「左」の意見では
ありません。

はすかしくてできないや。」などとおっしゃ
る方達がよくいらっしゃいます。それはと
んでもない思い違いです。役についた人、照
明の人、舞台装置の人達の気持ちが一つにな
ってある物を完成していく事は、なんとすば
らしいことではありませんか。これからの松
高の演劇クラブが良くなるか悪くなるかは、
あなた方男子諸君の手中にあるのです。どう
ぞ、「我こそは」という気持ちになってこの
クラブに加入して下さい。その他、やらねば
ならぬことはたくさんありますが、やはり部
員数をより多くして、もっと演劇クラブの存
在を皆さんに認めていただくことが先決だと
思います。

美術部

今年度一年間の美術部の反省を書けと言わ
れた時、「いよいよ来たか。」といった気持
ちであった。(我部活動の有名無実、明らか
になる時)素粒子の中の電子の様な活動と存
在の我クラブであるから、その活動には団体
性はなく、その存在は不確実なのである。例
えば部員と名のものがひとりでも美術室に
居て、それらしきことをしていれば、部の存



今の高校生活は「ただ学校の勉強をしてい
ればよい」という時代ではありません。それ
だけ世界構造が複雑になっているのです。今
のこの緊迫した刻々と変わる時勢に、何も、
もの言えない高校生でいいのでしょうか。イ
ンフレの影響は直接学生にもひびいているの
です。

社研のこれからしていきたいことは、あら
ゆる社研への偏見をなくしてもらいたいこと
と、あらゆる学生・松高の現状としての社
会を知ってもらうために活動していこうとい
うことです。みなさんの御支援を期待してお
ります。

プラスバンド部

都立高校の中でプラスバンドのあるところ
は少ない。入学式の式典でプラスバンドの演
奏がなかったことから「本校にはプラスはな
い。」と思った一年生も多かっただろう。又
実際自分自身も入学後一ヶ月はその存在をし
らなかつた。知っている人に「わがプラスの
特長は」と尋ねると、「ヘタクソ」というだ
ろう。本当にそうだから否定しない。しかし
これでは情ない。男なら一度は「ラッパ」を

在は認められるのである。そして伝統の「個
人の自由な部への参加」や経済的救済の場
である我クラブは、一種の不完全すぎる社会福
祉国家的な部なのである。即ち、美術部員の
多くは、美術に対する情熱か又は憧憬で入部
を希望する。ところがその人達は、美術部が
研究部の様な一面を持つことを嫌い、個人の
場所、機会、材料等経済的必然性からだけ部
の形成があるものとしているかのよう動か
ない。例えば活動の一例をあげると、前期初
の集まりで年間の方針として、団体による技
術の研究、美術研究等や、展示会(年に三回
夏休み前、文化祭、冬と行なう予定であった。
)における出展による個人の研究発表で裏あ
てした計画の具体化として、クラブをグルー
プ(例えば、絵画、彫刻グループ)に分けて
年間個人的活動以外のものとして行なうこと
を決定したが、やらすじまい、というのは、
やはり個人的活動が優先していたから。しか
し美術部は存在している。まるで、先の経済
的必然性だけが本分であるかのよう。来年
度からは、新入生を加えてこの計画を再考慮
し、改善して、成功させることを考えている。
これは、自分達の知識・実践をより上手に生
かして、独善的になるのを防ぐのに有利であ

自由に吹いてやろうという気持ちがあっても
いいと思う。それを実行に移した十二・三人
の集団がプラスバンドである。みんな「のん
気」そのものといった人間の集団。マジメに
練習に出るのは十人位。少人数のせいか家庭
的雰囲気よく気が合う。積極性は、という
と「のん気」であることかわかると思うが
ほとんどなし。例をあげると、一つの曲を「
やろう」ということでいきいき吹いてみる。や
りそろうわい。あきらめて基礎のやり直し。
こんなものである。まあ少しづつ向上してい
るのだろう。

つい最近まで学校の楽器五台という状態で
部員数は多いくらいだった。これが大きなハ
ンディキャップとなり、発足以来二年間の進
歩を邪魔するものであった。だが今年になっ
てプラスバンド部とよべるだけの楽器はそろ
った。部員はむろん松校生全員にとってもこ
れは大きな収穫である。これからが本当のプ
ラスバンド発展の時期だ。

合唱部

私達合唱部は現在部員数二十余名。音楽を
知り、音楽を愛し、その深さ、美しさを感じ

る心を持つことを願ひ、そしてそれを体で感じようと週二回の活動を行なっています。

今年度の活動は、四月から新入部員を交えてスタート。最初のうちは平易な曲、楽しく歌える曲などを持ちよって、チームワークの育成に心がけました。七月からは文化祭の準備を開始。夏休みは各自の力をのばす目的で個人練習にあてました。そして文化祭。練習不足であとであわてた感がありましたが、とにかく成功でした。当時のレパートリーは約二十曲、二学期の後半は新しくクリスマススキャロールを加えました。

今の私達の目的の一つは、チームワークを固めることです。合唱というのは個人プレーではありません。だから個人個人が自覚するか否かによって合唱が成功するか否かだといってもいいすぎではないでしょう。今年から男生徒もぞくぞく(?)入部しこのことは今後活動をすすめる上での大きな課題になると思います。現在の高校では、選択制のため一、三年まで音楽に触れないで卒業してしまう人もいます。音楽は古今東西をとわず、常に人の心と共に生きつづけた、いわば人の心の記録です。その大切なものに、心の成長期である高校時代に一度も触れないというのは、何



メージをかし出したからです。大きな失敗は、花名を明記していなかったことで、お客様に色々聞かれてこまっちゃったことです。

来年は今年のような経験を生かして、充実した日本古来の芸術、「華道」というものを、よりよく理解されるように励みたいと思います。男子でも落ち着いた気持ちになりたい方や、一度花を生けてみてほしいんじゃないかなと思うかたは、どうぞ入部して下さい。もちろん女子でやりたい方もぜひどうぞ。

文 芸 部

我々文芸部の今年の活動は誠に不活発だったと思います。理由としては一年生がたくさん入ってくれなかったことです。PRはうまくいったつもりですが、文芸部というものは初めから毛嫌いされているようです。ではよりよく文芸部を知っていただくように私達の主な活動をご紹介します。

まず何といっても最初に上げたことは、文化祭で行なった劇のことです。前例のないことなので部員一同、大変苦労しました。脚本・装置・照明・キャスト・演出等、すべて部員が行ないました。もっとも人数が少ない

か考える必要があるのではないのでしょうか。声を出すという最も基本的なことで音楽の心に触れて精神的な向上をする。すばらしいことじゃありませんか。私達合唱部が松高生が音楽に親しむ一つの糸口になれば幸いだと思っています。

生 物 部

五月に一年生歓迎会を開いて山へ行っただが、一年生は多く参加しなかった。夏休みには尾瀬に合宿し(三年生も参加)、特別天然記念物のモウセンゴケなど珍しい植物もあり、特に日光キスゲの黄色いジュエータンのような湿原は一生の思い出になりそうである。文化祭は、部の年間を通しての大きな目標の一つである。何を研究するかと決めるのに苦労したが、決まると失敗が多く出た。第一に温度との関係である。「柳の極性」「発芽の速度」「栽培法」「ネズミの学習」等である。その他に時間が非常に長くなるものが多いので、文化祭が来たらすぐ発表できるといふ実験が少なかった。手違いなどによることも多く、特に相手が生き物だから、実験に対して、愛情が非常に大切になってくる。そ



してどうにか文化祭にこぎつけたという感じが強かった。かげには先輩や先生の御指導があり、大変感謝している。

もう一つの目標に部誌を作成することがある。今まで三年間の結果の総まとめをする。先輩達の実験の結果や我々の研究の成果を思うぞんぶん記録し残して、松高の生物部の歴史に形を残していくことがこれからの課題である。

華 道 部

花……。それは造花のようにきらびやかではないけれど、可憐で清楚です。私たち華道部員は、毎週土曜日に集まって、ありのままの花を生けようと努力しています。

今この一年をふり返ってみますと、やはり一番活躍したのは文化祭でした。同じ花を五・六杯ずつ異なった生け方にしようと思いましたが、なにごと未熟な為、型も多く生けられなかったのだ、その案はだめになりました。結局内容は一昨年と同じ様になってしまいました。しかし全部異なった花でも、まずまずの成功を修めました。というのは一鉢一鉢が独立しないでまとまり、一つの華のイ

先輩・後輩の区別なく話しあうことです。

書 道 部

ことしの書道部は外面的な方面が大きく伸び、内面的な方面で失敗をした。外面的方面とは展覧会への出品や文化祭である。展覧会への出品は、今まで一年に二回であった。昨年は一回しか出品できなかった。ことしは三回出品してみた。三回共出品点数が少ないが、とにかく出したことはうれしかった。文化祭においては条幅作品の仮装裁を自分たちだけでやってみた。ただ裏打ちというのを業者ができないがある程度のはできた。また表裁をしたために作品がrippになり、充実した展覧会ができた。今後はもっと工夫されてrippになるだろう。

内面的な失敗とは、クラブの中でこのとで、特に大きな失敗は一年と二年の間があまり発展せず、お互いに話し合いのチャンス等もなかった。それが原因で練習もなんとなく不活発で興味の無いものになっていった。たとえば夏休みの練習計画であった条幅は一度も行なわれなかった。またふだんの練習も

ときれとぎれになり、興味のわくひまがなかった。そのほかいろいろの計画も実行せずにおわったものが多かった。今後はみんなよく考えよくしていかなばならない。

写真部

我々は写真という芸術の一つのジャンルをこよなく愛する連中の集まりである。四十年の一つの目標は「限定された空間での創造」ということだった。イーゼルをかたむけたら、定着液をタンクのバケツに入れて定着、「色がかわっちゃったよ。」「だけどきれいじゃないか。」「とおもしろがったりなげいたり、だんだんそういった興味本位のものから、詩的な雰囲気を持つ「無意識の構成」という美しい無駄のない作品までできた。一つの収穫であると思う。

もう一つの目標は「楽しくやろう」ということであった。が、とりちがえて「てきとうにやろう」とかんちがいした人もいたけれど。しかしあの暗室で今まで活動してきた部員達をほめたたえるべきである。なぜなら「明るい暗室で楽しくやろう」という標語まで作



い。

私達は、手芸というものは生活を豊かにするものであり、そうでなくてはいけないものだと思っている。飾り気のない室に一匹の縫いぐるみを置く。造花を飾る。また私はよくレース編みができないから、針を持つのが苦手だからという人がいるのをきいているが、それは違うと思う。レース編みができないければなぜ学ぼうとしないのだろうか。針を持つことだけが手芸ではないはず。彫刻刀や筆による作品も手芸活動の一部であると思う。知らなかったことを学び、それも部員同士がお互いに楽しい雰囲気の中で教えあい学び覚えることができたなら、どんなにすばらしいことだろう。趣味と実益を兼ねたクラブである事に誇りをもってこれからがんばっていききたい。

ユネスコ

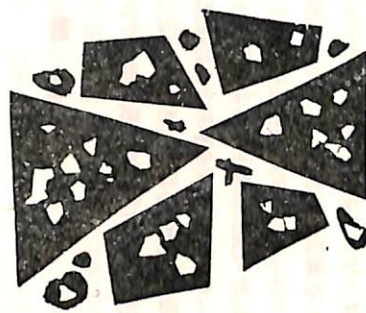
ユネスコは今年で二十年を迎え、ますます世界の平和に役立って行こうとしています。ユネスコの活動の一つとしてユニセフがあります。国連は国連児童基金(ユネスコ)を設けることによって新たな責任を認めて、確固たる信念を表示しています。また国連は「す

らしめた暗室である。天気がいいと本を読むことができるほど明るいのである。また引き伸ばし機がすごいので、引き伸ばし中にランプハウスがガタガタと落ちてくる。非常に不可解な暗室である。はたして暗室といえるだろうか？

芸術家は常に不幸である見本のようなクラブだが、愉快な連中ばかりなので楽しい。来年度もまた楽しいクラブであるように祈る。

手芸部

手芸部の活動においての目標は文化祭にあると思う。それは部員の作品を公に見てもらえる唯一の機会であるからだ。しかし今年度の文化祭に於て、皆の関心のなさには驚いた。昨年来展示とバザーの両方を行ってきた私達だが、「バザーってどこでやってたの」「手芸部の展示場なんかあったのか」という人達もいた。確かに目立たなかったかも知れない。私達の作品が皆の関心をそそるようなものではなかったかもしれない。でも私達は一生懸命にやった。へたといわれてもいい、ただ努力をした作品であることは認めてほし



べて世界の児童は例外なく人類の与えうるに

価値する」と宣言しています。ユニセフの役割として、児童を従来の飢餓や病氣から救うために、各国の政府が必要としている資源を外部から動員することです。またその他ユネスコの活動として教育・文化の復興があげられます。あなたは文盲が世界中にどのくらいいるか考えたことがありますか。ユネスコの統計によると七億いるといわれています。アフリカ・アジア・南米の国々には「文盲率」七〇パーセントから時には九〇パーセントに達しているところがあります。ユネスコ創立以来、成人の「文盲」をなくすことに目標を定めてきました。

ユネスコは現在八ヶ国の国々を選び、その国で学んだことがすぐに生活の面で役立つ事柄を中心に努力をしています。また各国々には新たに読み書きの能力を習得した成人に適切な書物を与えることができるように援助しています。

このように現在も多くの文盲の人々をなくすために、ユネスコは努力をつづけています。我々もただ読んだり、書いたりできるからと、それに甘えていずにもっと現実を目を向けて、そのような文盲の人々の多い未知の

国のことを考えようではありませんか。

舞踊部

深紅のどんちようがおごそかに上がると、深緑の木立の中から、純白の衣装をまとった白鳥の精の登場・・・私の数多くの夢の一つです。けれど美しい衣装に負けないで軽やかに、あるいは憂いをもって踊るには、やはりそれ相応のレッスンが必要です。舞踊のレッスンには、冬より夏の方がキビしくつらいものの、これは私は身をもって体験しているから確かだが、冬なら最初のうちこそガタガタとふるえていても、狭い舞台を踊りではない、あばれまわれば、すぐ解消することですものね。それに比べ夏の暑い日には、油汗と冷や汗をたらたら流して、コーチにしばられて、休憩時にはお水をガブ飲み、そしてまた汗、この間にいったい私は成長しているのだろうか？踊りがうまくなっているのだろうか？洋舞の基礎等、まったくない私達が、おこがましくもうまくなっているなら私達が、おこがましくお客様に対しても失礼だ。そういつて私が懸命に力んでみたところで、現在から急に進歩するわけではない。そこが舞踊のはかな

食物部

いところでもあり、おもしろい所でもある。では、舞踊というものは、ただ黙々と踊って基礎レッスンさえやっていれば、それでうまくなるのか——それだけではダメなのである。たとえばおどりの才能の全くない人（広い世の中でも一人位はいますね。）が一生懸命やったところで、どうにもなるものではないのだ。

落語研究部

落語は民衆の中から生まれ、民衆によって育てられ、民衆の生活と共に今日もなお生き続けているすぐれた芸術である。落語は封建時代の末に発生して、次の時代——資本主義社会——を指向している。そして、未来の社会をどう築いたらいいかということを示唆している。以上の観点の上になつて松高落語研究部は活動が続いている。



るつもりです。文化祭で開いたクラブ食堂の利益、一万円を八王子市にある子供の家に朝日新聞社を通して寄附致しました。

英語部

英語部は一昨年同好会としてスタートし、その実績が認められ、昨年度となった新しいクラブです。そのため伝統もごく浅く、すべてが基礎段階です。それでも同好会当時と比べると内容も充実してきたように思います。

一年間の活動をふり返ってみると、一学期はテキスト中心に行ないましたが、一年生と二年生の間に学力差がありうまくいかず、一年生中心に切りかえ、基礎英語をはじめました。二学期は文化祭の準備に九月・十月を費しました。英語劇「コゼット」をやりました。練習不足のためうまくゆかないこともありましたが、しかし、みんなで協力してやったことは非常によかったと思います。文化祭が終ってから、中心が一年生に移され、活動を計画的にしたり又活動日数も増しました。さらにプレーヤー・レコードの購入や映画鑑賞等によって楽しみながら英語を勉強しました。三学期になつてからは、タイプライターの練

落研というところに「エー、お笑いを一席伺います」をやって楽しんでいる者の集まりと考えられがちであるが、決してそうではない。

今年度の主存活動は、文化祭を中心に発表会を数回開いたことが挙げられる。しかし活動が漸の練習本位に片寄り過ぎたということは、前記のような誤解を招いた原因でもある。私達の研究の目的は、決して落語が上手になろうなどと考えているわけではなく、漸を実際に演って、その中から少しでも落語についての知識を得ようと心掛けていたのである。いわば漸を演るということは研究の一環として、優れた鑑賞眼の持主になろうと努力している訳である。

さて松高落研も今年で五周年を迎え、女子を含めた部員は、この伝統あるクラブをより一層飛躍させようと闘志を燃やしている。昨年は始めての試みとして、文化祭において小冊子「落研」を三百部位発行したが、今年は発行部数をもっとふやし、内容も一般的なものにしようとして企画している。発表会も今までのようにマンネリ化したものと違い、真の落語に対する理解を深めていくように改めて行きたい。



松高に家庭科部ができて以来のことがこの一年間にありました。それは男子部員が入ってきたことです。少ない新入部員の中に入ってきたのですから、私達はひやかしか、興味本位できたにちがいないと思っていました。男子ですから料理の事をよく知らないような時もありましたが、まじめで、教えてあげればよくやって、家に帰ってプリン等を作っているという話を聞いてびっくりしました。私はこの男子に限らず、自分の好きなことがあれば男女を問わず、どんなクラブに入るべきだと思います。

話は変わりますが私達のクラブでは心配な事が一つあるのです。ただでさえも少ない中で来年度までやるという人が数名しかいないことです。色々な方法で誘っているのですが、「たべるだけなら」「後片づけがいや」「自分の都合のつく日にやるのなら」となかなかわかってくれません。私達のクラブをぶすのは残念です。いくらあせっても仕方のないことだと思えます。でも私達はあきらめずに何らかの方法でみんな考え、話し合い、短い期間しかありませんが、より一層努力す



習をはじめました。機械が足りないもので、少ししか練習できませんが、それでも結構楽しくやっています。全体的な反省としては、活動能力が悪かったこと、夏休みを有効に使わなかったこと、部員の集まりが悪かったこと等です。これらを十分に反省し、来年度に望みをもってクラブを向上させようとみなで努力しています。

運動部

バレエ部（男子）

昨年の春、先輩達の作った伝統、バレエ精神、練習体型等を基礎として、我々部員のチーム作りが始まった。はじめは二年生も一年生もコーチに言われるままに、ただ黙々とついていった。しかしチームが一人前のものとなった時は、部員は僅か九名となっていた。暑くギリギリ照る夏の太陽の下で合宿、練習のつらさに耐えぬいた。ある時はあまりの暑さに、吐いたり、貧血を起こす者もあった。そしてどうにか耐えぬいた九名で試合にのぞんだ。だが我々には一つ忘れた事があった。

バレエ部（女子）

我々クラブの活動は、現在あまり活発とはいえず、みながんばってやっている。バレエ部に入つてバレエの技術をみがくことはもちろんであるが、それ以上に精神的訓練が大きい。部の伝統に対し初めはいろいろ疑問を感じたが、今ではやはりいいと思っている。我々のクラブは人数が少ないため、どうしてもひとりひとりの責任が重くなるが、その反面、自分がこでやらねば、という励みにもなる。どうせ誰かがしてくれるだろうという甘い気持ちではバレエ部員として失格だ。

このように述べると大変きびしいクラブのようだが、我々の思う限り楽しいクラブである。この楽しみは自分自身で実際にやってみてはじめてわかるのである。ある一瞬の喜びの為に我々は辛い苦しい練習を続けているのである。

しかしこういう事実の反面、なぜ松高のスポーツ人員が増えないのだろうか。いや減っていくのだろうか。いろいろの理由があるだろう。しかし長い人生で最も心おきなくスポーツにうちこめるのは高校時代しかないのではないだろうか。

我々は、たとえ部員は少なくともこの考えに理解を持つ人々、また新一年生に期待してこの松高バレー部を向上させてゆきたい。

剣道部

一昨年の剣道部は、今の二年生の入部が少ないうちに、危く解散になると思われた。しかし一年生の入部が多かったため、なんとか解散するのは避けられた。この傾向を今度の新入生にも続けてもらって、多数の入部者があるように努力していきたい。松高の運動部の中での剣道部の比重はまったく少ない。こ



ます。今までのこの柔道というスポーツに全身をうちこんできた我々柔道部員はもちろん卒業生までもこの効果を身につけ、社会あるいは大学へ出て行きました。

又、柔道は球技等と違い一対一で戦うので、チームワーク等関係ないようにはみえますが、たとえ一緒に戦わなくても互いに緊張や勝利の喜びを味わう所は他のスポーツと同じです。我々は、戦わずして勝つドッシリした人間の厚みをおのずと作る目的をもってこれから努力して行くつもりです。

バスケット部 (男子)

今までの成績を見てみると、目だったものがない。我々は二年ひとり、一年七人という部員構成で活動を行ってきた。だから必然的に一年中心とした活動内容になり、夏季大会(一年)、新人戦を目標にした。しかし二年間活動を共にしたものと、一年しかやっていないものとは、そのチーム内容に差が生じてくるわけである。またバスケットは、い

れは活動が活発でないのだからしかたがない。しかし皆好きでクラブに入ったのであるから、少しでもいいからクラブのことを考えてがんばって欲しい。

昨年は対校試合を二回しかなかった。しかし今年からは試合数を多く、また本校での試合をしていきたい。一年が二年に進級するころ、どここのクラブでもそうであると思うが、一年の出席率が悪くなる。いろいろな理由があると思うが、みんなでなんとか解決していきたい。普通の学校生活では得られないものが得られるようなクラブにしたい。

山岳部

今年一年の山岳部としての山行は、あまり多いとは言えなかった。その理由として、二年生が少なかつたこと、一年生が順番に入ってきたこと等がある。昨年の四月には一年生がひとりしか入っていなかったもので、その時はどうなるかと思つたが、九月までに十人入ってきたので、ひとまず安心である。さらにもう一つの理由として高校生の冬山登山禁止令がある。これにはいろいろの問題があると思うが、ともかく冬山のすばらしい美し



くらプレーのうまいものが一名くらいいても、それが勝ちにつながることはなかなかない。チームワークの大事なゲームだけに、コンビネーションの悪さということも目についた。これが不振につながっていたと思う。部は停滞しているほうではないが、部員の数が少ない為、本来行うべきはずである基本的総合練習等を行う機会も少なくなるし、部員の意気も思うようにあがらない。しかしこの頃は試合に負けてはいるが内容はよくなつてきており、試合はこび等もうまくなつてきている。まだまだ伸びる力が多く残されている。

これからの活動について考えてみると、一番感じる事は、もっと部員の数が多い状態で活動を行いたいということである。それから基礎体力は徐々に付けているのでよいとして、もっとフォーメーションの研究を押し進め、又難点のあるディフェンスにも重点をおいていきたいと思う。特に最近になって始めたマンツーマンディフェンスをうまくしたい。又練習試合を多く定期的に行つて、いままでの練習の成果をみると共に、まだ欠けているものを見つけ、平常における練習の課題とし、練習時に常に注意を払つてこれを

さを見ることができなくなったのは残念である。

このような中でも、七月から八月にかけての夏山合宿の湯俣川、五郎小屋、薬師の雲海等、非常に印象深いものであった。このほか丹沢等にも数回行ったが、いずれも天気に恵まれなかった。

四月からの目標として、だれでも入りやすいクラブにしたい。山岳部は歩間違えば自分の生命に関係している。従つて肉体的にも精神的にも最も高度のものが要求される。それだけにまたやりがいのあるクラブである。「御大将・加藤先生」のもと、さらに充実したクラブにしていきたい。

柔道部

柔道は普段の練習を見ると荒っぽい野蛮なスポーツのように思われがちですが、少しでもやったことのある人や知っている人から見れば、これが本当のスポーツだと言いたくなるようなものです。我々の健康増進には何よりのスポーツであり、やっているうちに自然と正義・礼儀を重んじ、信念の為には苦難にめげないようになる精神的な効果も出てき

行つていきたい。一年生はまだプレーの内容が少ないので多くを知り、プレーを多彩なものにしたい。まだ試合等から得たものを土台として、これからの活動というものはもっと活発化したものとなっていくと思う。

バスケット部 (女子)

私達女子バスケット部は、現在二年生四人、一年生四人が活動しております。人数が少ないのが欠点ですが、一人一人がんばっております。

ことし一年をふり返ってみますと、関東大会、インターハイ、国体、新人戦と四つの大会に出場し、一試合ごとに向上してきたように感じます。一つの試合にも人数の少ないことが痛感され、もう少し多くの人が入ってくれたらと感じます。去る一月十五日より行われた新人戦では、一試合目五七対一八と楽勝、二試合目一七対一六と激戦の末勝ち進みましたが三回戦目二七対二〇でおしくもやぶれました。この試合とても人数負けの感があり、技術としては少しも劣っていないかったと感じております。

これからの練習方針は、五対五の実戦的な

練習不足を補うため、体力をつくり、パスワークを完全にすることです。練習試合を重ね、少しずつ考えたバスケットをしていこうとしています。今度の新入生が少しでも多く、この楽しいバスケット部に入ってくれることを願ってやみません。

ワンダーフォーゲル部

昨年のワンゲル部の人数は三十数名と一応理想的な人数であった。第一の目標にしたことは、活動を活性化することであった。第二の目標は昨年の内に松高ワンダーフォーゲルのカラーを作ることであった。これらは一応果たせたようである。

その年のワンゲル部の活動成果は、合宿に集中して現われる。だから六月の丹沢合宿の成功には全力を注いだ。新人入生にとっては初経験だったのに、相当の失敗がでた。しかしこのボッカが、合宿のバックボーンになったことは、確かであった。

ワンゲルということについては例のシゴキ事件以後いろいろと論じられたが、これらはいくら論じてもその本質は実際に部員として活動に参加しなければわからない。そ



件に形成せねばならない。この点が、我々がラグーとして誇りを持つ所以なのである。

ソフト部

今年で松高のソフト部も設置されてから八年目を迎える。女性だけの男性的クラブとして週四回の練習をしている。昨年一年間の試合内容は、五月三日の山脇学園との親善試合と、秋の四谷商業との試合で勝っただけの寂しいものだった。ここに今年のソフト部の方針を幾つかあげ、がんばってゆきたい。

まず第一に、今まで数々の試合をしてきたが、他校は本校と並べると何か違うものがある。他校の生徒は試合中にみな闘志に燃えた真剣な顔をしている。それを学ばねばならない。本校には精神的な何かが足りない。技術面ももちろんだが、それよりまず先に精神的に進歩していくように努力していきたい。次は、まず各自がそれぞれ違うだろうがクラブは何のためにしているのかその目標をしっかりと決める。ただなんとなくしているのでは意味がない。その目標に常に一歩でも近づくように努力する。そうすれば、それが心の支えになってどんなに苦しい事があってもそれを

これは実際に参加した者だけが真に論ずることができるのであって、傍観者がとやかく言うべきものではない。ワンゲルのことを間違えて理解されては迷惑である。

冬はワンゲルの活動がブランクになってしまふ。これをどうにかしたい。活動は一昨年に比べかなり活発になった。新入生歓迎会・丹沢ボッカ・合宿・秋山・それに三年生追出し会。山行きは二ヶ月に一回という最初の目標は達成できなくても一応満足できるだけの回数は山に行った。今年は一・二回増すつもりである。躍進せよワンダーフォーゲル

ラグビー部

今年度にはいつてから、我々のクラブには大きな問題が生じた。それまで主力であった三年生が事実上活動不可能となり、二年が主体となったのだが、試合に最低必要な十五人にも満たない人数で活動を始めなければならなかったのである。人数の拡大を計ったが、学業との両立の問題などで入部するものがほとんどなく、それも思うようには進まなかった。この状態の中で、我々はチームを高め

克服できるだろう。

第三は、ソフトボールは個人プレーではない。チームワークが肝心である。一人でも心が外にあったのではどんな事態が起こるかわからない。みんな心を一つにしてがっちり団結していかなければならない。

各自が自律のもとに行動し、よく助け合い、よく団結し・礼儀正しく、自己の最善を尽し、責任と義務を果すように心掛けてゆきたい。

卓球部

四月に二十七名入部した新入生は、四月から六月までのハードトレーニングによって十三名も退部してしまった。しかし六月に本校で行われた第一回五校対抗試合では、個人、団体共に優秀な成績を修めた。この五校対抗試合では、いろいろ苦勞して毎年行うことができるようになった。それと一つ一つの成果は、全般的にレベルがあがったことである。特に先輩たちがどうしても勝てなかったK高に完勝したことが光っている。

これからの抱負は他校の部に負けない強い精神を持ったクラブにすることである。また松高卓球部の伝統を築く出発点にしたい。今

ていくためには、一人一人がしっかりととした競技者でなければならないことを知った。しかし実際はチームとしてのまとまりに欠け、又大きな弱点として精神的に軟弱であった。やはり当初は、三年生に何かと頼ることが多く、一、二年でチームを盛りたてていくという気持ちの薄かった。練習も密度の低いものであった。しかし夏季の合宿、秋に行われた全国大会予選と経過していくうちに、我々のチームは一、二年だけのまとまりができてきた。ラグビーは最終的にはやはりチームプレーである。従ってチームワークが重要な問題となってくる。個人だけでトライはなし得ない。常にフォワードの突進、バックスの正確なパスがあつて初めてなし得るのである。

現在、クラブの人数は一チーム組むことができる数には達しているが、全体的な力のまとまりが未完成である。今後の我々の課題は日常の練習をいかに消化し、いかにして実力をつけていくかという点にある。

我々は、ラグビーをやる人総てがそうであるように、それぞれラグーとして誇りを持っている。ラグビーは、汗や泥にまみれ傷だらけになることを容赦なく要求する。そこで我々はそれに耐え得るだけの強靱な精神を無条

までのクラブ生活では強く固い精神、伝統を築くという部員の発展が見られなかった。

伝統とは、簡単に築き得られるものではない。五年・十年長い年月に及ぶ顧問の先生、部員の苦勞から生まれるものではないだろうか。そのようにして生まれた伝統は、容易にくずれることのない強いものとなっていくにちがいない。部員のひとりひとりが自分の立場を自覚し、協力しあうクラブ、そのようなクラブであつてこそはじめて根強い、偉大な伝統を生み出すことができるのではないか。今年こそクラブの雰囲気をもこのようにして伝統を築きはじめる出発点としたい。

テニス部

テニス部の一年間を日誌をみながら振り返ってみよう。浮かんでくるのは悪い点ばかり、良かった点というものは目立たないものである。まず最初にあげられるのは、練習を日常生活の中に取り入れることができなかったことである。そのため一学期女子が五・六人やめた。二年女子はちょうど技術が向上していた時期だったので惜しい気がした。一年の対策に計画性がなかった。クラブの方針と

しては最初が肝心だからビビシやるつもりでいたが、具体的な事が決まっていなかったためうまくいかなかった。練習日は男女共週四日であった。毎日参加するものはきまっていたようであるが、全般的に参加者は多かった。そのため練習内容はコート一面で三十人以上の部員を練習させる為、おもいきったことや、時間のかかることはできずマンネリ化してしまった。残念なのは練習の時、参加者が多いわりにあまり活気がなかった。ライバル意識も欠けていた。またみんなが練習に出てボールを打つせいか、ボールのパンクが目立って多かった。これは後代の値上げと共に部費や予算のやりくりをくるわしてしまつた。

さて、ここいらで、よかったと思われる点を上げてみよう。まずは合宿から、コートはあまりぐまれなかったが、山中湖において行った。練習は充実していたし、部員の協力やばいあいがみられ成功したといえる。春秋の五校対抗は、男女共成績がよかった。男子は春に優勝と四位、秋に二位と四位を、女子は秋に二位と三位を個人戦において獲得した。大会における実績も徐々にあがっており、東京都で男女共中の上位に位置して



いる。それに男子がことしはじめて新人大会でシードになった。しかしそのチームは、僅かな時間ではあったが遅れて棄権の処置をうけ、新人戦には出場できなかった。時の大切さということ、身をもって知らされた貴重な経験だったと思う。コート整備もゆきとどき、冬休みも支障なく練習できた。一番よかったことは四月から「テニス部日誌」を書き、それによって各部員が、自分以外の人のテニス部やクラブに対する考え等を知る一つの役割をはたした。

野 球 部

現在、日本で一番国民に普及しているスポーツは、なんといっても野球だと思えます。野球は、チームプレイという言葉につきます。野球をしていると、責任感が強くなり、協調性、いつでも明朗であるという社会性が自然に身につけてきます。体力はもちろん

陸 上 部

六十五年四月よりクラブとして発足した。



けれども部員不足は、人数を要するクラブの為、切実な問題となった。昨年一年間は発足当初の為、活動方法に計画性がなく、校内全般での宣伝不足が影響したのであろう。クラブの性格上どうしても野球、バレー等と異なり、世間一般にも宣伝されていない。しかし全ての運動の基礎をなすのが我クラブであり誰でもどこでも容易に行なうことができる、もったもてるからかえってこれを軽視するということになるのかもしれない。やってみると思うほど簡単なものでなく、もっと鍛える必要のあることに気づくであろう。

活動内容は、他のクラブに比べごく単調である。走る・飛ぶ・投げる・その内でも走ることが主体になっている。しかし単調なものの中からそれに耐えうる忍耐力と精神が芽ばえてくるので、これに勝るものはないと確信する。成果は都下において行なわれている二回の大会に現われる。昨年は短距離走者四名が出場し、いずれも記録的に入部当時よりすばらしい成績を上げた。その他体育祭においてはさすがの強みをみせた。

練習上の問題として十分に運動場を使えないことがあげられる。そのため走り込むということができず、そこに自然と体力的に限界

がみられたり、時間のロス、内容の充実性を欠き、容易な気持ちで活動を行なったことは失敗であった。以後慎重な計画をねり内容の充実をはかってゆきたい。終りに我々はスポーツを通じて青年の情熱と力をぶつけ、我々の能力を高めてゆくのではない。そして心の奥深くに刻みつけようではないか。

今後のル・クールについて

一体「生徒会誌」とは何だろう。私たち編集委員にとつて、最初でかつ最も重要な問はこれでした。私たちは、たつたこれだけの間に実に一週間もの月日を費ひやしたのです。

生徒手帳をみてみると、(常任委員会規定第十七条 文化委員会)④生徒会誌「る・く」の発行とあります。その他には「一字一字たりともる・く」については、規約に印されています。私たちは、少くとも、規約をたよりすることは不可能でした。

私たちは、色々討議の結果、「生徒会誌」をこのように考えるようになりました。私たちは「生徒会誌」の生徒会を、規約に

のこと精神力、頭脳鋭敏、努力が必要な、スポーツの一種です。

さて、松高野球部の歴史は松高創立以来のもので、クラブの中でもっとも古いものです。最初は硬式野球であったが、数年前から軟式野球に変更して現在に至ります。

現在の部員は二十三名、練習日数は週四日で、夏には各宿を行ないます。この合宿は例年山田温泉で行なっています。ここでは毎朝六時に起き、朝のトレーニングをはじめとして、炎熱の太陽にさらされながら真黒になり、汗をふきながら夜になるまで続けられます。この期間は部員にとって苦しくもあり、又楽しい時もあり、高校生活における有意義な思い出になると思います。

公式試合は年に四回行なわれます。参加校は都内だけでも百校以上もあります。

昨年は三回戦までしか進めませんでした。今年は、バッテリーをはじめ部員一同一生懸命練習にはげみ、成績もよくしてゆきたいと思っています。

ある、生徒会と判断しました。すなわち、生徒総会を最高機関とする生徒会の雑誌と判断したのです。

私たちにとつて、最も重要だったのは、過去の慣習でした。現在残っている生徒会誌はあくまで文芸的なものでした。(生徒会誌というより、私たちはむしろ同人雑誌といった方がいいと考えています)

私たちは、過去の先輩たちが、どうして、文芸的なものにしたのか、必至になつて、調べました。しかし依然として、原因はわかりませんでした。なぜなら、彼らは私たちに、一枚の印刷物すら、残していかなかったからです。

私たちは、私たちの手で「生徒会誌」を作らなければ、と感じました。私たちは、そのような、記録物が何もない現在、私たらは、慣例に従わなくてはならない必然を何らそこに発見し得なかつたのです。

かくて、私たちは、編集を始め、おわりました。

私たちは、この「る・く」の此判は後輩にゆずり、私たち自身がこれを発行するに当つて、今後、こうした方がいいのではないかと

という提言をここに明記しておきたいと思ひます。

私たちは「る・くる編集委員会」という文字が生徒規約にないにもかかわらず、ここに「る・くる編集委員会」と明記したことに関して、ここに、その旨を最初に明らかにしたいと思ひます。

まず第一に、編集するのに委員会全体は余りに大きいということです。私たちは文化祭以後、その主体を一年にゆだね、委員会の仕事を、「る・くる」と「映画会」に分化しました。ここにおいて、編集員数は当然、委員数をはかるに下まりました。

第二には、編集という仕事は、たいそう長い期間かつて、しかも、根気が非常にいる。追い込みの頃は家にもつて帰るという事態は避けられない。ここにおいて、「やる」意志のないものは、少くとも、編集として各クラスから選ばれたのなら、たいして問題はないのですが、そうでないときています。しかも委員会は「文化祭」でエネルギーをたいそう使ったあとでしたから、やはり「やる」気のあるものではなくては出来ないということです。

第三は、こが重要なのですが、委員以外

の有志の参加を認めたということです。やはり、広く一般生徒から意見を聞くという意味合いにおいても、このことは必要でした。

かくして、編集員は、二年四名、一年九名というメンバーで、そのうちに半数の六名は一般という事でスタートをきったのです。

私たちが今、一番感じることは、やはり、「編集委員」を各クラスから一名ぐらいつつだすということです。そうすれば、四月からスタートがされるのです。今のように仕車の多い文化委員会では、それは不可能です。私たちはこの人達にまずこの「編集委員」を各クラスから選出することを提案したいと思ひます。

生徒会誌はやはり、生徒会の次の段階への足場になるような性質でなければいけないと思ひます。私たちは今回、本当に短い期間で、インスタントな仕事をしてしまいました。が、いい仕事は、やはり夏休み以前から始めなければ無理だと思ひます。このことを第二の提案とします。

第三は費用のことですが、印刷は学校外へのむという形になるので、見積りをあやまらないように、今年のように、予算の

ル・クール編集後記

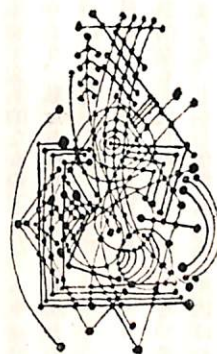
一九六五年二月十日第一四号生徒会誌ル・クールはもはや印刷を待つばかりになりました。思えばまだ文化祭の気分のぬけきらない十一月のことです。ル・クール委員会は発足したものです。それから何回ものMEETINGをかきね、アンケートを取り、試験休み、冬休み……いまだで数名の委員達は私たち生徒会の向上、しいては高校生活の向上をねがって走りまわったのです。

私達は三月 日、それを発行しようとしています。発行されたル・クールは機関車のように生徒会を生徒全体を引っぱって行くのです。生徒会総務はほとんどカマに石炭をたたきこみ、それによって沸騰させられ、水である生徒会員はピストンをシュッシュ、ポッポと動かします。そして生徒機関車は、快足で急速で、常に走りつづけるのです。私達は、勉強という機関車の整備も、おこたりませんし、油もちゃんとさします。そして常にはしります。それでもこわれたらもつとすばらしい機関車を作りましょう。もつとよい私達の生徒会誌「ル・クール」を作るのです。石炭をきらしてはいけません。水は無敵です。電気機関車の時代まで水がタービンを回す、生徒会員全部が自主的に生徒会活動に参加するようになるまで、石炭をたたきこみましょう。その機関車の線路は無敵です。日本中に、全アジアに、世界中に、そしてはてしない宇宙にも私達の線路はのびてゐるのです。私達高校生にはかぎりなき未来がまっています。若い力と、情熱とで、かぎりなき未来をより明るくするように努力しようではありませんか。

尚、「ル・クール」第14号作製に当り、多くの原稿を載せ、紙面の関係上その一部を割愛せざるを得なかったことを御諒承下さい。

変更なしのように、万全の注意を払って当つて下さる事をお願いしておきます。

私たちが、一番、悲痛に思つたのは、「読まれていない」ということでした。それは、書く人がきまっていたというところにも原因があつたようです。又、受けとる側にも「つまらない」という先入観念的なものがあったことも否定できないのでしょうか。



編集委員

二年		一年	
小野	由利子	佐藤	美津子
山崎	安成	丸山	剛史
佐久間		後藤	有司
柴田	真代	佐藤	美紀子
武井	都子	谷口	清義
野崎	修一	羽根田	宗田
宗田	以上(あいう順)		
表紙		内表紙	
美術	志津雅美	志津雅美	志津雅美
カッ	水沢資夫	水沢資夫	水沢資夫
顧問	矢沢也夫	矢沢也夫	矢沢也夫

ル・クール(第十四号)

昭和四十一年三月三十一日発行

編集 松原高校生徒会文化委員会内

発行 東京都立松原高校生徒会

東京都世田谷区上北沢一ノ四二九

株式会社 富司見巧芸印刷社

東京都新宿区早稲田鶴巻町二〇〇

松高生徒会